

上ノ国町

小^こ岱^た遺跡

—八幡野第一地区道営農免農道整備事業用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

昭和 60 年 度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



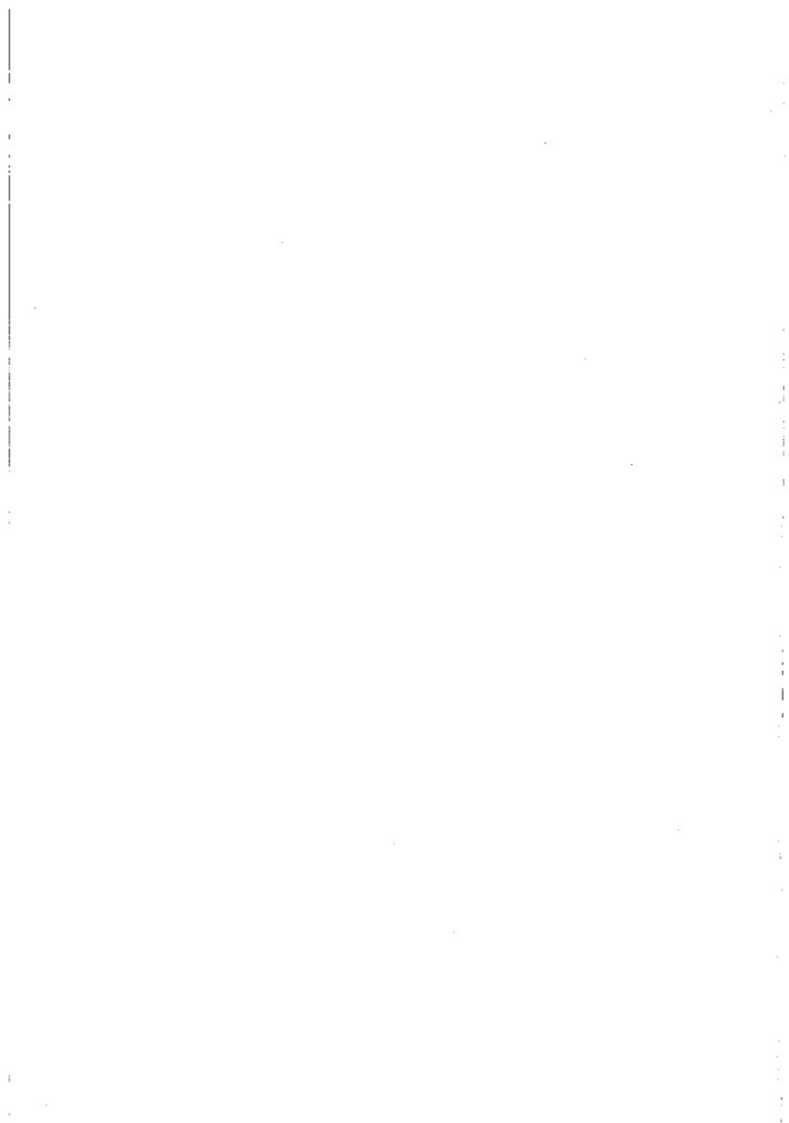
上ノ国町

小^こ岱^{たい}遺跡

—八幡野第一地区道営農免農道整備事業用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

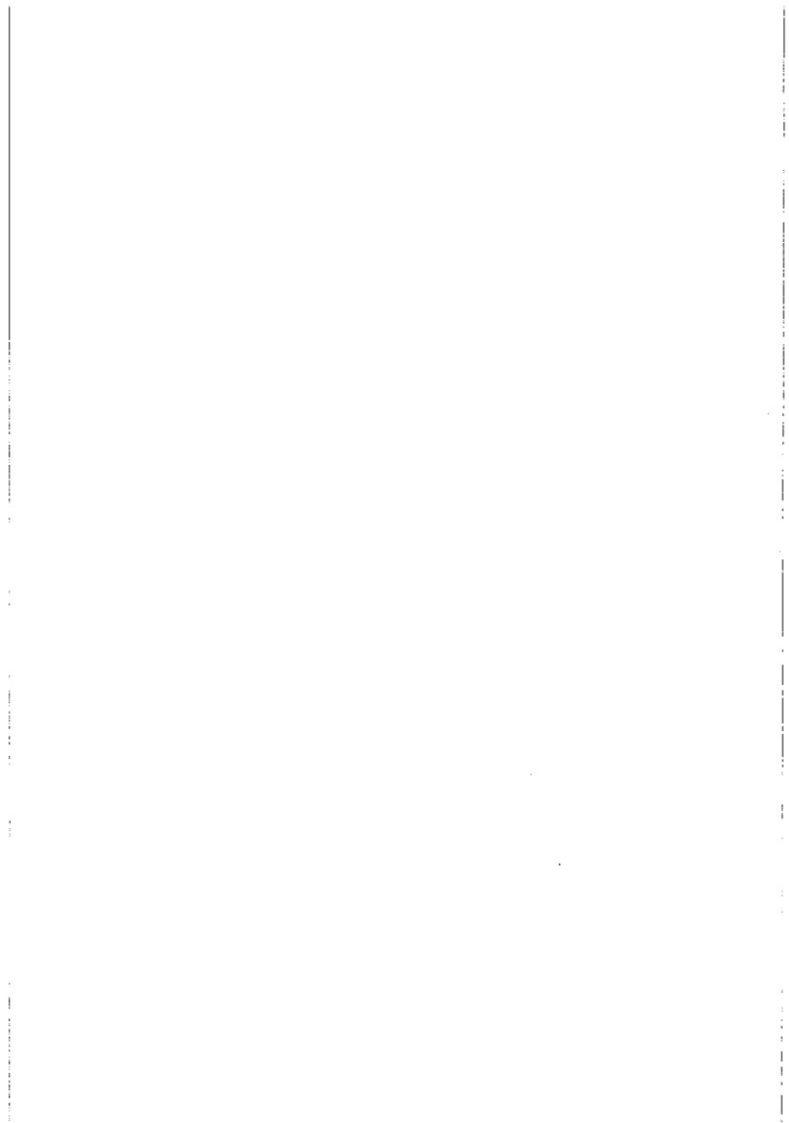
昭和 60 年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



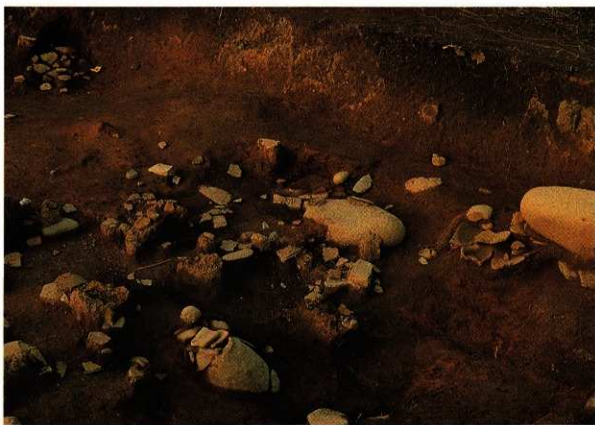


空中写真（写真中央下方の道路左側が小笠道跡）

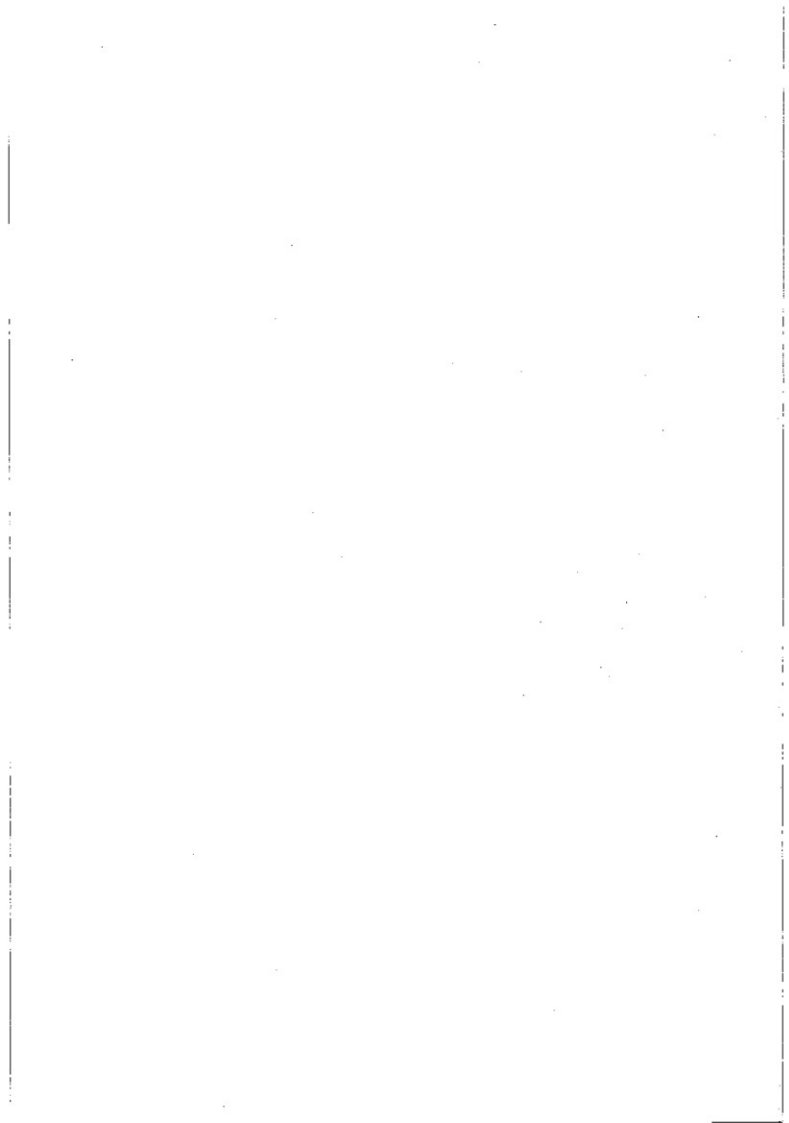




雙穴住居跡 (KH-8a・KH-9a)

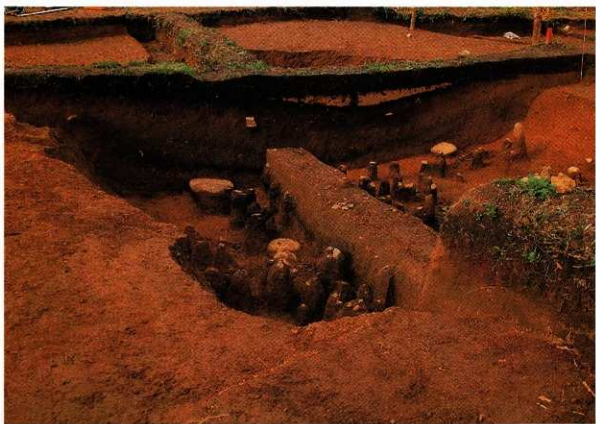


KH-9a 内遺物出土状況





竪穴住居跡 (KH-6)



竪穴住居跡 (KH-6) の土層断面

例 言

1 本書は、松山郡上ノ国町における八幡野第一地区道管農免農道整備事業用地内埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2 発掘調査及び報告書作成にあたっては、上ノ国町教育委員会及び上ノ国町役場耕地課の協力を得た。また次の諸機関及び人々の指導・助言を受けた。(順不同・敬称略)

上ノ国町勝山館調査事務所, 上ノ国町郷土館, 上ノ国町老人福祉センター
松崎水穂, 齊藤邦典, 藤島一己, 三浦孝一, 柴田信一, 森 広樹, 田辺 淳。

3 本書の作成は、調査を担当した財団法人北海道埋蔵文化財センター調査部調査第三班が行った。文責者は、次のとおりである。

鬼柳彰 I-1~5, II-1~3, III-KH-7・10・11・13, KP-15・16・20・27・28,
KS-1・焼土, IV, V-3。佐藤和雄 I-6-a, III-KH-1・2 a・2 b・3・4・
5 a・5 b・6・8 a・8 b・9 a・9 b, KP-1・2・5・8・17・19・23・29・30・31,
V-1, 動物遺存体について。谷島由貴 III-KH-12・14, KP-9・10・11・12・14・18・
21・22・24・25・26, 小ピット群, 炭化物堆積層, 地すべり跡。石川朗 I-6-b, V-2。

4 花粉化石の分析については、北海道開拓記念館山田悟郎氏に依頼した。

5 動物遺存体については、早稲田大学金子浩昌氏の鑑定を受けた。

6 本書では以下の略号を使用した。

遺構 KH: 竪穴住居跡, KP: 土塹, KS: 石囲い炉, KF: 焼土

土塹のうちKP-3・4・6・7・13は欠番である。

石器の岩質 And.: 安山岩, Ba.: 玄武岩, Ba.-Sch.: 黒色片岩, Che.: 珪岩, Dior.: 閃緑岩,

Gr.-Mud.: 緑色片岩, Obs.: 黒曜石, Pum.: 軽石, Sa.: 砂岩, Ser.: 蛇紋岩, Sh.: 頁岩。

8 図版の縮尺は原則として次のとおりである。

遺構 1:40

土器 1:3, 剥片石器 1:2, 礫石器 1:3 (ただし住居跡出土の台石・石皿は1:6,
包含層出土の石斧は1:2)

9 土器実測図の中心線の区別は次のとおりである。

土器を回転させずに実測したもの: 実線

90度あるいは180度回転させて実測したもの: 1点鎖線

任意に回転させて実測したもの: 点線

目 次

I 調査の概要	1
1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査に至る経緯	1
4 発掘区の設定と調査の方法	2
5 調査結果の要旨	3
6 遺物の分類	4
a 土器	4
b 石器	4
II 遺跡の概要	8
1 遺跡の環境	8
a 遺跡の位置	8
b 遺跡の立地	8
c 周辺の遺跡	9
2 基本層序	11
III 遺構と遺構内出土遺物	12
発掘の経過	12
a 調査区北斜面の発掘	12
b 調査区中央部から南斜面の発掘	12
1 竪穴住居跡	18
2 土壌	95
3 その他の遺構	112
炭化物堆積層	114
地すべり跡	115
IV 遺構外出土の遺物	116
V まとめ	139
1 土器について	139
2 石器等について	144
3 遺構の構築時期及び遺跡の広がり	147
動物遺存体について	149
小岱遺跡の古植生について 山田悟郎	150

挿 図 目 次

<p>図Ⅰ-1 発掘区設定図……………2</p> <p>2 遺跡の位置……………7</p> <p>図Ⅱ-1 遺跡の地形……………10</p> <p>2 土層断面図……………11</p> <p>図Ⅲ-1 遺構位置図……………14</p> <p>2 遺跡主体部の地形……………15</p> <p>3 遺跡主体部の遺構位置図……………16</p> <p>4 KH-1……………17</p> <p>5 KH-1出土土器……………18</p> <p>6 KH-1出土石器……………19</p> <p>7 KH-2 a……………20</p> <p>8 KH-2 a出土土器……………21</p> <p>9 KH-2 a出土石器……………21</p> <p>10 KH-2 b……………22</p> <p>11 KH-3……………23</p> <p>12 KH-3出土土器……………24</p> <p>13 KH-3出土石器……………25</p> <p>14 KH-4……………26</p> <p>15 KH-4出土土器……………27</p> <p>16 KH-4出土石器……………27</p> <p>17 KH-5 a・5 b……………28</p> <p>18 KH-5 a出土土器・石器……………29</p> <p>19 KH-5 b出土土器・石器……………29</p> <p>20 KH-6 遺物出土状況……………31</p> <p>21 KH-6……………32</p> <p>22 KH-6出土土器……………34</p> <p>23 KH-6出土土器……………35</p> <p>24 KH-6出土土器・土製品……………36</p> <p>25 KH-6出土石器……………37</p> <p>26 KH-6出土石器・石製品……………38</p> <p>27 KH-7……………39</p> <p>28 KH-7出土土器……………40</p> <p>29 KH-7出土土器……………41</p> <p>30 KH-7出土石器・石製品……………42</p> <p>31 KH-8 a……………43</p> <p>32 KH-8 a出土土器……………44</p> <p>33 KH-8 b……………45</p> <p>34 KH-8 b出土土器……………46</p> <p>35 KH-8 b出土土器……………47</p> <p>36 KH-8 b出土石器……………48</p> <p>37 KH-8 b出土石器……………49</p> <p>38 KH-9 a出土土器……………51</p>	<p>39 KH-9 a……………52</p> <p>40 KH-9 a……………54</p> <p>41 KH-9 a遺物出土状況……………56</p> <p>42 KH-9 a出土土器……………58</p> <p>43 KH-9 a出土土器……………59</p> <p>44 KH-9 a出土土器……………60</p> <p>45 KH-9 a出土土器……………61</p> <p>46 KH-9 a出土土器……………62</p> <p>47 KH-9 a出土土器……………63</p> <p>48 KH-9 a出土石器……………64</p> <p>49 KH-9 a出土石器・石製品……………65</p> <p>50 KH-9 a出土石器……………66</p> <p>51 KH-9 b出土土器……………67</p> <p>52 KH-9 b……………68</p> <p>53 KH-9 b出土土器……………70</p> <p>54 KH-9 b出土石器……………71</p> <p>55 KH-10……………72</p> <p>56 KH-10出土土器……………73</p> <p>57 KH-10出土土器……………74</p> <p>58 KH-10出土石器……………75</p> <p>59 KH-11……………77</p> <p>60 KH-11出土土器……………78</p> <p>61 KH-11出土土器……………79</p> <p>62 KH-11出土土器……………80</p> <p>63 KH-11出土石器・石製品……………82</p> <p>64 KH-12……………83</p> <p>65 KH-12出土土器……………84</p> <p>66 KH-12出土土器……………85</p> <p>67 KH-12出土土器……………86</p> <p>68 KH-12出土石器……………87</p> <p>69 KH-13……………88</p> <p>70 KH-13出土土器……………89</p> <p>71 KH-13出土土器……………90</p> <p>72 KH-13出土石器・石製品……………91</p> <p>73 KH-14……………92</p> <p>74 KH-14出土土器……………93</p> <p>75 KH-14出土石器……………94</p> <p>76 KP-1……………95</p> <p>77 KP-1出土土器・石器……………95</p> <p>78 KP-2……………95</p> <p>79 KP-2出土土器……………96</p> <p>80 KP-5……………96</p>
---	---

図III-81	KP-5 出土石器	97
82	KP-8	97
83	KP-9	97
84	KP-9 出土石器	97
85	KP-10	98
86	KP-10 出土石器	98
87	KP-11	98
88	KP-11 出土石器	98
89	KP-12	99
90	KP-12 出土石器	99
91	KP-14	99
92	KP-14 出土石器	99
93	KP-15	100
94	KP-15 出土石器・石器	100
95	KP-16	100
96	KP-16 出土石器・石器	101
97	KP-17	101
98	KP-18	101
99	KP-18 出土石器・石器	102
100	KP-19	102
101	KP-20	103
102	KP-21	104
103	KP-21 出土石器・石器	104
104	KP-22	104
105	KP-23	105
106	KP-24	105
107	KP-24 出土石器・石器	105
108	KP-25	106
109	KP-26	106
110	KP-26 出土石器	106
111	KP-27	107
112	KP-27 出土・石器	107
113	KP-28	108

114	KP-28 出土石器・石器	108
115	KP-29	109
116	KP-29 出土石器	109
117	KP-30	109
118	KP-30 出土石器	110
119	KP-30 出土石器・石器	111
120	KP-31	111
121	KS-1	112
122	KS-1 出土石器	112
123	小ビット群	113
124	炭化物堆積層	114
125	地すべり跡土層断面	115
図IV-1	遺構外出土石器	116
2	遺構外出土石器	117
3	遺構外出土石器	118
4	遺構外出土石器	119
5	遺構外出土石器	120
6	遺構外出土石器	121
7	遺構外出土石器	122
8	遺構外出土石器	123
9	遺構外出土石器	124
10	遺構外出土石器	127
11	遺構外出土石器	128
12	遺構外出土石器	129
13	遺構外出土石器	130
14	遺構外出土石器	131
15	遺構外出土石器	132
16	遺構外出土石器	133
17	遺構外出土石器	134
18	遺構外出土石器	135
19	遺構外出土石器製品・土製品	136
図V-1	遺構外出土石器分布図	142
2	遺構外出土石器分布図	143

I 調査の概要

1 調査要項

事業名 八幡野第一地区道営農免農道整備事業用地内埋蔵文化財発掘調査
事業委託者 北海道松山支庁
事業受託者 財団法人 北海道埋蔵文化財センター
遺跡名 小岱遺跡(北海道教育委員会 C-02-24)
所在地 松山郡上ノ国町字勝山128-1ほか
調査面積 2,060 m²
調査期間 昭和60年6月1日～昭和61年3月31日

2 調査体制

財団法人 北海道埋蔵文化財センター	理事長	植村 敏
	専務理事	山本慎一
	常務理事	藤本英夫
	業務部長	間宮道男
	調査部長	中村福彦
	調査第三班長	鬼柳 彰(発掘担当者)
	文化財保護主事	佐藤和雄
	嘱託	谷島由貴
	嘱託	石川 朗

3 調査に至る経緯

松山支庁は昭和59年度から4カ年計画で、上ノ国町字勝山161番より八幡野を経て、大崎230番に至る延長約5.8kmの町道を道営農免農道として整備することを計画、すでに一部で工事が実施に移されている。工事概要は、現町道の拡幅、盛土、急勾配及び急カーブの改修等である。

工事計画区域には、周知の埋蔵文化財包蔵地として小岱遺跡及び大崎A遺跡があることから、松山支庁は事業策定にあたって、昭和58年10月北海道教育委員会と埋蔵文化財保護のための事前協議を行ない、包蔵地の範囲確認を要請した。上ノ国町教育委員会は北海道教育委員会の依頼を受けて、同年11月小岱遺跡の範囲確認調査を行なった。その結果、本遺跡は主体部が畑地として利用されているが、遺物包含層が深く、保存状態が良好であること、さらに遺跡の東端部が工事計画範囲にかかることが判明した。また周辺の分布調査が不十分な状態にあることから、工事計画路線に沿って包蔵地所在確認調査もあわせて行なわれ、小岱遺跡より南側の丘陵上に2カ所の埋蔵文化財包蔵地(大岱沢A・大岱沢B遺跡)が発見された。

これらの調査の結果をうけて再度協議が行なわれ、小岱遺跡については遺跡の一部が現況町道の急勾配・急カーブの改修工事部分にあたり、工法の変更等が不可能であることが明らかになった。

本遺跡は以上の経緯をふまえて、記録保存のための発掘調査を実施することになったものである。

4 発掘区の設定と調査の方法

発掘調査にあたっては、道路工事予定地の幅杭R 11とR 12を結ぶ直線（グリッドOライン）とR 12でこれに直交する直線（グリッド25ライン）を基準線として、調査区全域に一辺5mのグリッドを設定した。各グリッドは、それぞれ北西隅の交点の記号をもって、その呼称とした。

発掘を進めるにあたっては、まず調査区全域にグリッドラインに沿ったトレンチを5mないし20m間隔に設定して、掘り下げを行った。これは、土層の確認及び遺構・遺物の分布状態を把握するためのものである。これによって、グリッド21ライン付近を境に北半部と南半部では、遺跡の性格に差異のあることが想定されたため、地区を北方と南方に分割して、グリッド調査を開始した。また土層の判別にあたっては、困難が予測されたため、各グリッドにはすべて西側と南側に土層観察用の畔（幅50cm）を残すことを原則とした。

遺物の取り上げにあたっては、遺構内のものは、位置・高さ・層位を記録したが、遺構外の場合は、グリッド名と出土層位のみを記録した。

調査前の地形については、微地形を把握するために、20cm等高線図を作成した。

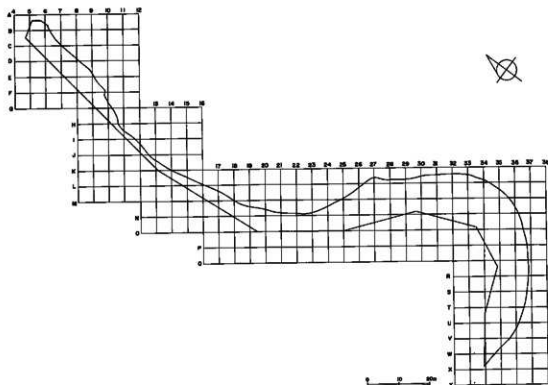


図 I - 1 発掘区設定図

5 調査結果の要旨

発掘された遺構は、竪穴住居跡14軒、土壇26基である。このうち住居跡6軒と土壇1基は調査区北端の斜面裾部にあるが、このほかはすべて調査区中央南よりの平坦部から南斜面にかけて分布している。住居跡のうちKH-9aは長径約14m、短径推定約6.2mの大型住居跡である。また土壇のうちKP-27は墳底から、人骨の一部がわずかに検出されたため墓壇と判断した。またKP-16・20は深さ約1.8mのフラスコ状ピットである。これらの遺構は出土遺物、あるいは掘りこまれた層位から判断して、縄文時代中期前葉から後期前葉のものと考えられる。

出土遺物は遺構内・遺構外を含めて約8万点(破片数)である。土器は縄文時代晩期のもの一個体を除くほかは、すべて中期前葉から後期前葉に相当する。このうち器形を複元し得たものは、約80個体である。石器は、剥片石器では、石鏃・スクレイパーが多く、石槍・ツマミ付ナイフなどもわずかにある。素材は大部分が頁岩であるが、黒曜石製のものもある。礫石器では擦石、石皿、たたき石が多く、石斧もわずかにみられる。擦石のなかでは、半円状打製石器と呼ばれる扁平な擦石が非常に多い。このほかに垂飾・石棒なども出土した。これらの石器は、その大部分が調査区南半部から出土したもので、縄文時代中期から後期前葉のものと考えられる。本遺跡の範囲については、遺構、遺物の分布状態から、調査区を含む台地に大きく広がっているものと判断される。

6 遺物の分類

出土した遺物は、すべて縄文時代のものである。土器については器形・文様等から型式別に、剥片・礫を含む石器については、おもに形態によって分類した。このほかの土製品・石製品については分類記号を用いていない。

a 土器

時期別にI群からIII群に大別した。縄文時代中期に属する土器群をI群、後期をII群、晩期をIII群とし、このうちI群を、a・b・cの3類に細分した。この分類の根拠になった土器の観察結果はV章で説明する。

<I群> 縄文時代中期に属する土器群。本群はa～cに分類される。

a類：円筒土器上層式に相当するもの。

b類：見晴町式・森越式に相当するもの、及びこれと伴出した大木8b・9式に相当するもの。

c類：1ダップII式・レンガ台式に相当するもの。及びこれと伴出した大木10式に相当するもの。

<II群> 縄文時代後期に属する土器群。

余市式・涌元式および大湯式に相当するもの。

<III群> 縄文時代晩期に属する土器群。一団体出土したのみである。

大洞C₁式に相当するもの。

b 石器

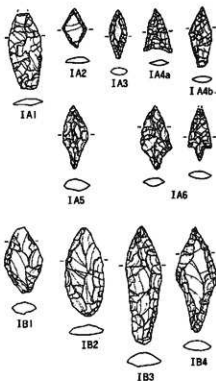
<I群> 石鏃・石槍またはナイフ

A類 石鏃

1. 長身鏃
2. 菱形のもの
3. 木葉形のもの
4. 無茎のもの
 - a. 三角形のもの
 - b. 五角形のもの
5. 明瞭な茎部をもたないもの
6. 有茎のもの

B類 石槍またはナイフ

1. 菱形のもの
2. 木葉形のもの
3. 明瞭な茎部をもたないもの
4. 有茎のもの



<II群> 石錐類

A類 棒状でつまみ部をもたないもの

B類 剥片の一端に刺突部を作り出したもの

C類 形態がIA5類に類するもの

〈III群〉 ナイフ・スクレイパー類

A類 つまみ付きナイフ

1. 縦型のもの
 - a. 二次加工が周縁部に施されているもの
 - b. 二次加工が片面全面に施されているもの
 - c. 二次加工が両面全面に施されているもの
2. 横型のもの
 - a. 二次加工が周縁部に施されているもの
 - b. 二次加工が片面全面に施されているもの

B類 笥状石器

1. 二次加工が周縁部に施されているもの
2. 二次加工が片面全面に施されているもの
3. 二次加工が両面全面に施されているもの

C類 スクレイパー

1. 縦長の剥片を素材にしているもの
 - a. 二次加工が側縁部に施されているもの
 - b. 二次加工が側縁部から先端部にかけて、施されているもの
2. 横長の剥片を素材にしているもの
 - a. 二次加工が末端部に施されているもの
 - b. 二次加工が末端部から側縁部にかけて、施されているもの
3. 円形、楕円形のもの
4. 二次加工が両面に施され、挿指状をなすもの。
5. 尖頭状の刃部をもつもの。

〈IV群〉 石斧類

A類 石斧

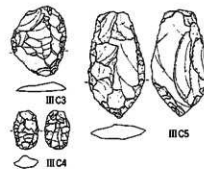
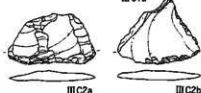
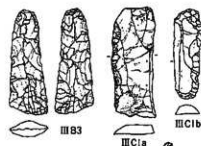
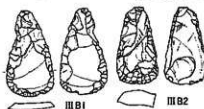
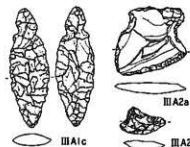
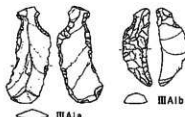
1. 打ち欠きと研磨によって製作されているもの
2. 擦り切り手法によって製作されているもの

B類 石のみ

〈V群〉 すり石・たたき石

A類 すり石

1. 扁平礫を素材とするもの
 - a. 側縁部のみを擦ったもの
 - b. 周縁部、とくに長軸両端に石錘様の剝離調整を加



え、一側縁を擦ったもの

2. 板状礫を素材とするもの
3. 礫の自然面あるいは半割面を擦ったもの
4. 北海道式石冠

B類 たたき石（くぼみ石も含まれる）

1. 棒状礫を用いたもの
2. 扁平礫を用いたもの
3. 円礫を用いたもの

<VI群> 砥石類

<VII群> 台石・石皿類

- A類 台石
B類 石皿

<VIII群> 石核・剥片・チップ

<IX群> 礫・礫片

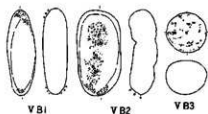
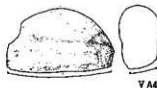
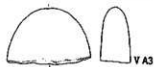
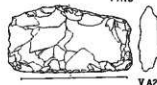
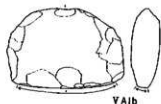
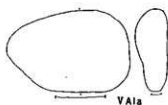
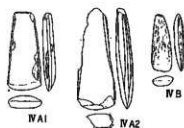




図1-2 遺跡の位置 (○印)

この図は国土地理院発行の5万分の1の図「上ノ国」を複製使用したものである。

II 遺跡の概要

1 遺跡の環境

a 遺跡の位置

小岱遺跡は渡島半島西南部にある上ノ国町の天ノ川河口より約1 km 上流左岸の丘陵上に位置している。渡島半島は南部で太平洋側の亀田半島と日本海側の松前半島に分かれているが、その骨格をなすのは東北地方の出羽丘陵の延長にあたる渡島山地である。上ノ国町はこの松前半島の北部にあたる。木古内町との境界にある大干軒岳(1,072m)は松前半島の最高峰で乙部岳(1,017m)・遊楽部岳(1,276m)と並ぶ渡島山地の代表的な山である。上ノ国町ではこのほか袴腰岳(699m)、七ツ岳(957m)など700mから900mの山が北東から南西へ嶺をつらね、津軽海峡側の木古内町、知内町、松前町との分水嶺をつくっている。渡島半島の日本海側では山地が海岸近くまでせまっておき、平野部は非常に少ない。上ノ国町もこの例にもれず、全面積の92%を山地が占めている。

天の川は上ノ国町北部の山間部を開析して西北に流れ、12の支流を集めて日本海へ注いでいる。全長は約40 km。下流域には幅2 kmほどの沖積平野が形成されており、水田、畑が広がっている。

渡島半島は太平洋岸、日本海岸ともに海岸段丘が発達しているが、上ノ国町では、天の川河口以南に4段の段丘がみとめられる。このうち太平山面(標高200m~180m)が最も高い段丘で、海岸より約12 km内陸の太平山から天の川河口近くの夷王山背後まで広がっている。今回発掘調査を行った小岱遺跡も、この段丘に続く丘陵の一部に位置している。

上ノ国町の山地はブナを主とする広葉樹林でおおわれており、自生トドマツの南限、自生ヒノキ・ゴヨウマツの北限地となっている。とくにヒノキは天の川の北から厚沢部川にかけて大森林をつくっている。このヒノキ材は松前藩時代から保護が加えられ、藩の重要な財源であった。

天ノ川河口付近は古くから松前・木古内・江差への各方面を結ぶ交通の要衝であった。現在も木古内方面からは天の川に沿って国鉄江差線・道々江差-木古内線、松前方面からは海岸に沿って国道228号が走っている。河口付近の市街地は、上ノ国町の行政・商業の中心となっている。

b 遺跡の立地

天の川下流は現在、沖積平野の南端を流れており、南岸には丘陵がせまっている。大小の沢がいくつもこの丘陵にきざまれているが、小岱遺跡はこれらの沢の1つの西側台地上にあたる。小岱遺跡の発見の経緯については、松崎岩穂氏が次のように記している¹⁾。「この発見は昭和二十六年のことで、当時上ノ国中学校の教諭をしていた松崎が社会科の授業の時に島主の家の生徒が同地に土器破片や石器が散見することを知らせたことによるものである。」

本遺跡が立地する台地は、小岱(こたい、またはおたい)と呼ばれているが、その地名の由来については明らかではない。松浦武四郎は安政3年にこの地方を海岸に沿って北上して、付近の様子を日誌に記している。これには遺跡付近の大淵、北村等の地名が書かれているが、小岱についてはふれられていない。

遺跡が立地する台地は、標高約45 m。東側から南側は急な崖となっており沢に続いている。この沢に沿って幅約3 mの農道がつけられている。南西側は台地の先端より約250 mほどの所に浅い沢があり、これをはさんで国指定史跡花沢館がある。北側は天の川左岸へ向って急な斜面となっている。台地上の比較的平坦な部分は現在畑地として利用されている。さらに南側及び北側斜面には、いくつか

の段がある。これは以前畑として利用するために削平したものらしい。南側斜面には現在クマイザサが一面に繁茂している。

台地上の平坦部には、径5～7mほどの皿状のくぼみが2カ所みられた。発掘の結果これらのくぼみは竪穴住居跡であることが判明した。この位置からは、眼下に天の川と上ノ国町の市街地をのぞみ、さらに江差町から大成町にかけての海岸を眺望することができる。秋の晴天の日には、日本海のはるか水平線上に奥尻島がみられる。

注 大場利夫・松崎岩穂(1965)『松山南部の遺跡』

c 周辺の遺跡

上ノ国町では縄文時代の遺跡が多数確認されている。これらの遺跡は天の川下流域の沖積平野北東の山裾と今回調査を行なった小岱遺跡付近から奥王山にかけての丘陵部及び江差町から松前町へ続く海岸段丘上に分布している。おもに縄文時代中期から晩期の遺跡が多いが、早期・前期、及び続縄文・濠文時代の遺物も採集されている。

小岱遺跡の周辺では、沢をはさんで北東側の大岱遺跡、その南側に大岱沢A・大岱沢B遺跡がある。いずれも縄文時代中期から後期の遺跡である。

発掘調査は昭和30年代から上ノ国町教育委員会によって行なわれてきた。昭和36年には、天の川河口左岸の竹内屋敷遺跡の調査が北海道大学大場利夫教授の指導のもとに実施された。この遺跡で多数出土した短直線及び短曲線で文様が構成された大洞B・B-C・C₁・C₂に比定される土器は器形・文様の特徴から上ノ国式土器として型式が設定されている。

大安在B遺跡は昭和47年に発掘調査が行なわれた。ここで出土した隆起帯によって区画された文様をもつ縄文時代中期の土器も大安在B式土器として標準型式になっている。また昭和49年には天の川河口近くの四十九里沢A遺跡の発掘が行なわれ、縄文時代早期から晩期の遺物が出土した。

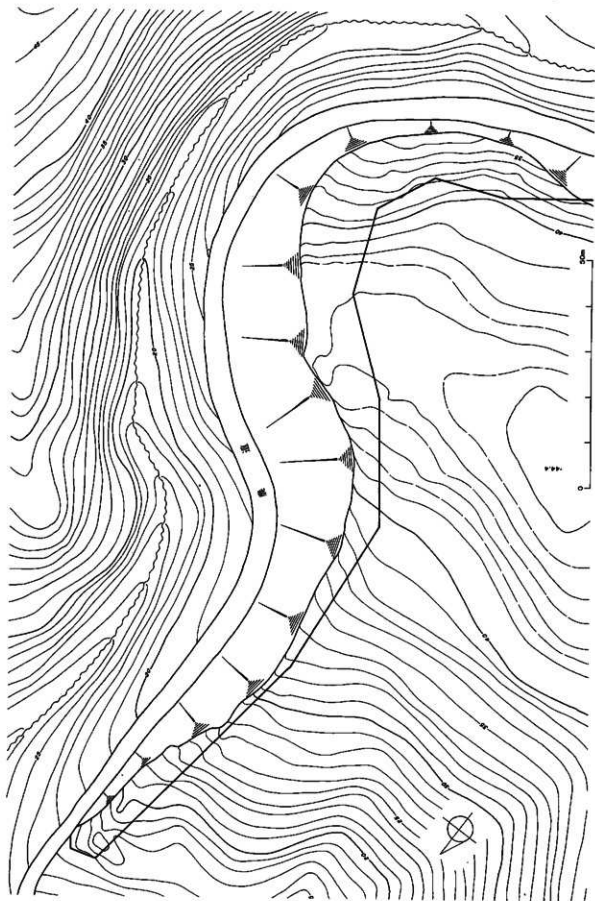
昭和54年には松前町との境界に近い日本海岸の小砂子遺跡の発掘調査が行なわれ、縄文時代中期の住居跡が10軒検出された。出土した遺物は、縄文時代中期のノグップII式土器と大木系の土器を主体に縄文時代早期から晩期の各時期にわたっている。

これらの遺跡のほか、上ノ国町には、国指定史跡の勝山館、花沢館をはじめ洲崎館、比石館、道指定史跡の奥王山墳墓群などの史跡が残されている。これらは、すべて松前藩の前身である蛸崎家ゆかりの地である。享徳元年(1453)津軽からこの地に渡った武田信広は、長祿元年(1457)のコシヤマイン戦争において諸館が陥落するなかで、上磯の茂別館とともに花沢の館を固く守り、遂にはコシヤマイン父子を倒した。これを期に武田信広は蛸崎家を継ぎ、北海道に和人の勢力を築く基礎をつくった。

花沢館は今回調査を行なった小岱遺跡の西側わずか500mほどのところにある。標高は最も高い所で約80m、本遺跡よりも一段高い尾根上にあたる。

勝山館は花沢館のさらに西約1kmにある。武田信広が最後に拠った居館で、昭和54年より史跡整備事業が行なわれ、現在も継続されている。

奥王山(159m)は勝山館のすぐ南西側にある。山頂から勝山館を眼下に望み、南に大洞湾から上ノ国町南部の海岸、北は江差方面を一望に収めることができる。この山の周辺には数百に及ぶ墳墓がある。昭和27年明治大学後藤守一教授によって調査され、武田、蛸崎氏一族の墓と推測されている。



図II-1 道路の地形

2 基本層序

基本層序は以下のとおりである。この層序が典型的にみられるのは、グリッドライン 20～21 付近と、調査区南側斜面のうち、M・Nライン付近である。このほかの部分では、これらの層位のうちV層以上が途切れたり、極端にうすくなっているところがある。これは、調査区内の地形が変化に富んでいることから、各層位の堆積の状況に差異があったことによるものと推定される。また耕作による土層の攪乱もいたるところにみられる。

このうち遺物包含層は、IV層・V層である。この2つの層は遺構とそのほかのくぼみ及び斜面中位の緩傾斜部以外では明瞭に分層できない。VI層の上位にもわずかの遺物が出土しているが、これは、IV層・V層と混じり合ったものとみられる。

- I層 耕作土
- II層 黒色腐植土
- III層 灰白色火山灰
- IV層 灰褐色土
- V層 灰黒色土
- VI層 黄褐色ソフトローム
- VII層 黄褐色ハードローム
- VIII層 礫層

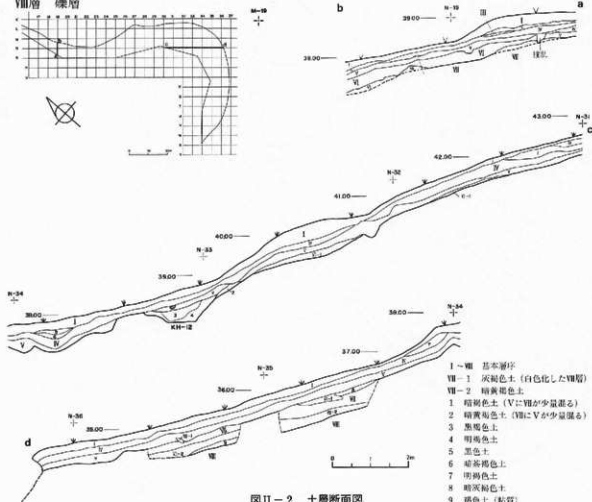


図 11-2 土層断面図

III 遺構と遺構出土遺物

発掘の経過

a 調査区北斜面の発掘

調査区のうち北半部は台地の北側斜面崖線にあたる。南北に細長く、12ライン付近では幅が約3mしかない。崖面の上半部には岩盤が露出しているが、これは現在の道路がつくられた際に、土取りが行われたことによるものとみられる。地表には畑地造成による段がところどころにある。とくに11ライン以北では畑と山道によって削られた部分が多く、地山がむき出しになっているところが各所にみられた。北端には土塊状に盛り上った部分があり、その南側は凹地になって調査区の西方へ続いている。トレンチ調査によって、土層観察を行ったところ、斜面上部では遺物包含層の厚さが5cm～10cmほどあるが、中央の幅が狭い部分では表土直下が礫混りのローム層(Ⅶ層)であること、9ライン以北では、遺物包含層の大部分が失われていることが判明した。包含層が残っているところでも、出土遺物は調査区南半部に比べると非常に少なく、調査開始当初には北側斜面に遺構が存在する可能性が少ないものと考えていた。この推測は、北斜面のうち9ライン以南においてはほぼ当たっていた。しかし、北部の斜面裾部では、耕作土及び残存していたⅣ層、Ⅴ層除去後、Ⅵ層上面に周囲よりわずかに暗い色調の落ちこみが各所にあることが確認され、発掘の結果これらの落ちこみは縄文時代中期の竪穴住居跡であることが判明した。

北斜面裾部において発掘された7軒の竪穴住居跡はKH-1・3を除いて、その一部あるいは大部分が耕作によって削平されており、形態等について不明な点が多い。KH-2bは調査区西端の土層断面によって検出されたものである。

北端の土塊状に盛り上った部分は、本遺跡に近い花沢館に関連した土塁の可能性もあると考えたが、厚さ5～10cmほどの表土下が地山(Ⅶ層)であったことから、自然の地形と判明した。

前述したように9から15ラインにかけての斜面中位では遺物がごくわずかしか出土しなかったが、グリッドH-11でわずかに残存していたⅡ層中から縄文時代晩期の土器が破片となって検出された。これは今回の調査で出土した遺物のうち、縄文時代晩期に相当する唯一のものである。

b 調査区中央部から南斜面の発掘

調査区南半部は、丘陵上の平坦地から、これに続いて南西へ大きく屈曲した急斜面である。東から南西部にかけての崖面には、栗などの広葉樹と雑木が茂っており、岩盤は露出していない。25ライン付近と南西斜面には畑地造成による段がある。畑は31ライン以北の平坦部から、調査区の西方にかけてつくられているが、南西斜面上方にも古い畑の畝が残っていた。調査に入る前は、この斜面一帯にクマイザサが茂っていた。26ラインから31ラインにかけての平坦地は標高約42m、全調査区の中でもっとも高い部分である。ここでは、畑の雑草を刈ったところ、M-25付近とL-29からL-30にかけて大きな皿状のくぼみがあらわれた。

発掘開始当初に実施したトレンチ調査によって調査区南半部は、上部を畑地造成によって削平されているところが一部にあるものの、遺物包含層が全域にあり、これに含まれる遺物量は、調査区北半部に比べると非常に多いことが判明した。とくに前述した畑のくぼみの下には多量の土器・石器があることも明らかになった。

トレンチ調査の結果をふまえて、発掘を進めていくに従い、M-25にみられたくぼみは竪穴住居が

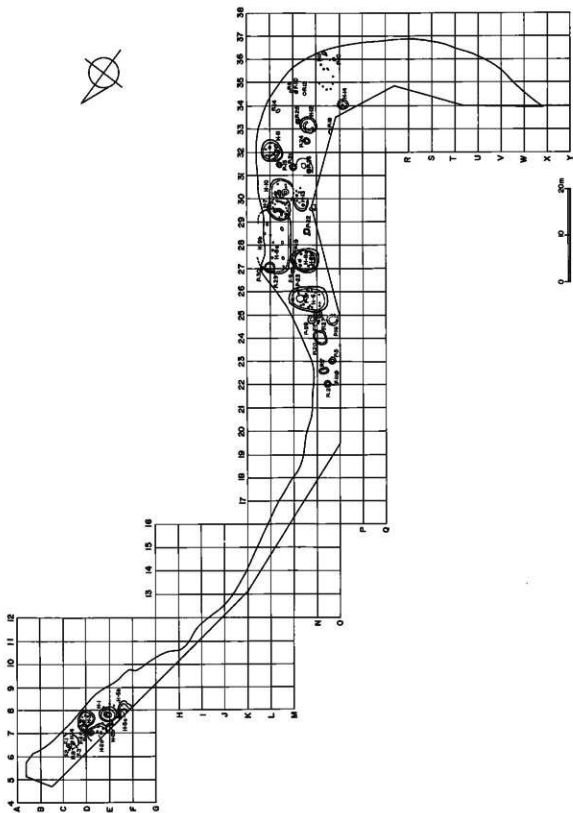
埋りきっていないもので、深さは約1 m、長軸は8 mに達すること、L-29からL-30にかけてのくぼみは、2つの竪穴住居が重複した跡であることが判明した。この2カ所のくぼみの間は、ほぼ平坦であったがIV層上面で周辺よりわずかに色調が暗い部分があり、再度のトレンチ調査によって竪穴住居跡がいくつか存在することが確認された。KH-9 aは、当初崖ぎわに2軒の住居跡が並んでいるものと判断して発掘を進めたが、後になって長径14 mに達する大型の竪穴住居跡であることが確認されたものである。

南西斜面は、トレンチ調査によって、かなりの量の遺物が出土することが判明していたが、20度ないし30度の傾斜地であることから、竪穴住居跡などの存在をあまり予測していなかった。

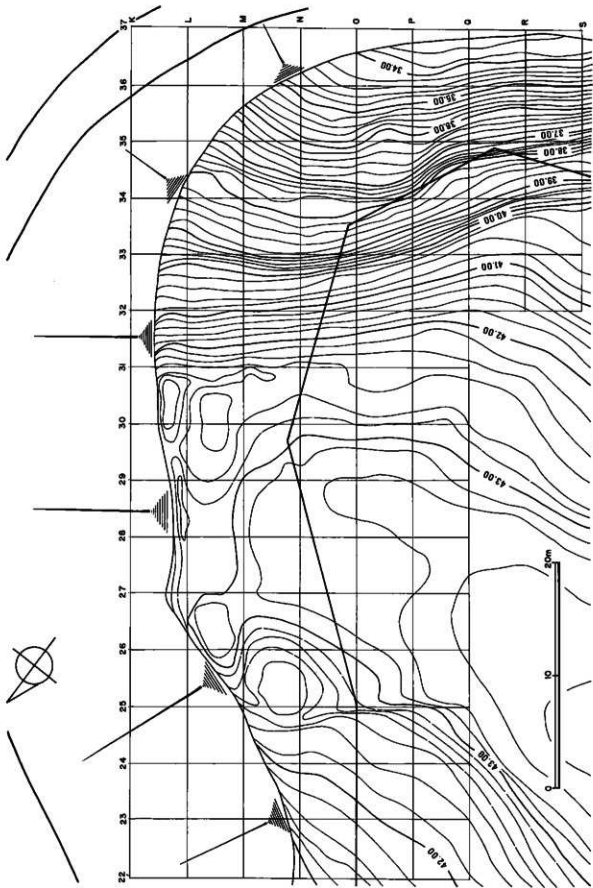
KH-11とKH-12はこの部分にわずかの平坦部がみられたため、再度のトレンチ調査を行って住居跡であることを確認したものである。KH-14はIV層の調査終了後、完形の深鉢が出土したため、周辺を精査して住居跡であることを確認した。各竪穴住居跡は、いずれも覆土の色調が周辺の土と似ているために、平面でその規模を確認することが困難であることから、すべてトレンチによる土層断面の観察によって、床・壁を確認したものである。とくに夏期の炎天下では乾燥が激しく、土層断面によっても判然としないうところが多かった。従ってトレンチ調査以外の部分では、遺物の出土状態、焼土の有無、土の固さなどをその都度判断しながら、壁、床を確認して掘り進めた。しかし秋には雨天が続いたため、土層観察は比較的容易になった。これは、26カ所の土壌についても同様であった。

南西斜面には、3カ所地表が盛り上った部分があった。これらは、竪穴住居をつくった時の排土であるものとみて、発掘を行ったが、いずれも小規模な地すべりによる地形であることが判明した。また南西斜面下方の崖面は、傾斜が比較的ゆるやかであることから、遺物包含層が残存していることを予測して、数カ所でトレンチ調査を行ったが、厚さ数cmの表土直下がV層とさらに下位の岩盤になっており、遺物は出土しなかった。

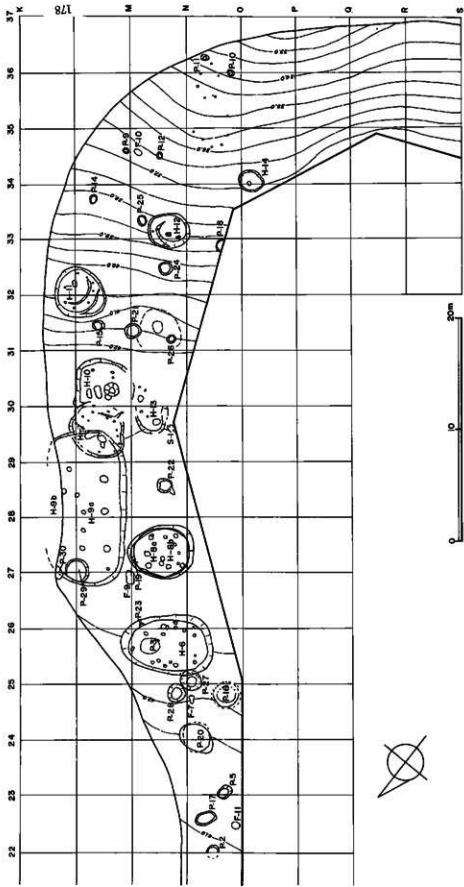
出土した遺物は、縄文時代早期のものと考えられる石器数点と縄文時代晩期の土器1個体を除き、このほかのすべては、縄文時代中期前葉から後期前葉のものと推定される。出土層位は基本層位のIV層・V層が主体だが、層位によって遺物を細分することは困難であった。各遺構が掘りこまれた層位もIV層からVI層上面にわたっているが、これによって構築時期を判別することはできなかった。



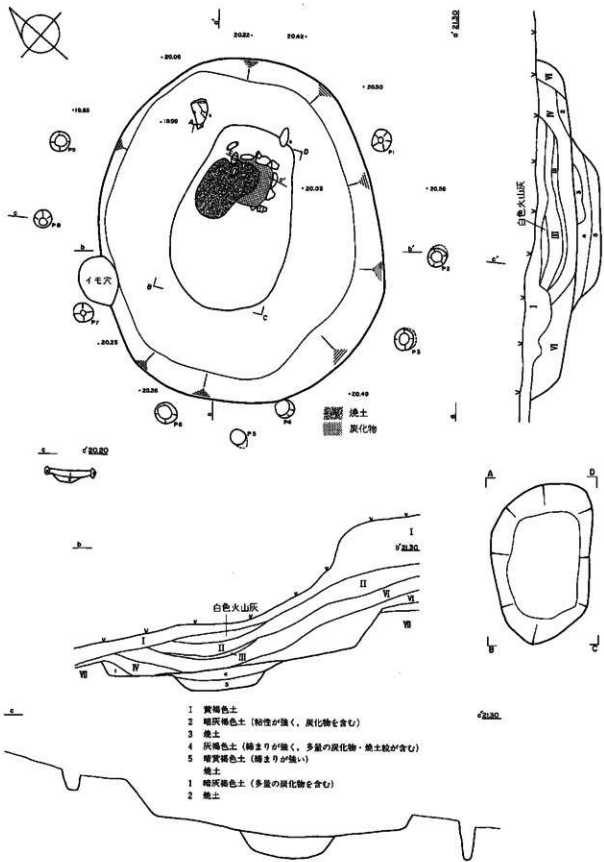
图III-1 遺構位置図



新加坡C部地形圖 2-1-3圖



図III-3 遺跡主体部の遺構位置図 (等高線は互角上面)



図III-4 KH-1

1 竪穴住居跡

KH-1

位置 D-7, D-8, E-7, E-8 調査区北斜面裾部

形態 長軸が北東-南西方向の楕円形。長径3.65m, 短径3.2m。深さは南東側で、掘り込み面から42cmある。壁は外に向かって傾斜している。

床面はVII層中につくられている。中央部には土壇がある。この上に貼り床があることから、住居跡よりも古いものと考えられるが、出土遺物が皆無で、掘りこまれた時期を判断することはできなかった。

柱穴 9個確認された。壁の外側にほぼ0.6m~1.2mの間隔でめぐっている。このうちP₈は内傾しているが、ほかは垂直である。また北側のP₁~P₉の間には柱穴が確認されていない。この間に入口等の施設があった可能性も考えられる。

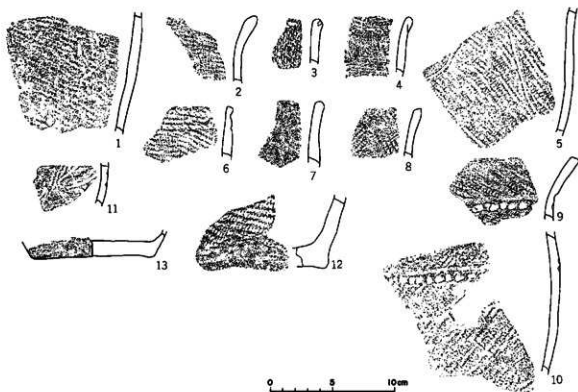
炉 石組炉と焼土(地床炉)が検出された。石組炉は中央部の東よりに位置している。炉石には円礫と角礫が使用されている。西側は炉石がなく、コの字状をなす。焼土(地床炉)は石組炉の西側にある。厚さは約12cm。

遺物の出土状態 遺物はおもに北東側から出土した。しかし、床面・覆土ともに出土遺物は少ない。

時期 床面及び覆土出土の土器から判断すると縄文時代中期末葉の住居跡と考えられる。

KH-1 柱穴一覧表

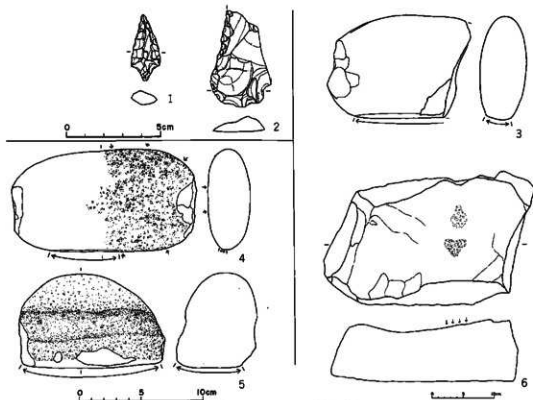
No.	長径×短径	深さ	備考
P ₁	24 × 6	22	新め
P ₂	20 × 12	22	
P ₃	24 × 12	18	
P ₄	20 × 14	17	
P ₅	17 × 15	31	
P ₆	22 × 16	24	
P ₇	20 × 6	26	
P ₈	18 × 9	38	
P ₉	22 × 12	24	



図III-5 KH-1出土土器

KH-1 縄織土器一覽

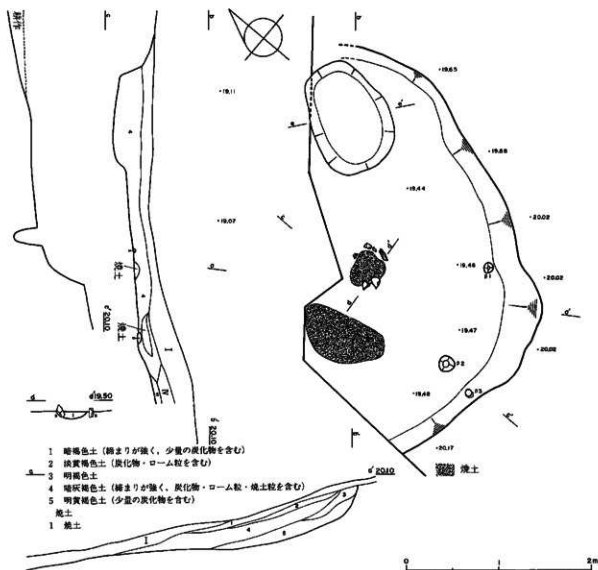
発掘番号	分類	層位	特 色
Ⅲ-5-1	I c	球	胴部、内面に指による調整痕。地文はR L斜行縄文。
2	I b	覆土	口縁部、外面に炭化物付着。地文はL R斜行縄文。
3	"	"	"。肥厚部に半縦竹管による刺突。地文は、R L斜行縄文。
4	"	"	"。内面に炭化物付着。地文は無文。
5	"	"	胴部、半縦竹管による沈線がつく。外面に炭化物付着。地文はL R斜行縄文。
6	I c	"	口縁部、縄線文が2条つく。内面は砂着。地文はR L斜行縄文。
7	"	"	"。胎土に小砂利が多い。外面に炭化物付着。無文。
8	"	"	"。口縁がやや肥厚する。地文はR L斜行縄文。
9	"	"	"。胴部に沈線と刺突がつく。内面は砂着。地文はR L斜行縄文。
10	"	"	胴部、9と同一個体。
11	II	"	"。長円状の沈線がつく。地文はL R斜線文。
12	I b	土壌内	底部、張り出し部が調整により無文。地文はL R斜行縄文。
13	II	覆土	"。やや上げ底。無文。



図Ⅲ-6 KH-1出土石器

KH-1 縄織石器一覽

発掘番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ (cm)	重量 (g)	材質	備考	名称	分類	発掘区	層位	大きさ (cm)	重量 (g)	材質
1	石 鏃	IA 6	—	—	3.5×1.5×0.7	2.5	Sh.	4	すり石	VA 1 b	—	—	(14.7)×8.1×2.5	(785)	Dior.
2	竈 穴 石 器	Ⅲ B 1	—	Ⅳ	14.8×3.1×1.3	(14.0)	"	5	北海道式石匠	VA 5	—	—	(11.7)×8.0×5.3	(800)	And.
3	すり石	VA 1 b	—	—	(10.2)×8.2×3.7	(568.0)	And.	6	台 石	Ⅲ A	—	床面	36.4×29.2×9.6	10.5kg	"



図III-7 KH-2a

KH-2a

位置 D-6, D-7 調査区北斜面裾部 調査区外へ続いている。北側は耕作によって削平され、失われている。

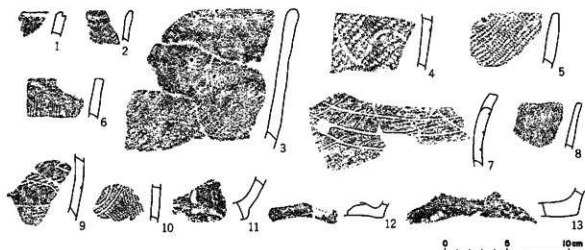
形態 平面形は不明。床面はほぼ平坦であるが、中央部がわずかに低い。壁は斜めに立ちあがっている。

柱穴 南側の壁ぎわに、柱穴状のピットが2個確認された。

炉 石組炉と焼土(地床炉)が検出された。前者には、すべて角礫が使われている。間隔がかなりあいているが、抜き取り痕は確認できなかった。石組炉・地床炉ともに焼土の厚さは約8cmである。高さの差から石組炉が古いものと考えられる。

遺物の出土状態 全体的にみると、床面・覆土ともに南側から多く出土した。

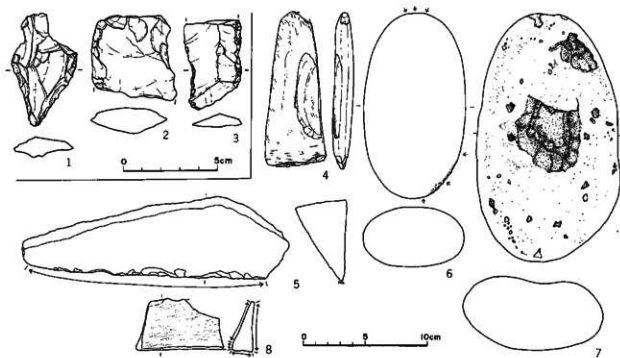
時期 覆土から出土した土器は縄文時代後期初頭(II群)のものが、その大半を占めている。本住居跡も、この時期に構築されたものと考えられる。



図Ⅲ-8 KH-2a出土土器

KH-2a 掲載土器一覽

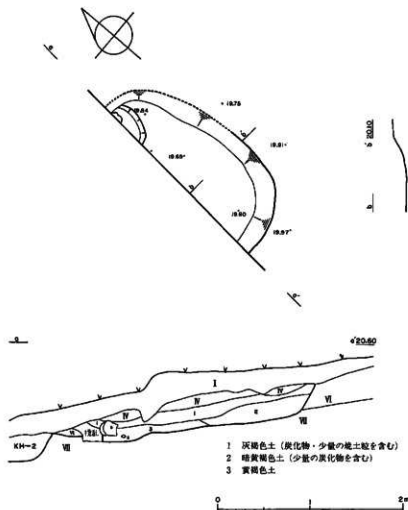
挿図番号	分類	層位	特 色
図-8-1	I b	層土	口縁部。口唇に深い沈線がつく。
2	"	"	。地文はL R斜行縄文。
3	"	"	。外面に炭化物付着。地文はL R斜行縄文。
4	"	"	胴部。4mm程の太い沈線が施される。地文R L斜行縄文。
5	I c	"	口縁部。口唇調整。地文はL R斜行縄文。
6	II	"	。内面に横位の調整痕。地文はR 捺糸。
7	"	"	。口唇内面研磨。挿挿孔1コ。地文はR L斜行縄文。
8	"	"	。色調、黄褐色。無文。
9	"	"	胴部。縄文の一部が磨消。地文はL R斜行縄文。
10	"	"	。地文の上に沈線。地文はR L斜行縄文。
11	I b	"	底部。内面に調整痕。
12	II	"	。やや上げ底。無文。
13	"	"	。無文。



図Ⅲ-9 KH-2a出土石器

KH-2a 掲載石器一覧

番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ (cm)	重さ (g)	材質	番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ (cm)	重さ (g)	材質
1	つばみ付ナイフ	短A1c	—	3	5.9×3.4×1.1	15.0	Ba	5	すり石	VA2	—	3	6.4×21.2×4.0	504.0	And.
2	スクレイパー	短C1a	—	—	(4.3)×4.3×1.6	(10.2)	Sh	6	たたき石	VB2	—	—	19.7×11.3×5.1	2.03kg	#
3	スクレイパー	#	—	#	(4.5)×3.0×0.9	(34)	#	7	たたき石	#	—	—	15.0×8.1×3.6	800.0	#
4	石 斧	短A1	D-7	—	12.2×4.8×1.4	(135.0)	Gr-Md	8	砥 石	#	—	—	(7.0)×4.1×0.6	(38.0)	Sa



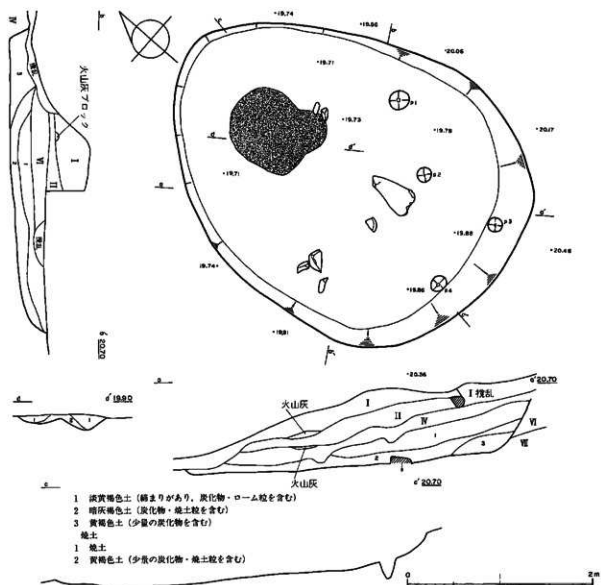
図III-10 KH-2b

KH-2b

位置 E-7 調査区北斜面裾部 KH-2aに隣接している。VI層調査中に断面観察によって確認した。調査区外でKH-2aと重複している可能性がある。

形態 大半が発掘区外にあるため不明である。北側の壁ぎわに浅い掘り込みがある。

床面 北側に向けて緩く傾斜している。



図III-11 KH-3

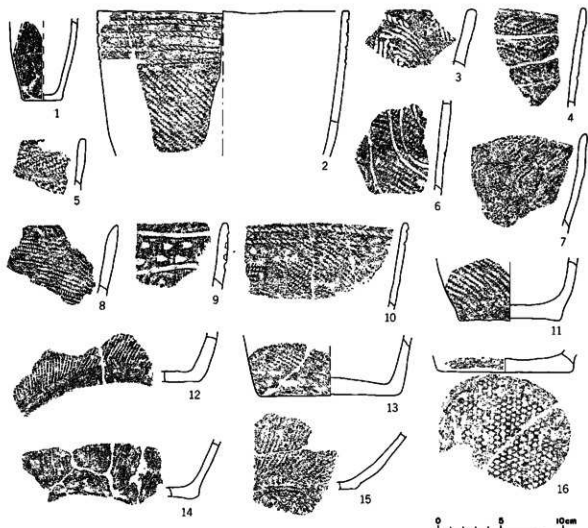
KH-3

位置 C-7, D-7 調査区北斜面裾部

形態 長軸が北東-南西方向の卵形。長径4.1m, 短径3.1m, 深さは南側で、掘り込み面から58cmある。壁は外へ傾斜している。床面はVI層・VII層中につくられており、固く締まっている。北側に向ってゆるやかに傾斜している。

柱穴 床に2個、壁と壁ぎわに1個ずつ柱穴状ピットが確認された。断面をみると、いずれも先が細い杭状である。

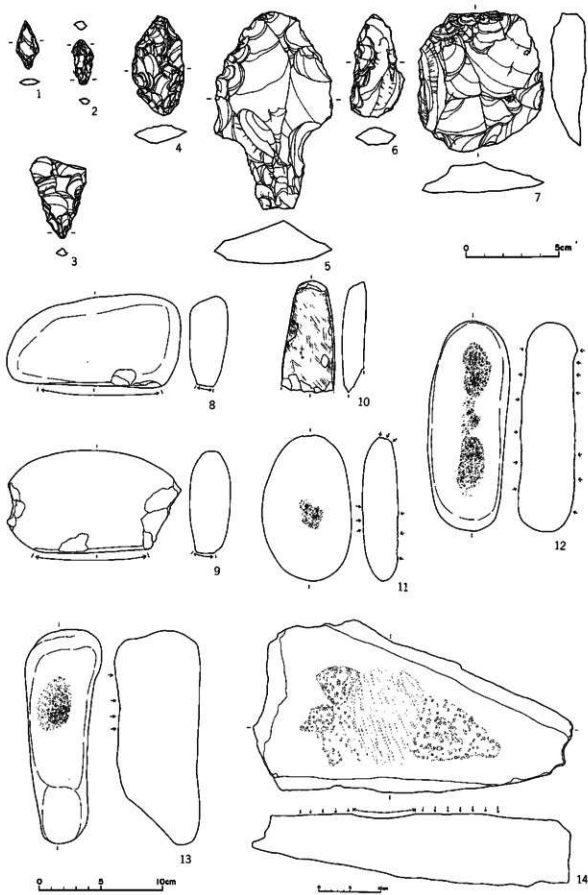
炉 焼土(地床炉)が中央部北寄りに検出された。焼土の厚さは約8cm~20cmである。遺物の出土状態 住居内中央南寄り床直上に台石が1点出土した。床面では、このほか数点、散在していたのみであるが、覆土からは多数の遺物が出土した。とくに南東側に多い。時期 出土した土器からみて、縄文時代中期末葉~後期初頭の住居跡と考えられる。



図III-12 KH-3出土土器

KH-3 掲載土器一覧

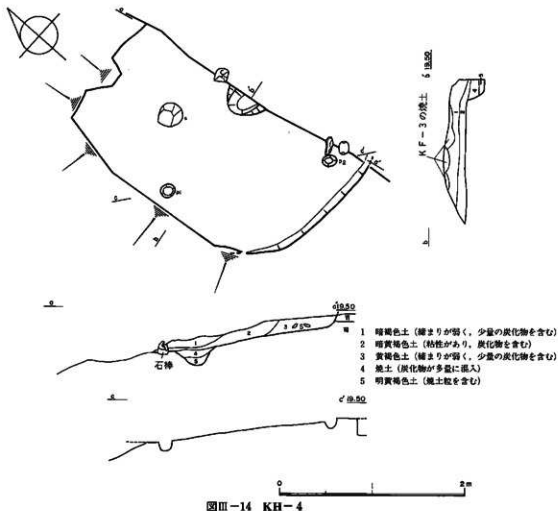
神田番号	分類	層位	特	色
III-12-1	I c	覆土	□(5.4)×底3.3×高(6.3) 無文。	
2	II	2層	□(20.1)×高(11.1)口縁、横位のケズリによって無文帯。口唇・内面研磨。外面カーボン付着。地文はL R斜行縄文。	
3	I b	IV層	口縁部。粘土に3m~5mmの小石を含む。地文L無筋。	
4	"	3層	"。内外面、炭化物付着。地文はL R斜行縄文。	
5	"	1層	"。地文はL R斜行縄文。	
6	"	2層	胴部。粘土に10mm程の小石を含む。地文をR L斜行縄文。	
7	"	3層	口縁部。内面に歯による調整痕。地文はL R斜行縄文。	
8	I c	IV層	"。内面、良好に調整。外面炭化物付着。地文はR L斜行縄文。	
9	"	1層	"。沈殿の間に半截竹管による刺突がつく。	
10	"	IV層	"。地縄の上に縄線文が施される。地文はL R斜行縄文。縦線孔1対	
11	I b	覆土	底部。地文はR L斜行縄文。	
12	"	"	"。地文はR L斜行縄文。	
13	II	2層	"。中央部が高くなる。地文はL R斜行縄文。	
14	"	"	"。外面に縦位の調整痕。無文。	
15	I b	"	"。縄代底。地文はR L斜行縄文。	
16	"	覆土	"。器面が壊れて剥離。縄代底。	



图III-13 KH-3出土石器

KH-3 掲載石器一覧

番号	名物	分類	発掘区	層位	大きさ (cm)	重さ (g)	材質	番号	名物	分類	発掘区	層位	大きさ (cm)	重さ (g)	材質
1	石 鏃	IA6	---	3	2.7×1.2×0.3	1.0	Sh	8	ナリ石	VA1a	---	3	13.4×7.2×3.1	500.8	And.
2	石 鏃	IB A	---	---	2.3×(1.0)×0.6	(1.4)	#	9	ナリ石	VA1b	---	---	13.6×7.6×3.7	608.0	Gior.
3	石 鏃	IB B	---	2	3.8×2.6×1.3	12.0	#	10	石 斧	VA1	---	2	(8.6)×4.0×0.9	(116.0)	Gr-Mad.
4	石鏃またはナイフ	IB2	D-7	---	5.4×2.8×1.0	14.0	#	11	たき石	VB2	---	3	7.3×11.6×3.0	450.0	And.
5	#	IB4	---	2	10.6×6.8×2.5	115.0	#	12	たき石	#	---	---	16.6×6.3×3.1	701.0	#
6	ステレィマー	IC C	---	IV	5.5×2.7×1.1	14.0	#	13	たき石	#	---	---	17.0×6.0×4.7	833.2	And.
7	ステレィマー	IC3	---	---	7.4×6.6×2.0	88.0	#	14	石 斧	VA A	---	埋藏	01.0×50.0×12.2	22.9g	Sa.



KH-4

位置 C-6 調査区北斜面裾部 東側の大半が失われている。南側・西側は、耕作によって削平されている。

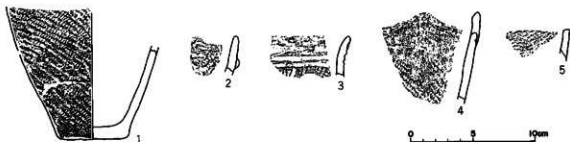
形態 平面形は不明 床面はVII層中につくられている。南北方向に傾斜している。

柱穴 住居内の北側と西側に2個確認された。

炉 削平されているため全体の約半分しか確認できなかった。掘り込みをもつ炉で、焼土の厚さは約15cm。

遺物の出土状態 床面直上で擦石が2個並んで出土した。また、覆土からは土器の底部が1個体分出土している。

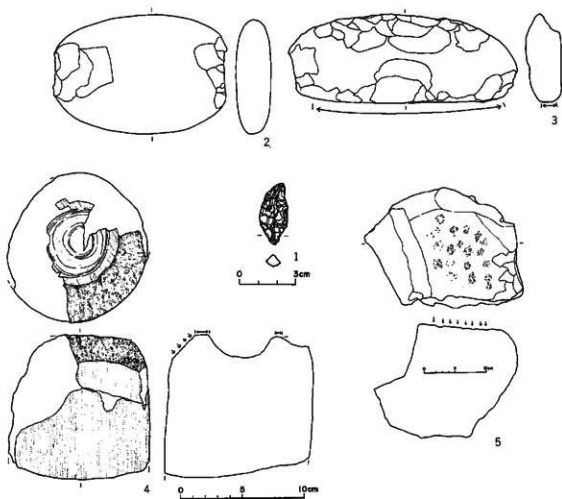
時期 床面直上及び覆土出土の土器から判断して、縄文時代後期初頭の住居跡と考えられる。



図III-15 KH-4出土土器

KH-4 縄紋土器一覽

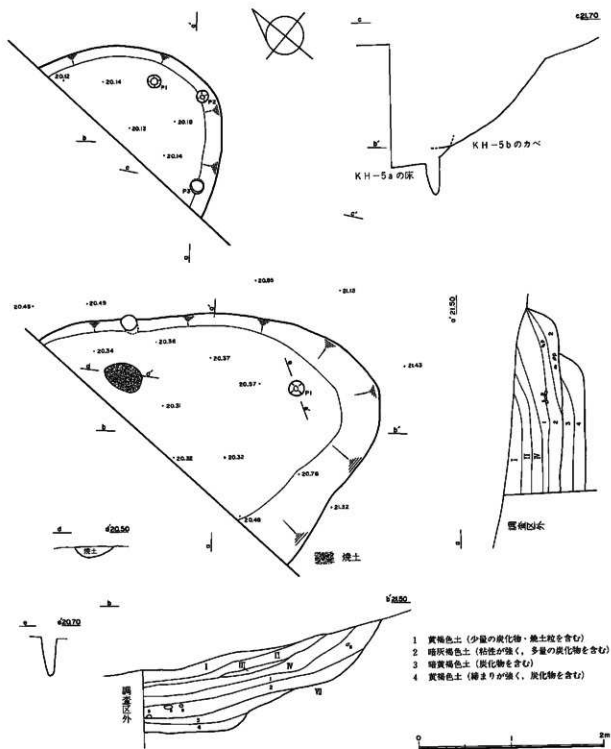
採 取 番 号	分 類	層 位	特 色
III-15-1	Ic	覆土	口(11)×底5.8×高(10.3) 地文はL.R斜行縄文。
2	#	1層	口縁部。貼付帯上に地文がつく。地文はL.R斜行縄文。
3	II	覆土	#。外面に炭化物付着。地文はL.R斜行縄文。
4	#	#	#。縄文、縄線文を地文後に器面調整。地文はR.L斜行縄文。
5	#	#	#。口唇、内面調整。地文はR.L斜行縄文。



図III-16 KH-4出土石器

KH-4 縄紋石器一覽

群 号	名 称	分 類	発 見 区	層 位	大 小 (cm)	重 量 (g)	石 質	特 性	名 称	分 類	発 見 区	層 位	大 小 (cm)	重 量 (g)	石 質
1	石 棒	II C	—	I	3.4×1.6×0.8	3.5	Sh.	4	石 棒	—	C-6	—	(11.5)×11.6×8.9	11.95kg	Sa.
2	千 石	VA 1 b	C-6	—	13.8×9.5×2.9	650.0	Sa.	5	石 棒	A	#	—	26.8×19.2×23.6	12.4kg	And.
3	#	VA 2	#	—	17.8×7.1×2.9	533.0	And.								



図III-17 KH-5a・5b

KH-5 a

位置 E-7、E-8 調査区北斜面裾部 KH-5bと重複している。

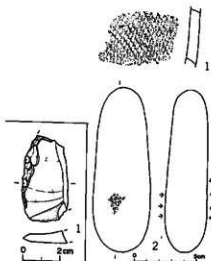
形態 平面形は不明。深さは東側で約24cm。床面はVII層中につくられている。壁は外へ斜めに立ち上がっているが、上部はH-5bに切られている。

柱穴 壁ぎわに2個、床面に1個柱穴状のピットが確認された。

炉 調査区外に位置している可能性がある。

遺物の出土状況 床面、覆土ともに数点の遺物が出土したのみである。

時期 床面から出土した土器はI群b類に相当するものと判断されることから、縄文時代中期中葉の住居跡と考えられる。



図III-18 KH-5a出土土器・石器

KH-5a 掲載土器一覧

採掘番号	分類	層位	特	色
III-18-1	I b	覆土	胴部、内面研磨。地文R L R斜行縄文。	

KH-5a 掲載石器一覧

番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ(cm)	長さ(cm)	石質	番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ(cm)	長さ(cm)	石質
1	スタレイバー	III C 1 a	—	—	(4.5)×2.4×0.7	(8.1)	Sh	2	たたまき石	VB 1	—	—	13.0×4.5×3.2	300.2	And

KH-5 b

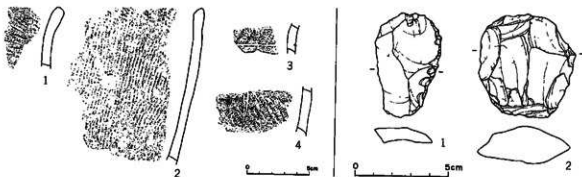
位置 E-7, E-8 調査区北斜面裾部 西側は調査区外に続いている。KH-5 aと重複している。

形態 長軸が東-西方向の楕円形と推定される。深さは南側で58 cm。この住居跡はH-5 aの覆土3層が堆積した時期に、これとほぼ同位置につくられたものと考えられる。床面はH-5 a覆土3層上面からVII層中につくられている。壁は南側では、外へ傾斜しているが、北側ではほぼ垂直に立ち上がっている。

柱穴 東側に1個柱穴状のビットが確認された。

炉 北側壁より焼土(地床炉)が検出されている。厚さは約11 cm。

遺物の出土状況 北西側に集中して出土した。



図III-19 KH-5b出土土器・石器

KH-5b 掲載石器一覧

番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ(cm)	長さ(cm)	石質	番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ(cm)	長さ(cm)	石質
1	スタレイバー	III C 1 a	—	2	5.5×3.5×1.1	14.0	Sh	2	スタレイバー	III C 3	—	—	5.4×5.0×2.0	55.0	Sh

KH-5b 掘壕土器

探 査 番 号	分 類	層 位	特 色
Ⅲ-19-1	I b	2層	口縁部。地文はR.L斜行縄文。
2	"	"	"。胎土にバミスを含む。地文はL.R斜行縄文。
3	II a	"	胴部。地文はL.R斜行縄文。
4	"	1層	"。内面研磨。地文R.L斜行縄文。

KH-6

位置 L-25, L-26, M-25, M-26, N-25, N-26 調査区中央平坦部 約3mの間隔をおいてKH-8と並んでいる。

形態 長軸が北東-南東方向の卵形。長径8.1m, 短径5.3m, 深さは南西側で、掘り込み面から96cmある。発掘された14軒の住居跡の中でもっとも深い。壁は外へやや傾斜している。床面は、ほぼ平坦である。

柱穴 柱穴は17個検出された。多くは住居内の壁ぎわにある。このうち径、深さともに40cmをこえるものは主柱穴と考えられる。またP₂がP₇を切っていることや、柱穴数が多いことを考えると建替えがおこなわれた可能性がある。

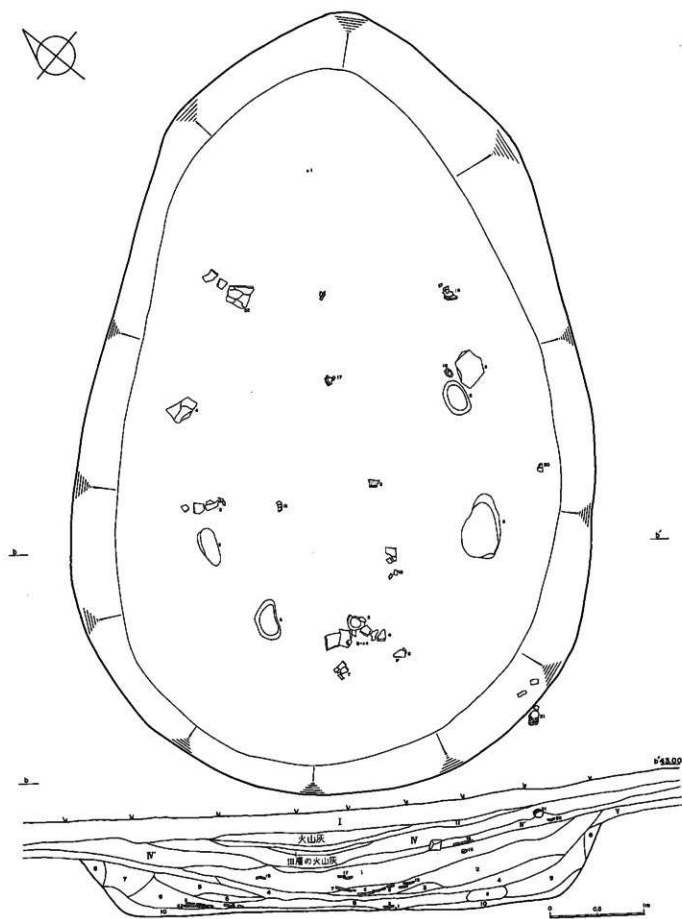
炉跡 中央部のやや先端寄りに、石組炉と地床炉による複式炉が検出された。石組炉はほぼ円形で、14個の石(角礫13・円礫1)が使用されている。焼土の厚さは約5cmである。地床炉は約18cmの掘り込みをもつもので、焼土は約11cmの厚さがある。

遺物の出土状態 床直上から台石、石皿が計5点出土した。いずれも中央部からやや壁よりに位置している。このうち南東側で出土した台石は柱穴P₂を一部覆っていたことから、両者には時間差があるものと考えられる。覆土中からは多量の遺物が出土した。遺物の出土状態は平面及び断面の観察によると、2つのパターンに分けられる。1つは炭化物、焼土とともに土器が一括廃棄された状態。もう一つは住居跡の凹みに自然に流れ込んだ状態である。廃棄によるものとして、とらえられるのは、2層のII群の土器で、4個体が一括出土した。自然に流れ込んだものは、7層のII群の土器で、これはKP-28覆土及び遺構外IV層の土器と接合して、復原された。層位別にみると床面、床直上からI群C類の土器、覆土及び周辺の発掘区では、II群a類の土器が多く出土している。図Ⅲ-20は一括土器を中心に遺物の出土状態を示したものである。

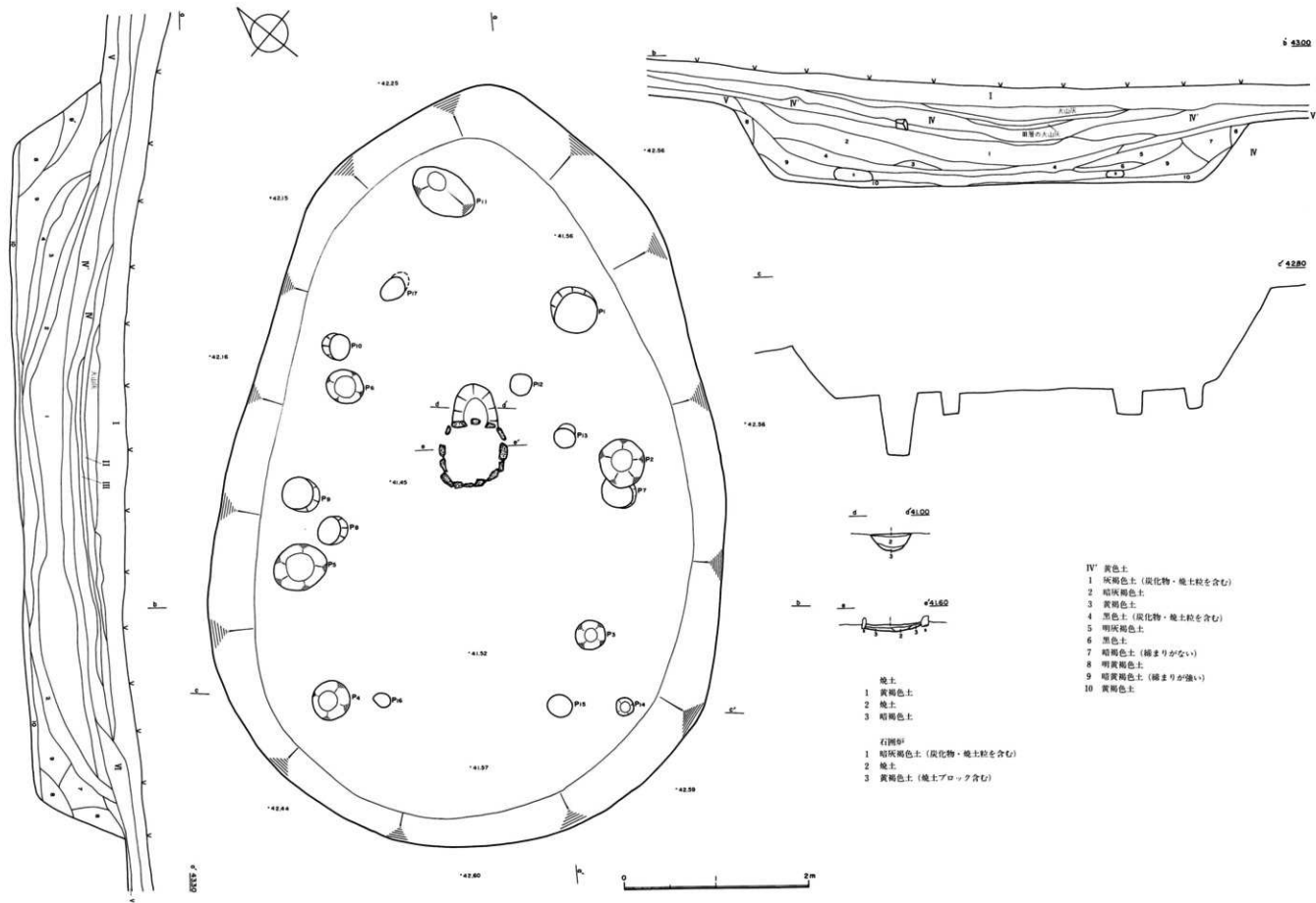
時期 床面、床直上の土器がI群C類に相当するものであることから、縄文時代中期末葉につくられた住居跡と考えられる。

KH-6 柱穴一覽表

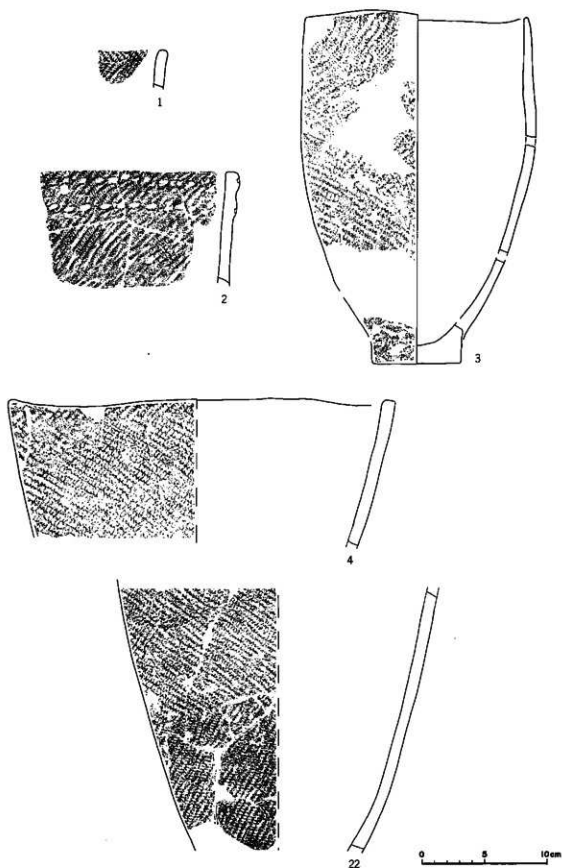
No.	長径×短径	深さ	備 考	No.	長径×短径	深さ	備 考
P ₁	52 × 45	48	主柱穴	P ₁₀	28 × 23	26	
P ₂	52 × 23	56	"	P ₁₁	20 × 18	22	
P ₃	32 × 15	45	"	P ₁₂	25 × 23	36	
P ₄	41 × 24	66	"	P ₁₃	26 × 23	38	
P ₅	51 × 30	53	"	P ₁₄	21 × 14	25	
P ₆	38 × 25	40	"	P ₁₅	30 × 28	26	
P ₇	32 × 36	45		P ₁₆	20 × 18	23	
P ₈	29 × 24	54		P ₁₇	28 × 11	33	斜め
P ₉	40 × 36	50					



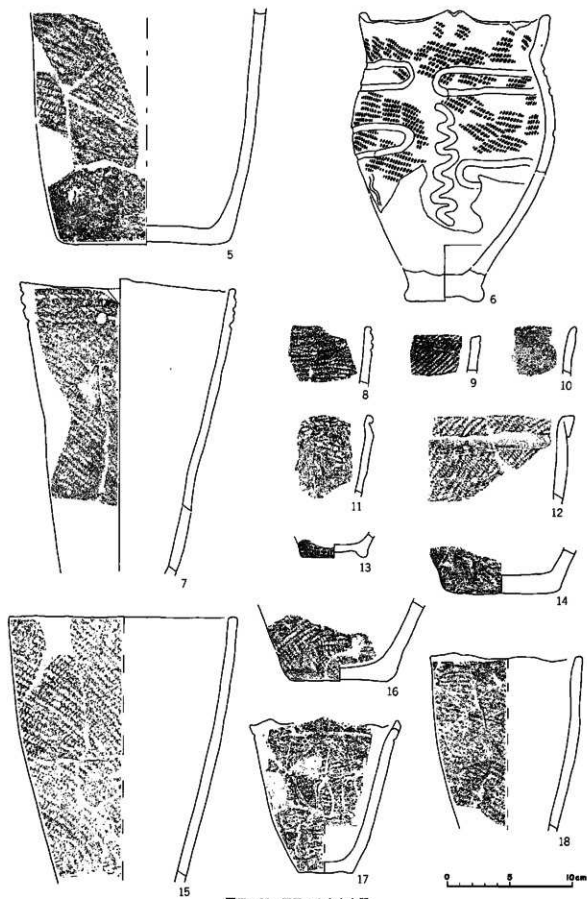
图III-20 KH-6 遺物出土状况



図III-21 KH-6



図III-22 KH-6出土土器



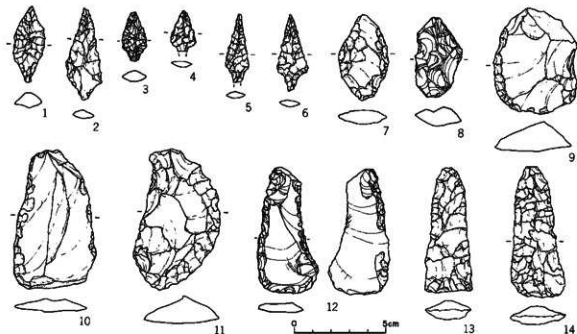
图三-23 KH-6出土土器



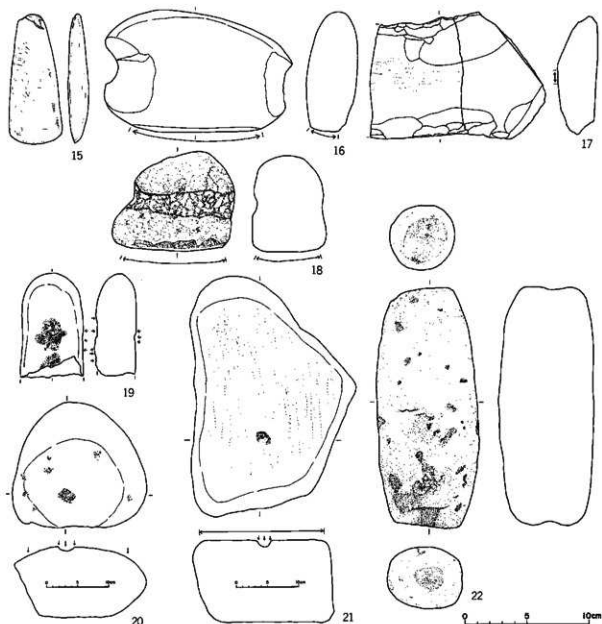
圖III-24 KH-6出土土器・土製品

KH-6 掲載土器一覽

挿図番号	分類	層位	特 色
1	I c	灰	口縁部、内面研磨。地文はR.L斜行縄文。
2	"	灰直上	"。貼付帯上に短刻文。口唇・内面研磨。地文はL.R斜行縄文。補修孔1コ。
3	"	覆土	口9.2×底7.1×高(28.2)口唇・内面削型。内外面炭化物付着。地文はL.R斜行縄文。
4	"	"	口縁部。口唇・内面研磨。地文は、L.R斜行縄文。
Ⅲ-23-5	Ⅱ	"	口(18.9)×底(14.2)×高(18.7)地文はL.R斜行縄文。
6	"	"	口16.2×底6.4×高23.2 4コの突起をもち、その頂部が二分する。沈線は長円形と能行するものがつく。地文はL.R縄文。
7	Ⅱ	覆土	口17.1×底(7.3)×高(23.2)口縁部磨消。口唇・内面研磨。補修孔1対。口縁部に厚く炭化物付着。地文はL.R斜行縄文。
8	I c	覆土	口縁部。3条の縄線文。地文はL.R斜行縄文。
9	"	"	"。頸部・斜位の縄線文。地文はL.R斜行縄文。
10	"	"	"。内面調整。無文。
11	Ⅱ	"	"。頸部内湾。口縁部に縄線文。
12	"	"	"。貼付帯直下無文。地文はL.R斜行縄文。
13	I c	"	底部。上げ底。
14	Ⅱ	"	"。
15	"	"	口18.3×底(10.3)×高(21)口唇・内面研磨。地文はL.R斜行縄文。
16	I b	覆土	底部。地文はL.R斜行縄文。
17	Ⅱ a	I層	口(11.9)×底(4.3)×高12.2内面研磨。口縁・頸部に沈線。
18	"	"	口(12.3)×底(7.6)×高(14)ゆるやかな成状口縁。外面炭化物付着。
Ⅲ-24-19	"	"	口26.8×高(20)口縁に4コの突起がつく。地文は複数の縄文。
20	"	"	口17.4×底(11.9)×高(25.3)口唇直下無文。地文はL.R斜行縄文。
21	"	V層	高(10.2)×底6.9 底部無文。地文はL.R縄文。
Ⅲ-22-22	"	"	胴部。内面研磨。内外面炭化物付着。地文はR.L斜行縄文。
Ⅲ-24-23	"	I層	口23.7×底7.5 高30.7 貼付帯を施した後には縄文を施す。内外面、炭化物付着。地文はL.R斜行縄文。M-25、KP28覆土の土器片と接合。
24	Ⅱ	I層	口(13.2)×高(8.3)口縁部磨消。3条の縄線文。地文はL.R斜行縄文。
25	"	Ⅳ層	口10.1×高(7.9)縄線文の一部。調整により失くなる。
26	"	"	口11.1×高(7.9)口唇断面四角。貼付帯無文。地文はL.R斜行縄文。
27	"	9層	土製円盤。約半分欠損。中心に貫通孔。



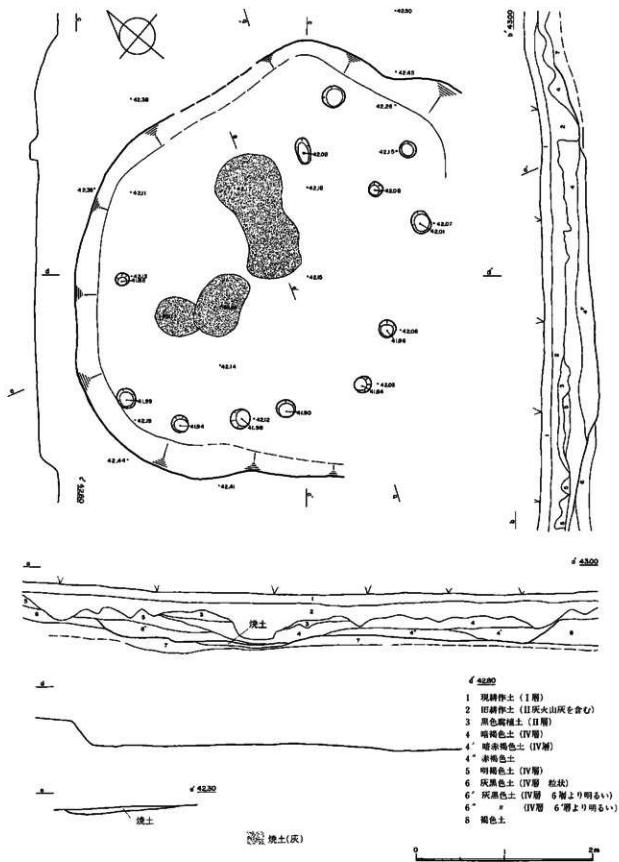
図Ⅲ-25 KH-6出土石器



図III-26 KH-6出土石器・石製品

KH-6 掲載石器一覧

番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ (cm)	重量(g)	材質	番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ (cm)	重量(g)	材質
1	石 鏃	IA5	C	4	4.1×1.6×1.0	5.0	Sh	12	黒 坎 石 器	II B1	B	7	6.5×2.6×1.1	16.0	Sh
2	"	IA6	—	—	5.0×2.0×0.8	5.0	"	13	"	II B2	C	2	7.8×2.9×1.0	18.0	"
3	"	"	C	—	2.6×1.3×0.6	1.1	"	14	"	"	B	1	6.8×3.2×0.6	12.0	"
4	"	"	A-15	N	(2.2)×1.3×0.4	(1.0)	"	15	石 斧	WA1	—	—	10.3×4.2×1.6	105.0	Gr-Mad
5	"	"	A	N	(3.7)×0.8×0.4	(1.4)	"	16	た ち 石	VB2	BC	N	(8.3)×5.0×3.4	(205.0)	And.
6	"	"	B	N	4.1×1.2×0.5	2.0	"	17	十 字 石	YA1b	B	—	14.5×9.5×4.2	925.0	Disc.
7	石 鏃 状 出 土 ナイフ	IB2	B	9	4.6×2.8×0.8	9.0	"	18	"	YA2	C	1	9.8×(13.9)×3.3	(700.3)	And.
8	"	IB	B	9	4.3×2.5×1.1	10.0	"	19	北 海 道 式 石 冠	VA5	A	N	7.9×9.5×5.6	575.0	"
9	スクレイパー	III C3	—	—	5.7×4.4×1.7	40.0	"	20	石 棒	"	D	2	15.1×8.0×7.0	1.6	"
10	"	III C1a	—	—	7.4×4.4×1.2	31.5	"	21	台 石	WA	—	—	21.2×21.8×12.4	8.1kg	"
11	つばね形ナイフ	IIA1	AB	9	7.6×4.3×1.5	47.0	"	22	"	"	—	—	38.4×22×14	24.3	"



図III-27 KH-7

KH-7

位置 K-29, L-29 調査区中央平坦部 KH-9 a 及びKH-10と重複している。

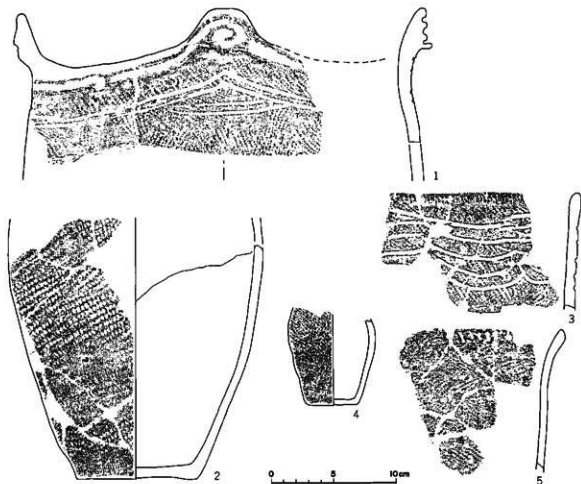
形態 長軸が東-西方向の不整形円形。長径5 m, 短径推定4.5 m, 深さは約0.2 mである。北から北西にかけてはKH-9 aの南端部を切って構築されている。南東部は土層断面では不明瞭で判別できなかったが、遺物の出土状態などからみて、KH-10に切られているものと考えられる。壁の立ち上りは傾斜しており、床との境は明瞭ではない。床面は全体的にみるとほぼ平坦だが、凹凸がみられる。

柱穴 径15 cm~20 cm, 深さ10 cm~20 cmのビットが12個検出された。中央部を除く壁寄りに分布しており、柱穴と考えられる。

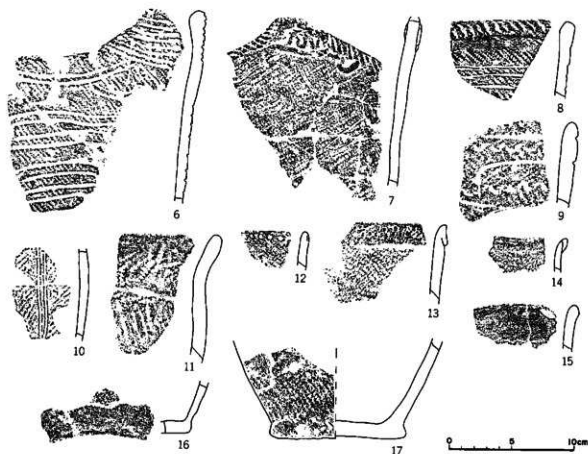
炉跡 焼土(地床炉)が床面中央北寄りに2カ所ある。焼土の厚さは、6~8 cmである。

遺物の出土状態 床面には、多数の遺物が出土している。土器は数個体が器形を復原し得た。しかし多くは破片である。石器も14点のほかはすべて剥片である。覆土中にも多数の遺物が含まれていたが、耕作の影響が下位に達しており、小片が多い。覆土上部には、耕作による畝のあとがみられる。

時期 床面出土の土器は、I群b類のものが多くことから、縄文時代中期中葉に構築された住居跡と考えられる。重複関係から判断して、KH-9 aより新しく、遺物の出土状態等からみてKH-10より古いことがわかる。



図III-28 KH-7 出土土器



図III-29 KH-7出土土器

KH-7 掲載土器一覧

押図番号	分類	層位	特 色
Ⅱ-28-1	I b	4層	口32.7×高(13.6) 口唇に溝状の沈線。突起に渦巻き状の文様。地文R L斜行縄文。KH-10B、L 30V層の土器片と統合。
2	I b	覆土	底9.7×高20.8 地文L R斜行縄文。
3	Ⅱa	4層	口(6.7)×底4.3×高(7.8) 剩下半部無文。地文R L縄文。
4	I b	6層	口縁部。口唇にヘラ状工具による刻目。地文R L斜行縄文。
5	"	覆土	"。口唇に縄文原体による刻目。外面炭化物付着。
Ⅲ-29-6	"	"	"。突起かやや内湾する。地文はR L斜行縄文。
7	"	4層	"。口唇に斜位の刻目。頸部から下位にかけて浅い沈線。地文はL R斜行縄文。
8	"	"	口縁部。口唇に縄文原体による刻目。地文はR L斜行縄文。
9	"	V層	"。地文は結束第二種羽状縄文。
10	"	6層	胴部。胎土に8mm程の小石を含む。地文はR L斜行縄文。
11	"	V層	口縁部。外面炭化物付着。地文はL R斜行縄文。
12	"	Ⅳ層	"。竹管による円形刺突文。
13	I c	"	"。貼付帯上に円形刺突文。外面に炭化物付着。
14	Ⅱa	"	"。口縁部無文。地文R L斜行縄文。
15	"	"	"。口縁部やや外反。無文。
16	I b	覆土	底部。
17	"	4層	"。内面厚く炭化物付着。地文R L縄文。

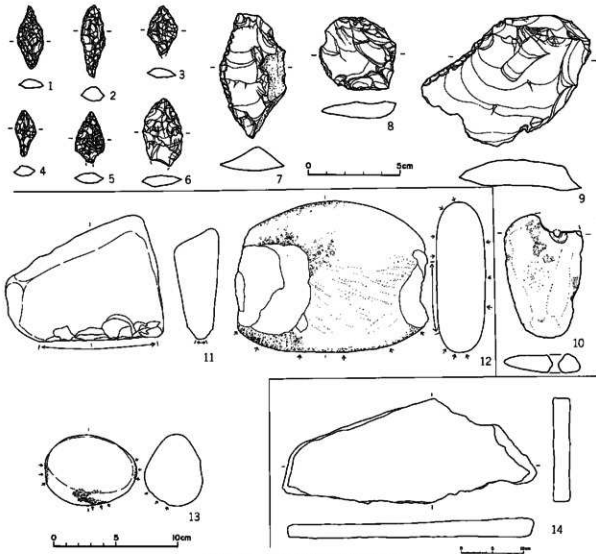
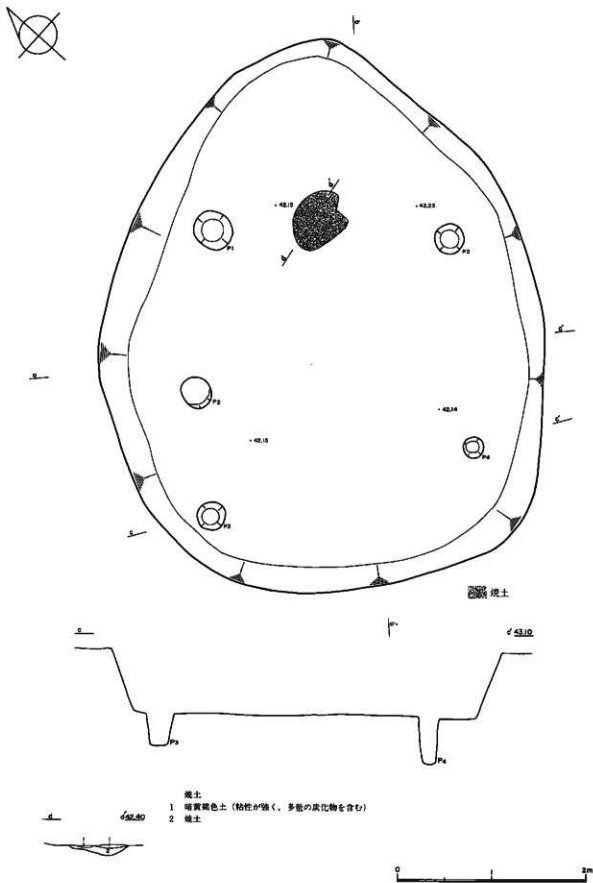


図30 KH-7 出土石器・石製品

KH-7 携戦石器一覧

番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ (cm)	重量 (g)	石質	番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ (cm)	重量 (g)	石質
1	石 鏃	IA5	—	IV	3.4×1.3×0.5	2.0	Sh.	8	スクレイパー	III C 3	B	IV	3.9×4.0×0.9	7.6	Sh.
2	"	IA6	A	"	3.6×1.1×0.7	3.0	"	9	"	III C 2	—	—	7.0×8.3×1.5	85.0	"
3	"	"	—	—	(2.6)×1.6×0.5	(1.6)	"	10	鏃	—	—	—	(6.6)×4.4×1.0	(24.2)	Sa.
4	"	"	—	V	2.4×1.1×0.6	1.1	"	11	十字石	III A 1 a	B	—	12.2×10.7×3.2	512.1	And.
5	"	"	—	—	(2.8)×1.6×0.6	(2.0)	Obs	12	"	III A 1 a	K-30	—	15.1×12.0×4.0	1.2kg	Disc.
6	石鏃付ナイフ	IB2	—	4'	3.3×2.1×0.8	4.0	Sh.	13	たたき石	VB3	—	—	7.3×5.7×4.3	261.0	And.
7	スクレイパー	III C 1 a	B	4-6	6.6×3.5×1.2	22.0	"	14	台	III A	—	—	48.0×16.8×3.0	5.1kg	"



KH-8 a

位置 L-27, M-26・27, N-27 調査区中央平坦部 KH-8 bと重複。

形態 長軸が北東-南西方向の卵形。長径5.3 m, 短径4.7 m, 深さ約0.7 m。壁は外へ向ってやや傾斜している。

床面は, VII層中につくられており, 非常に堅固である。

柱穴 5個検出された。北西側の壁寄りに3個, 南西の壁寄りに2個ある。径は20~40 cm, 深さが30~50 cmである。

炉 中央部の先端寄りに焼土(地床炉)が検出された。長径65 cm, 短径50 cmの不整形円で, 焼土の厚さは約8 cmである。

遺物の出土状態 床, 覆土ともに遺物は少ない。

時期 出土遺物からみて, 縄文時代中期末葉の住居跡と考えられる。

KH-8a 柱穴一覧表

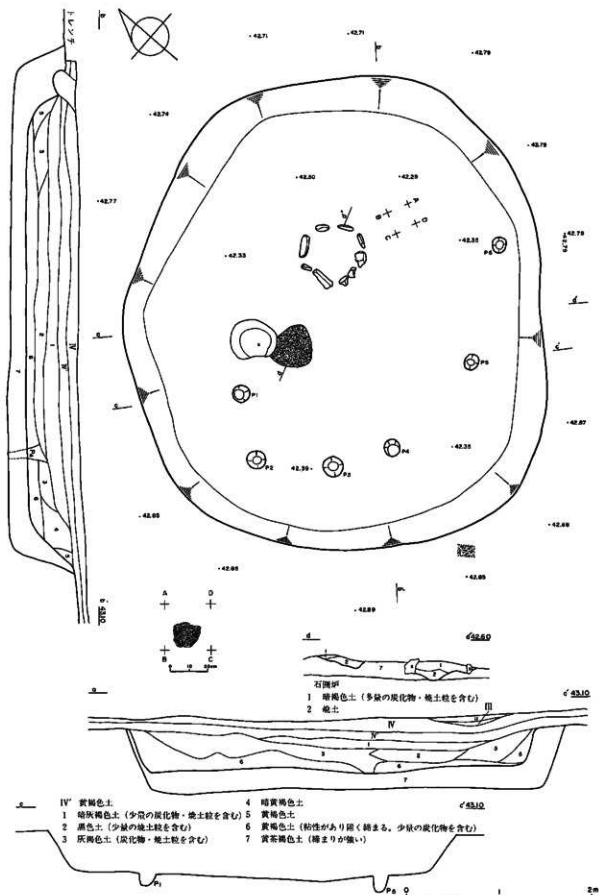
№	長径×短径	深さ	備考
P ₁	43 × 23	57	主柱穴
P ₂	35 × 29	53	"
P ₃	30 × 19	33	"
P ₄	22 × 13	50	"
P ₅	32 × 20	44	"



図III-32 KH-8 a出土土器

KH-8a 掲載土器一覧

標記番号	分類	層位	特 色
図-32-1	I b	床	胴部。胎土にバミス含む。



図III-33 KH-8b

KH-8 b

位置 M-26・27, N-27 調査区中央平坦部 KH-8 a と重複。

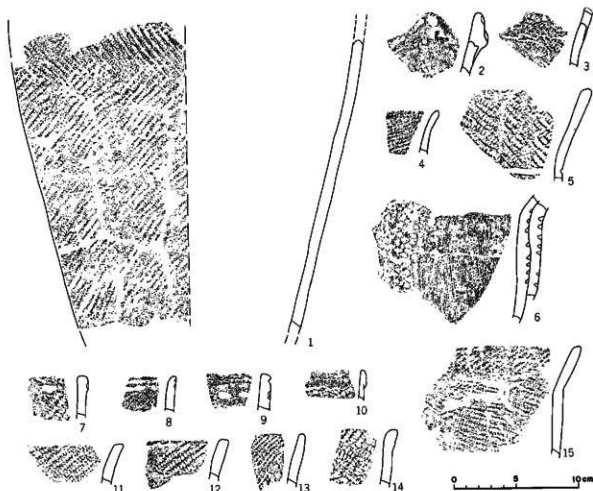
形態 長径 5 m, 短径 4.4 m のほぼ円形。深さは北東側で掘り込み面から 45 cm。壁は外へやや傾斜している。KH-8 a の覆土内に、これより規模を一回り小さくした形で造られている。床面は壁、床ともに KH-8 a の覆土中につくられているが、踏み固められたものと思われる、堅固である。

柱穴 南側を除く壁ぎわに 6 個の柱穴が確認された。径は 16~23 cm, 深さは 13~21 cm である。柱穴の間隔は約 70~130 cm である。

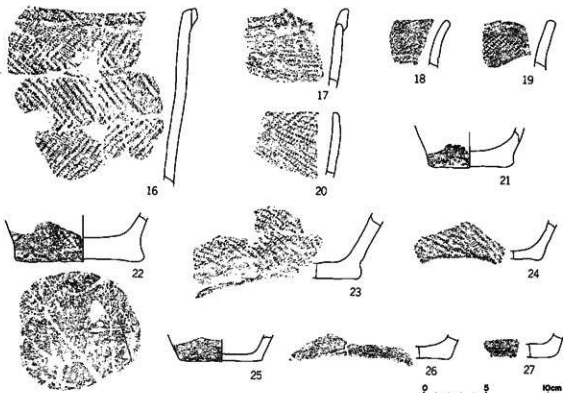
炉 石組炉と焼土(地床炉)が検出された。石組炉は、中央部北東寄りにある。9 個(角礫 4 個, 円礫 5 個)の石をほぼ円形に並べたもので、このうちの 1 個は扁平打製石器が使用されたもの。焼土(地床炉)は、石組炉から約 60 cm 西側にある。焼土の厚さはいずれも 8 cm~10 cm である。

遺物の出土状態 床面、覆土ともに中央部から南西側にかけて多く出土した。焼土(地床炉)の西側から台石が 1 点出土している。

時期 床面、覆土出土の土器から判断して縄文時代中期末葉前後の住居跡と考えられる。



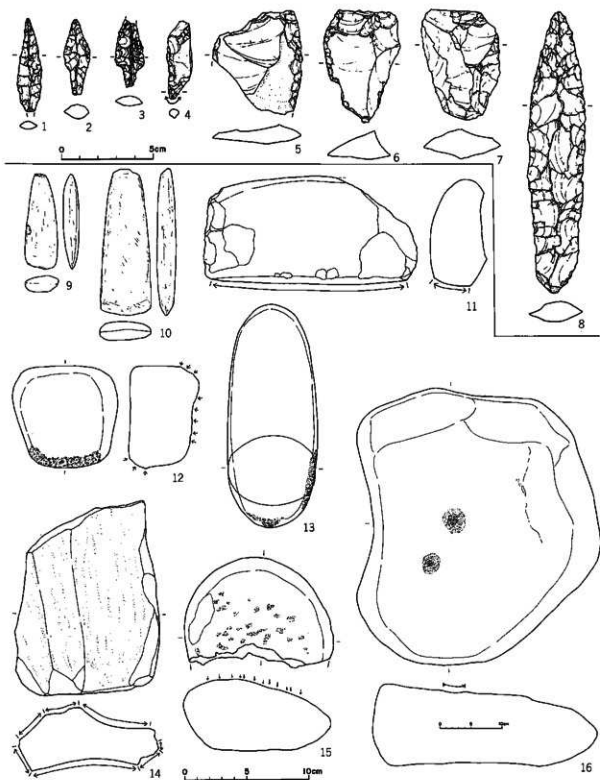
図III-34 KH-8 b 出土土器



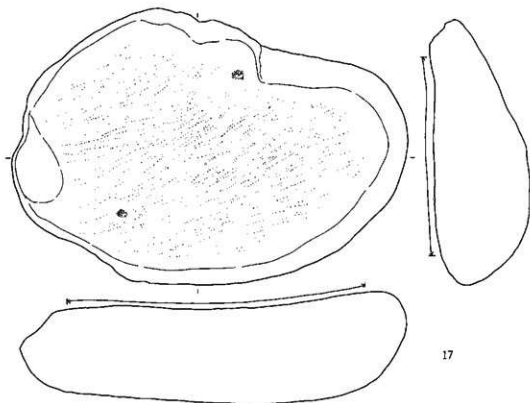
図III-35 KH-8b出土土器

KH-8b 掲載土器一覧

押図番号	分類	層位	特	色
III-34-1	I c	覆土	口(28.4)×高さ(23.6)内面縦位の調整痕。地文R L斜行縄文。	
2	I b	"	口縁部。口唇に沈線。肥厚帯上に貼付文。地文R L斜行縄文。	
3	"	4層	"。口唇 縄文原体による割目。地文R L斜行縄文。	
4	"	覆土	"。外面炭化物付着。地文L R斜行縄文。	
5	"	N層	"。内面研磨。地文は複節の縄文。	
6	I c	覆土	胴部。貼付帯の上・左右に刺突文。地文はクシ目状工具による条痕。	
7	"	1層	口縁部。肥厚帯上に短割文。地文R L斜行縄文。	
8	"	覆土	"。2段の短割文。	
9	"	N層	"。縄線文と刺突文をもつ。	
10	"	覆土	"。貼付帯無文。地文L R縄文。	
11	"	4層	"。口唇・内面研磨。地文複節の縄文。	
12	"	V層	" " " " " " " " " " " "	
13	"	V層	"。外面炭化物付着。地文無節の縄文。	
14	"	N層	"。条が深く刻まれる。地文L R縄文。	
15	"	覆土	"。口縁外反。地文L R縄文。	
III-35-16	II	"	"。口唇・内面調整。地文R L斜行縄文。	
17	"	N層	"。頸部磨消。内面縦位の調整痕。地文R L縄文。	
18	"	覆土	"。口縁無文。外面炭化物付着。	
19	"	N層	"。口唇・内面研磨。外面炭化物付着。地文R L斜行縄文。	
20	"	"	"。やや内湾する。地文L R縄文。	
21	I b	覆土	底部。胎土に小石多量に含まれる。	
22	"	"	"。木炭灰。	
23	"	"	"。地文L R斜行縄文。	
24	I c	"	" " " " " " " " " " " "	
25	II	"	" " " " " " " " " " " "	
26	"	"	" " " " " " " " " " " "	
27	"	N層	" " " " " " " " " " " "	



图III-36 KH-8b出土石器



図III-37 KH-8b出土石器

KH-8b 掲載石器一覧

番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ (cm)	重量(g)	材質	番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ (cm)	重量(g)	材質
1	石	鏃	IA5	3	(5.0)×1.3×0.6	(2.0)	Sh.	10	石	片	FA1	4	11.6×4.0×1.5	113	Gr-Med.
2	"	"	IA6	-	4.0×1.4×0.8	3.4	"	11	すり石	FA1b	-	17.1×8.5×3.5	1.0kg	And.	
3	"	"	C	-	(3.6)×1.6×0.7	(3.0)	"	12	たなき石	VB2	-	8.3×8.1×5.4	615.0	And.	
4	石	鏃	IIA	B	4.2×1.3×1.2	5.5	"	13	"	"	-	17.7×7.2×5.8	1.11kg	"	
5	スクリュー	III C1	a	-	(5.5)×4.8×1.1	(20.0)	"	14	砥石	III A	-	14.8×11.2×5.9	1.0kg	Sa.	
6	"	"	"	-	5.9×4.1×2.1	35.0	"	15	台	石 III A	-	24.0×(17.0)×11.0	6.31kg	And.	
7	"	"	"	-	5.8×3.9×1.7	41.0	"	16	"	"	-	46.0×23.6×13.6	33.9kg	"	
8	石	鏃	IB2	5	15.0×3.0×1.1	47	"	17	"	"	-	68.4×46.4×15.8	68.6kg	"	
9	石	のり	IVB	IV	7.5×2.6×1.2	37	Bl-ach.								

KH-9 a

位置 K-26・27・28・29, L-26・27・28・29 調査区中央平坦部 KH-9 bと重複。

形態 北東側の壁は崖崩れのため失なわれている。また北側の壁の一部はKP-30によって切られ、南西の壁の一部はKH-7によって切られている。長軸が北西-南東方向の隅丸長方形である。長径13.9m, 推定短径6.2m。発掘された14軒の中で最大の住居跡である。

床面はほぼ平坦。水平である。

柱穴 14個検出された。径・深さによって次の3種類に分けられる。径32~63cm, 深さ54~98cmのP₁~P₄, 径29~38cm, 深さ23~55cmのP₇~P₁₀, 径19~29cm, 深さ15~40cmのP₁₁~P₁₄。このうちP₁~P₄は、規則的な配置を示しており規模も大きいことから主柱穴と考えられる。またP₂の断面に柱と考えられるものの痕跡が確認された。これによる掘り方の径は約55cmあるのに対し、柱の径は約18cmほどである。

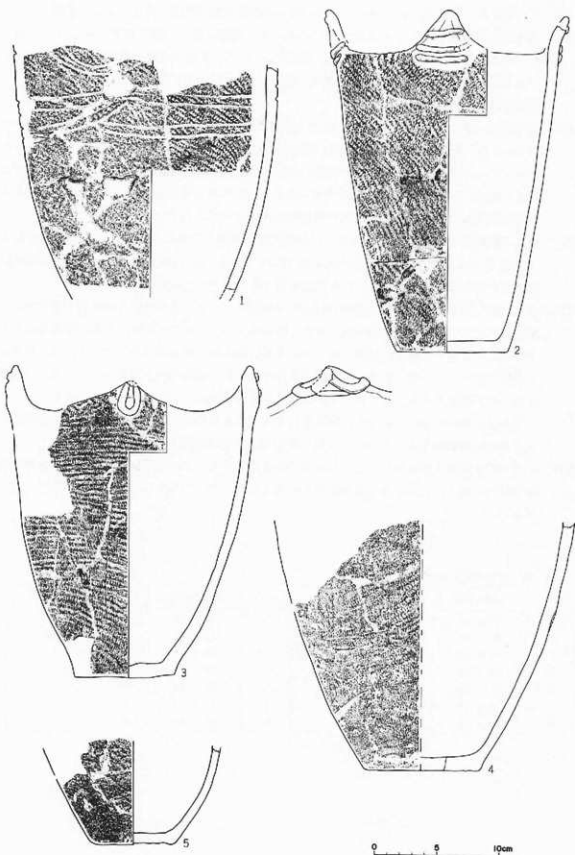
炉 焼土(地床炉)が8箇所検出された。ほぼ等間隔で長軸上に並んでいる。このうちF₆が最大で長径67cm, 短径55cm, 焼土の厚さは12cmである。高さがそろっていること、規則的に配列されていることからみて、同時期に併用された炉と考えられる。

遺物の出土状態 床直上から約20個体の土器が一括出土した。また獣骨の細片が北側の覆土中から検出された。これは、炭化物・焼土粒とともに出土していることから、人為的な廃棄によるものとしてとらえられる。図III-38-3の土器は礫と約200点のフレイク・チップに狭まれた状態で出土した。覆土断面では確認できなかったが、遺物の出土状態からみてここに墓塚があった可能性もある。図-38-4の土器は深さ約20cmの浅いくぼみから出土した。このくぼみは人為的なものではなく、攪乱等によるものと判断された。全体的にみると中央部から北西側に遺物が集中していた。図III-41は遺物の出土状態を示したものである。

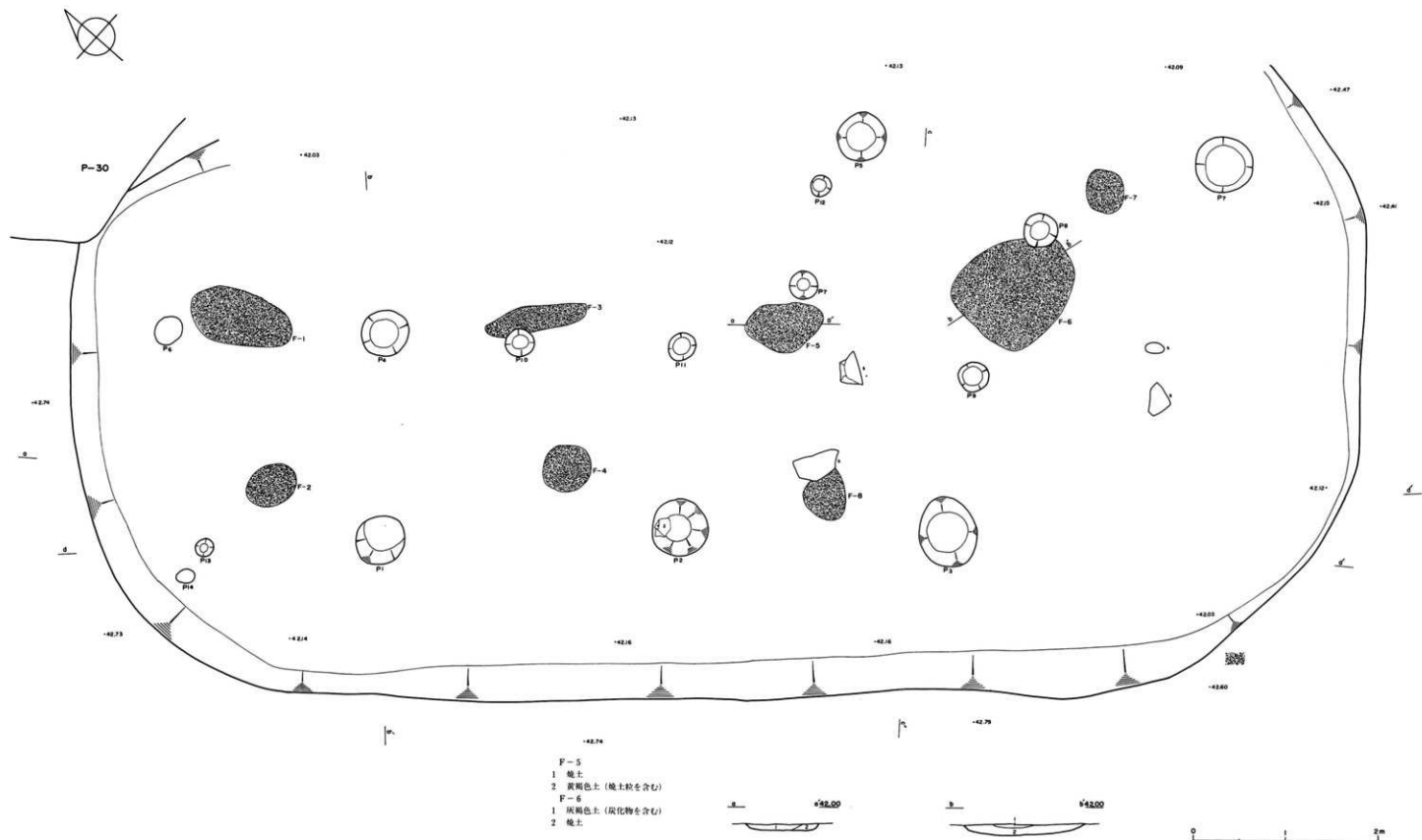
時期 床直上の土器はI群b類に相当するものであることから、この住居は縄文時代中期中葉に構築されたものと考えられる。重複関係からみてKP-29より新しく、KH-7・KP-30より古い。

KH-9a 柱穴一覧表 (cm)

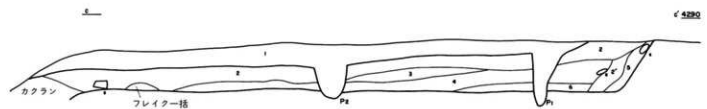
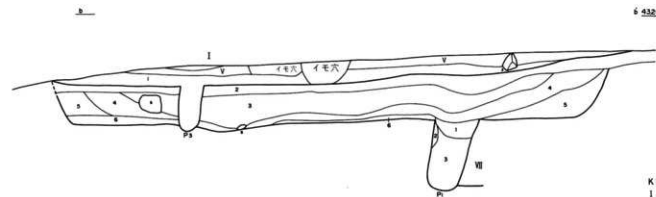
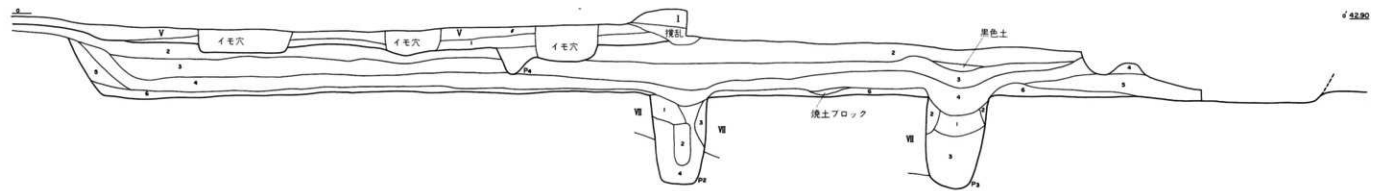
No.	長径×短径	深さ	備考	No.	長径×短径	深さ	備考
P ₁	52 × 44	75	主柱穴	P ₄	38 × 30	47	
P ₂	59 × 30	98	"	P ₈	33 × 23	31	
P ₃	63 × 45	95	" 柱痕	P ₁₀	30 × 18	23	
P ₄	52 × 32	68	"	P ₁₁	29 × 24	16	
P ₅	52 × 31	54	"	P ₁₂	21 × 14	15	
P ₆	32 × 30	63	"	P ₁₃	19 × 8	40	
P ₇	29 × 15	55	"	P ₁₄	21 × 19	20	



图三-38 KH-9a 出土土器



图III-39 KH-9a



KH-9a

- 1 灰褐色土 (粘性がある)
- 2 暗灰褐色土 (炭化物・焼土粒を含む)
- 3 黄褐色土 (炭化物・焼土粒を含む)
- 4 暗黄褐色土 (多量の炭化物・焼土粒を含む)
- 5 黄褐色土 (締まりが強い)
- 5' 黄褐色土 (少量の炭化物を含む)
- 6 黄褐色土 (締まりが強く、少量の炭化物・焼土粒を含む)

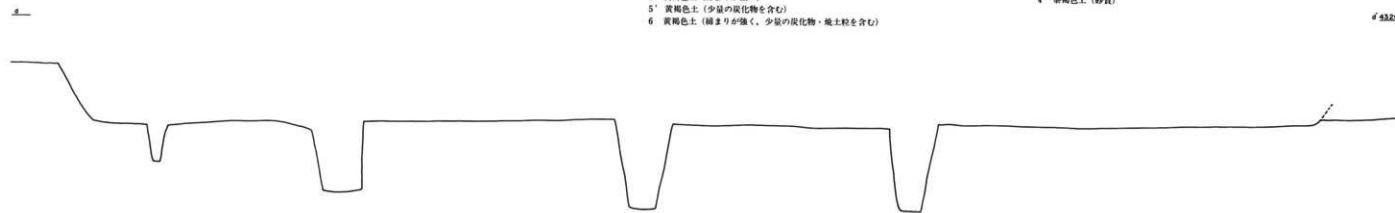
KH-9a

- P1
- 1 暗褐色土 (炭化物・焼土粒を含む)
- 2 黄褐色土
- 3 茶褐色土 (砂質)

P2

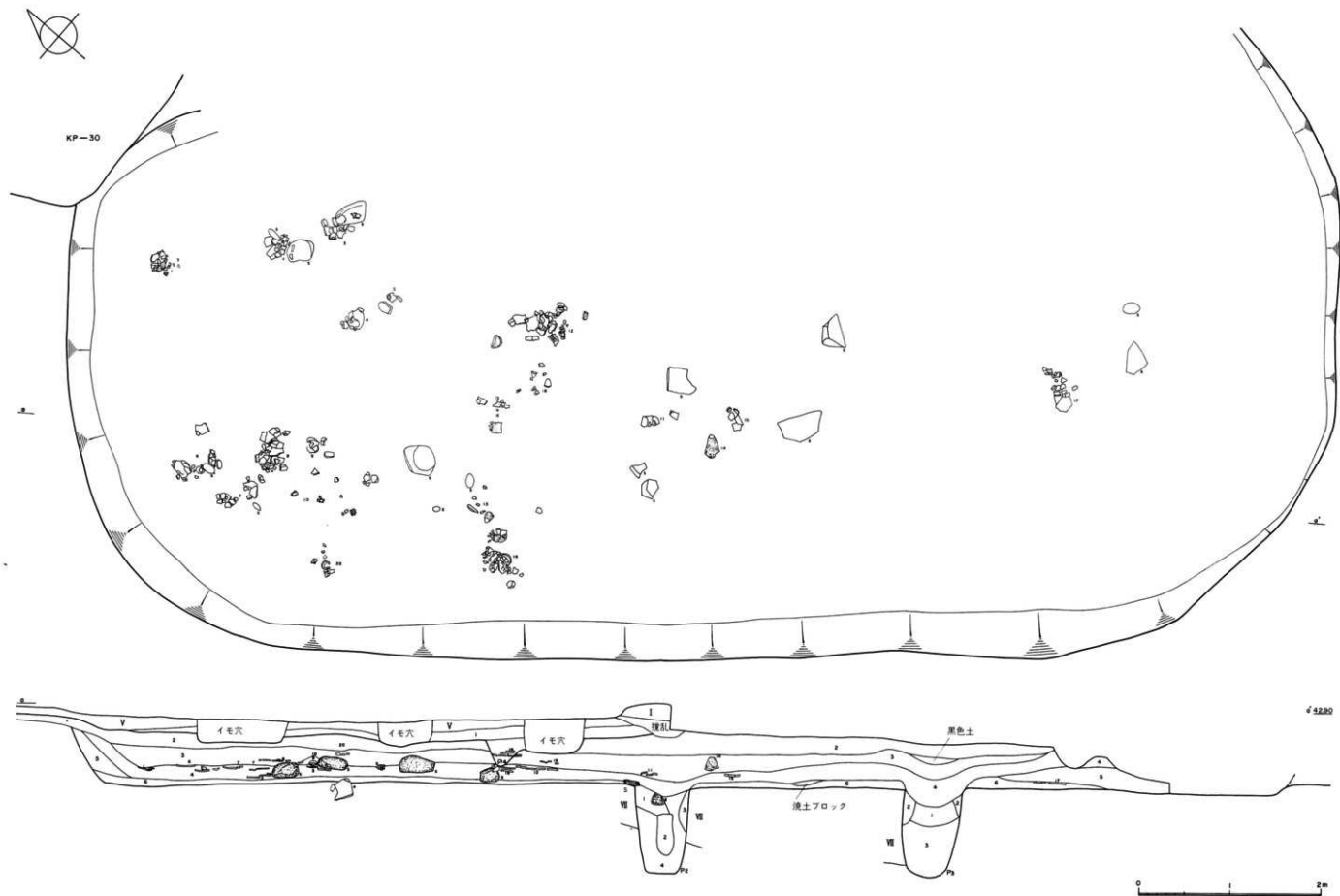
- 1 黄褐色土 (質屑・小礫が混入)
- 2 暗褐色土 (締まりが強い、柱状)
- 3 黄褐色土
- 4 茶褐色土 (砂質)

4320

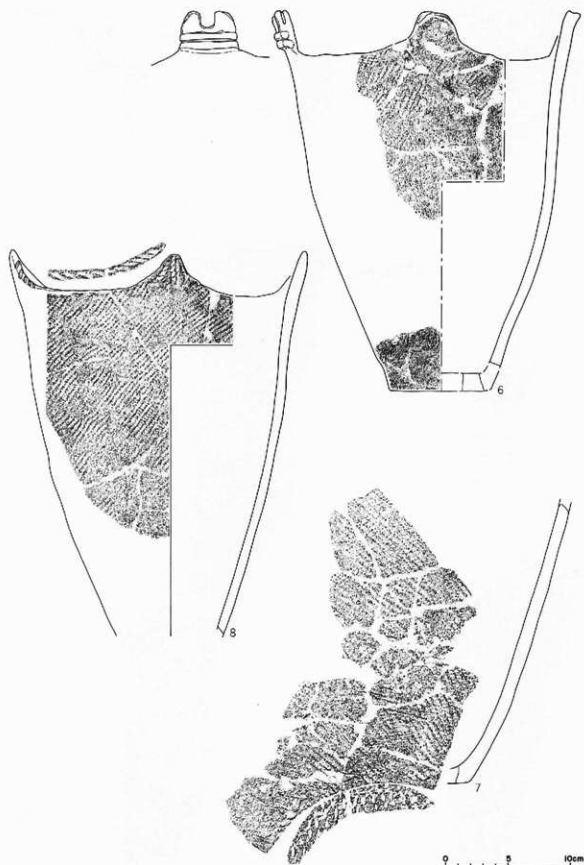


図III-40 KH-9a





図三—41 KH—9a 遺物出土状況



圖III-42 KH-9a 出土土器



图III-43 KH-9a 出土土器

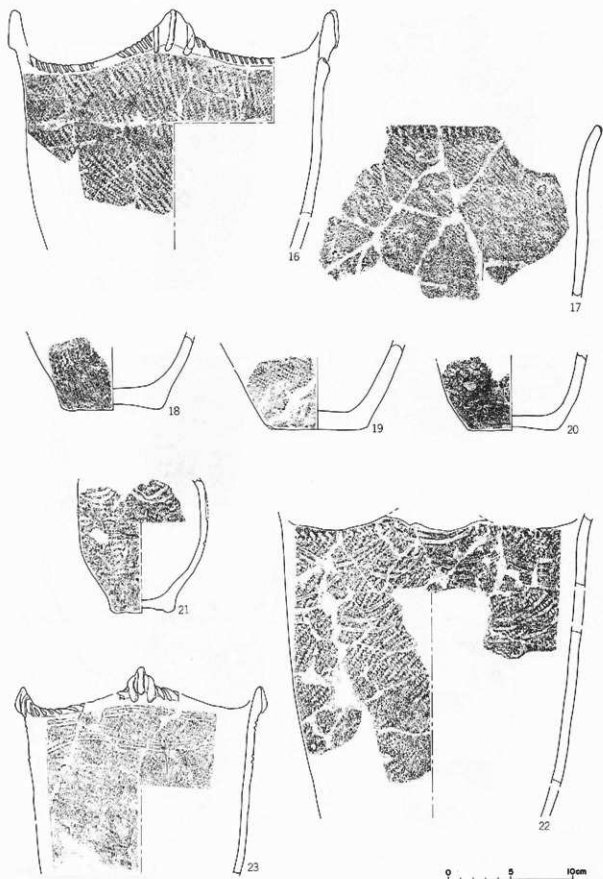


圖 III-44 KH-9a 出土土器

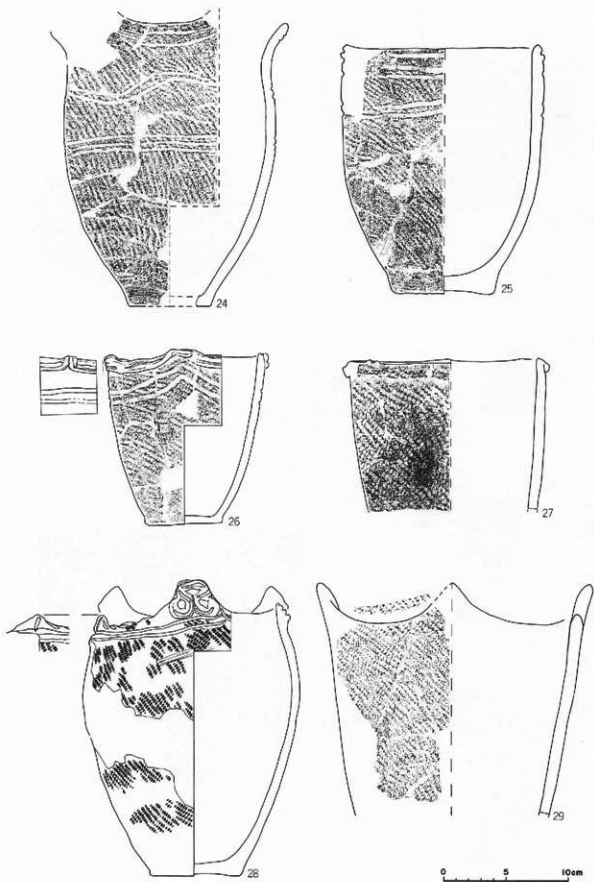
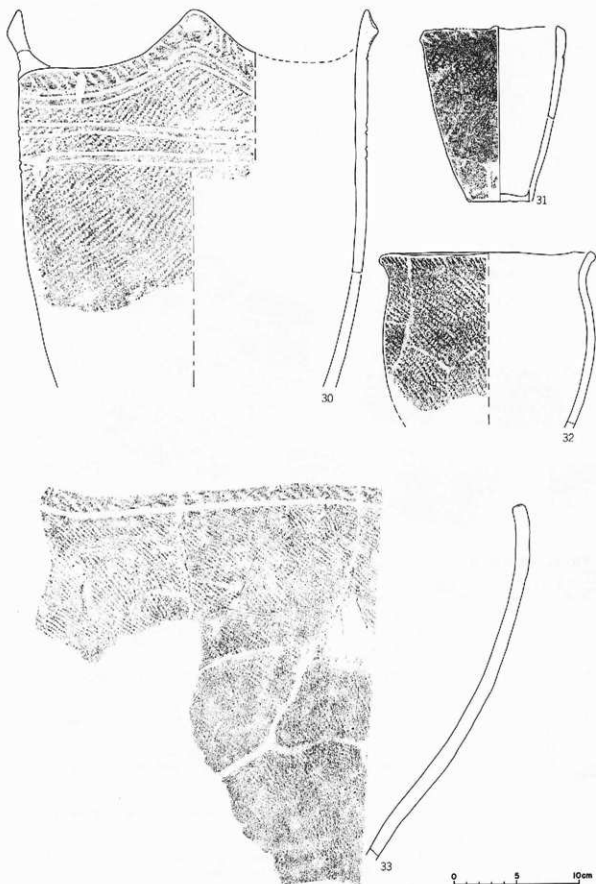
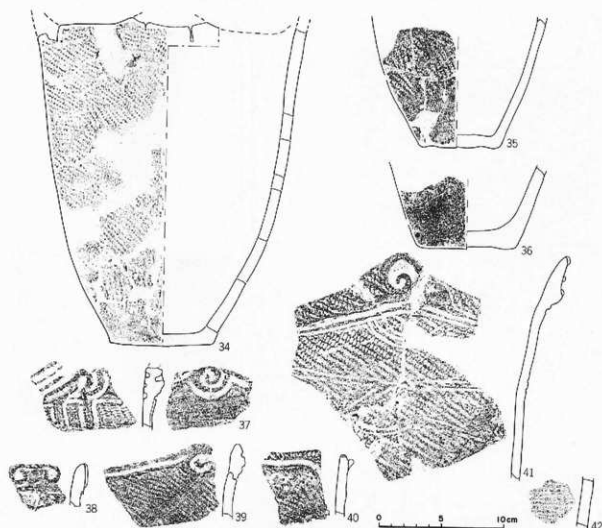


图 III-45 KH-9a 出土土器



図III-46 KH-9a 出土土器

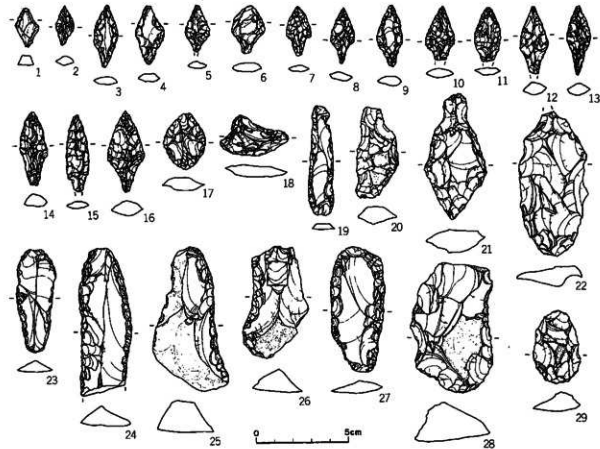


図三-47 KH-9a 出土土器

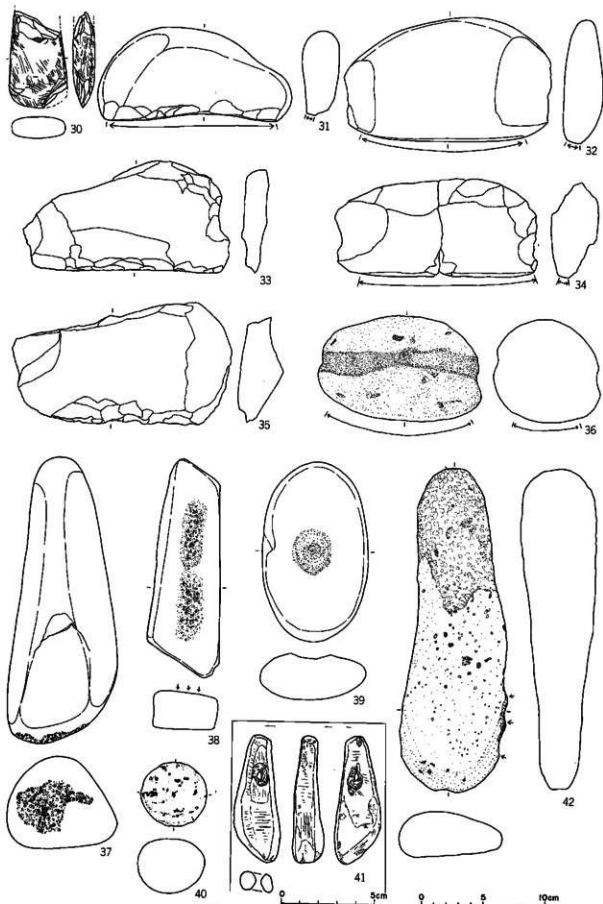
KH-9a 掘敷土器一覧

標 本 番 号	分 類	層 位	特 色
III-38-1	1 b	4 層	口(20.8)×高(20) 外面上部炭化物付着。地文 L R 斜行縄文。
2	"	"	口18×底8.9×高27.3 口唇縄文原体による割目。突起の中央部凹む。地文 R L 斜行縄文。
3	"	"	口19.7×底8×高23.6 口唇縄文原体による割目。突起に 2 種類の粘付文。地文 R L 斜行縄文。
4	"	"	底9.4×高(19.8) 地文 R L 縄文。
5	"	"	底7.2×高(13.7) 粘土に小石を含む。
III-42-6	"	"	口22.3×底8.3×高30.3 山形突起と頂部が 2 分する突起をもつ。地文 L R 斜行縄文。
7	"	"	底部。
8	"	3 層	口22.7×底(8.7)×高(30.3) 口唇へう状工具による割目。地文 L R 斜行縄文。
III-43-9	"	"	口12.4×底5.6×高14 口唇へう状工具による割目。内外面炭化物付着。地文 R L 斜行縄文。
10	"	"	口17.4×底3.8×高7.6 無文。
11	"	4 層	口16×底(17.2)×高(17.2) 4 ヶ所突起の割離痕。地文 R L 斜行縄文。
12	"	"	口22×底7.8×高32 4 コの突起をもつ。頂部が丸いもの 1。頂部がとがるもの 3。突起の下には垂下して曲る沈線。地文複雑とより糸の縄文。
13	1 b	4 層	口11.5×底5.8×高9.4 地文 R L 縄文。
14	"	3 層	口19.9×底(7.5)×高(24.5) 3 ヶ所突起の割離痕。口唇斜位の割目。口縁 厚く炭化物付着。地文 R L 斜行縄文。
15	1 b	4 層	口17.1×底22.5×高22.5 地文 R L 斜行縄文。
III-44-16	"	"	口24.7×高(19) 口唇へう状工具による割目。地文 R L 斜行縄文。
17	"	6 層	口縁部。口唇 縄文原体による割目。地文 R L 斜行縄文。
18	"	3 層	底部。上唇部。地文 R L 縄文。

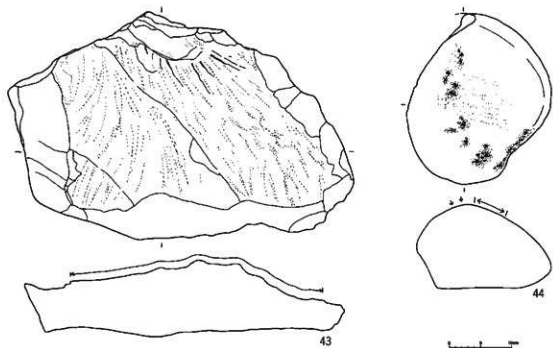
採 取 番 号	分 類	層 位	特 色
19	1 b	3層	底部。粘土多量の小石含む。地文R L斜行縄文。
20	"	"	"。内面炭化物付着。
21	"	4層	口(10.1)×底5×高(10.7) 上部に円瓦文。器面磨れて割離。
22	"	覆土	口24.7×高(24) 口唇縄文原体による刻目。上部に円瓦文。地文L R L複節縄文。
23	"	3層	口20.2×高(16.5) 口唇に斜位の刻目。地文R L縄文。
III-45-24	"	4層	口16.7×底8.8×高22.5 地文R L斜行縄文。
25	"	3層	口16.4×底8.3×高19.5 地文R L斜行縄文。
26	"	覆土	口13×底6.2×高13.9 4つの底い突起。口唇に沈線。地文L R縄文。
27	"	"	口15.7×高(16.7) 口唇調整により細文。地文R L R複節縄文。
28	"	"	口15.5×底7.4×高23.7 口唇へラ状工具による刻目。突起直下2本の横走沈線。地文R L斜行縄文。
29	"	"	口20.5×高(18.5) 口唇縄文原体による刻目。地文R L斜行縄文。
III-46-30	"	"	口28×高(30) 突起に円形の貼付文。口唇へラ状工具による刻目。地文L R L複節縄文。
31	"	"	口18×底5.4×高14 口唇縄文原体による刻目。地文R L斜行縄文。
32	"	"	口17.3×高(13.6) 口唇縄文原体による刻目。内外面炭化物付着。地文R L斜行縄文。
33	"	"	口縁内溝。口唇縄文原体による刻目。外面上部、内面下部に炭化物付着。地文R L斜行縄文。
III-47-34	"	"	口22.3×底8.3×高27 突起割離。地文R L斜行縄文。
35	"	"	底部。地文R L縄文。
36	"	"	"。
37	"	3層	口縁部。内外面に渦巻文。地文R L縄文。
38	"	"	"。細い貼付文がつく。
39	"	"	"。突起直下に渦巻文。地文R L斜行縄文。
40	"	4層	"。口唇へラ状工具による刻目。地文R L。
41	"	覆土	"。口唇縄文原体による刻目。突起に粘土紐による渦巻文。地文R L R複節縄文。
42	"	"	胴部。地文魚骨回転文。



図III-48 KH-9a 出土石器



圖III-49 KH-9a 出土石器·石製品



図III-50 KH-9a 出土石器

KH-9a 掲載石器一覧

番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ (mm)	重量(g)	材質	番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ (mm)	重量(g)	材質
1	石	IA 5	E	床	2.0×1.2×0.6	0.5	Sh.	23	スラレイバー	ⅢC1 a	G	4	5.5×2.1×0.7	7.7	Sh.
2	石	〃	G	—	2.1×1.9×0.6	0.7	〃	24	〃	〃	—	—	(8.0)×2.7×1.2	(34.0)	〃
3	〃	〃	G	—	3.4×1.3×0.4	1.8	And.	25	〃	〃	F	6	7.8×3.5×1.8	43.7	〃
4	〃	〃	B	—	3.1×1.4×0.5	2.0	Sh.	26	〃	〃	G	2-3	5.9×3.1×1.3	24.1	Chn.
5	〃	IA 6	F	—	(2.5)×1.3×0.5	(1.9)	〃	27	〃	ⅢC1 b	〃	〃	6.7×2.8×0.7	10.8	Sh.
6	〃	〃	BC	3	2.6×1.8×0.6	2.3	〃	28	〃	ⅢC4	F	3	3.9×2.5×1.0	9.0	〃
7	〃	〃	D	2	2.6×1.3×0.4	1.3	Obs.	29	〃	ⅢC3	AD	4	6.9×4.2×2.1	62.1	〃
8	〃	〃	—	—	3.6×1.2×0.5	1.2	Sh.	30	石 弁	ⅣA1	EH	3	(7.6)×4.6×1.8	(96.0)	Gr-Med.
9	〃	〃	EH	3	3.3×1.3×0.6	2.0	〃	31	すり石	ⅣA1 a	D	4	15.4×7.2×3.1	450.2	Sa.
10	〃	〃	G	2-3	(2.9)×1.5×0.5	(1.9)	Obs.	32	〃	ⅣA1 b	C	2	16.5×10.6×3.3	801.0	Disor.
11	〃	〃	C	—	(2.9)×1.4×0.4	(1.6)	Sh.	33	〃	ⅣA2	C	3	16.6×8.7×1.6	350.2	And.
12	〃	〃	C	—	(3.6)×1.5×0.8	(3.1)	〃	34	〃	〃	—	—	16.2×7.7×2.6	700.0	〃
13	〃	〃	C	—	3.7×1.2×0.7	2.6	〃	35	〃	〃	—	—	17.6×8.3×2.2	700.3	〃
14	〃	〃	EH	3	3.9×1.5×0.7	3.2	〃	36	北海道式石臼	ⅣA4	G	3	12.9×9.1×8.5	1.35kg	〃
15	〃	〃	B	—	(4.1)×1.2×0.5	(2.0)	〃	37	たつき石	ⅣB1	—	—	22.4×8.4×5.9	1.81kg	〃
16	〃	〃	F	3	4.4×2.0×0.9	5.0	〃	38	〃	ⅣB2	A	—	16.2×5.7×3.7	455.2	Sa.
17	石製たばナイフ	ⅠB1	B	—	3.9×2.3×1.0	5.1	〃	39	〃	〃	B	—	14.3×8.5×2.6	751.0	And.
18	つばみ付きナイフ	ⅡA2 b	B	—	3.6×2.1×0.7	4.5	〃	40	〃	ⅣB3	H	4	5.3×5.1×3.9	165.2	〃
19	〃	ⅢA1 a	G	2-3	5.8×1.4×0.7	4.2	〃	41	垂 錐	〃	B	2	6.7×3.4×1.7	35.5	Ser.
20	〃	ⅢA1 c	D	4	4.9×2.2×1.0	12.0	〃	42	石 製 品	〃	床	—	25.7×8.4×6.0	1.35kg	Gr-Med.
21	〃	〃	F	3	6.8×3.4×1.3	23.0	〃	43	台 石	〃	〃	—	57.2×36.4×11.4	27.9kg	And.
22	〃	〃	AD	—	(7.8)×3.8×1.8	(35.0)	〃	44	〃	〃	—	—	(26.8)×26.6×13.4	(10.8kg)	〃

KH-9 b

位置 K-27・28, L-27・28 調査区中央平坦部 KH-9 aと重複。

経過 H-9 aの調査中, 断面観察によって確認された。このため壁, 床が確認できたのはセクション部分と, 焼土(地床炉)が確認された部分のみである。図III-52は平面形の推定図である。

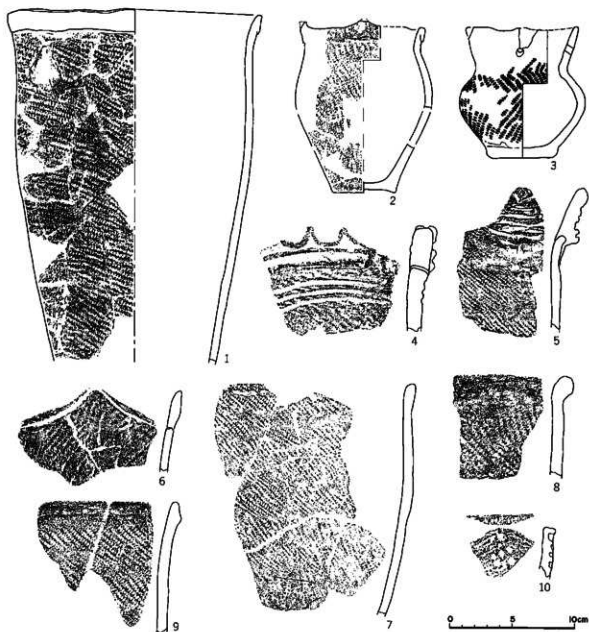
床面は, 断面観察によると, 中央部がやや低いものとみられる。

柱穴 断面観察によって柱穴状のビットが4個検出された。

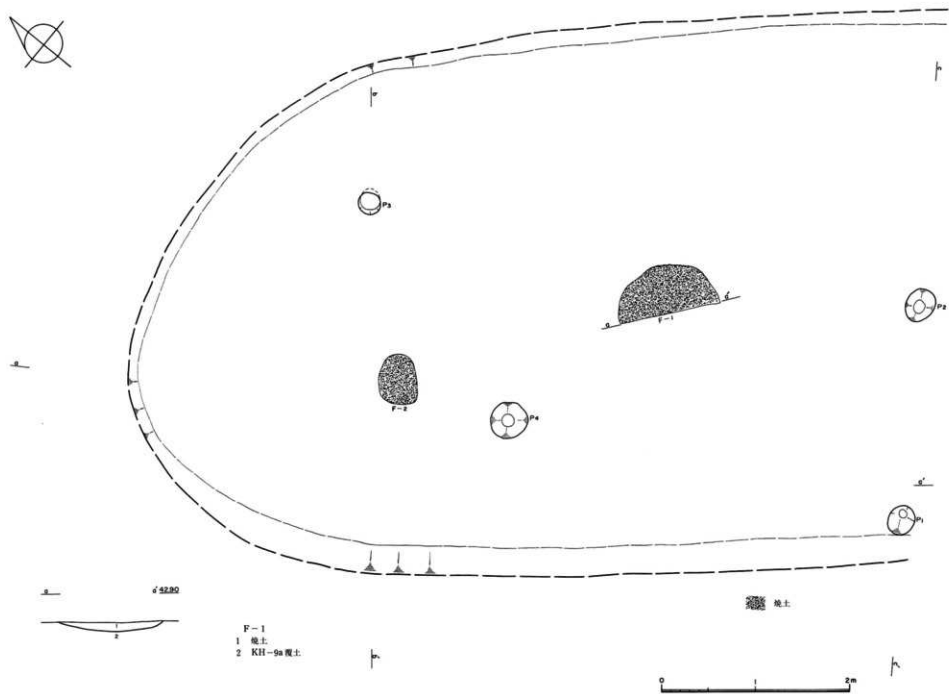
炉 焼土(地床炉)が2カ所検出された。このうちF 1は焼土の厚さが約10 cmある。

遺物の出土状態 多くの遺物が出土したが, 床面と覆土のものを判別することはできなかった。

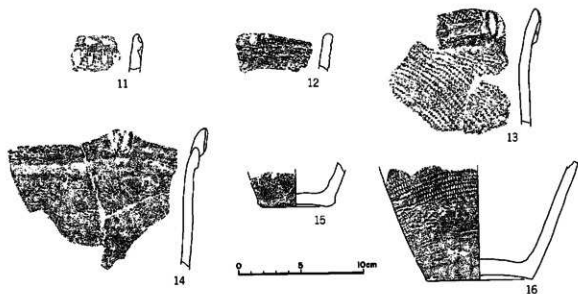
時期 出土した遺物から判断すると縄文時代中期末葉あるいは後期初頭の住居跡と考えられる。



図III-51 KH-9 b 出土土器



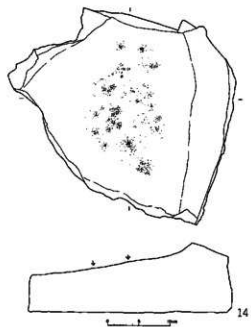
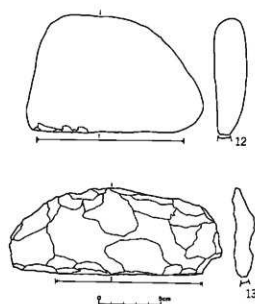
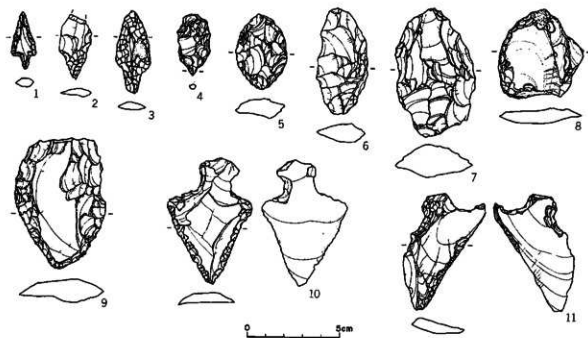
图III-52 KH-9b



図III-53 KH-9b出土土器

KH-9b 掲載土器一覧

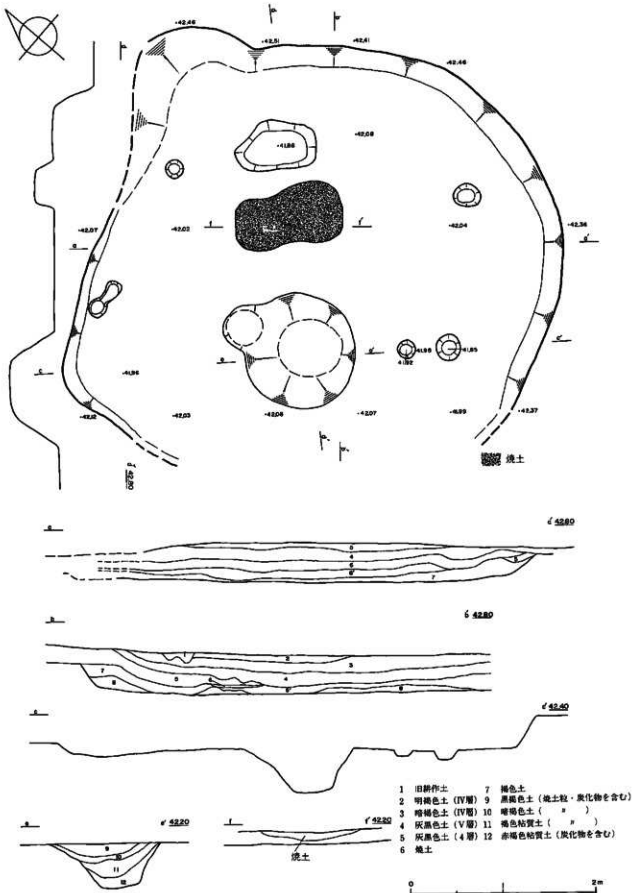
排区番号	分類	層位	特 色
III-51-1	I c	積土	口20.3×底(13.1)×高(28) 口唇・内面調整。口縁無文。地文L R斜行縄文。
2	II		口10×底5×高13.6 口縁無文。内外面炭化物付着。地文R L斜行縄文。
3	"	IV層	口9×底5.7×10.4 2コの貫通孔。口縁無文。地文R L斜行縄文。
4	I b	I層	口縁部。突起口縁貼付文。地文L R斜行縄文。
5	"	IV層	"。山形突起の直下に張り出しをもつ。土文L R斜行縄文。
6	"	"	"。口唇に斜位の筋目。地文L無筋の縄文。
7	"	"	"。口縁に炭化物付着。地文R L斜行縄文。
8	"	"	"。肥厚帯・頸部無文。内面研漉。地文R L縄文。
9	"	"	"。肥厚帯断面凹凸。地文L R斜行縄文。
10	"	V層	"。口唇に筋目。突起直下に3列の四形刺突文。
III-53-11	I c	I層	"。2列の短刺文。
12	II	IV層	"。2条の縄文。無文。
13	"	"	"。頸部、貼付文無文。地文R L斜行縄文。
14	"	"	"。突起に貼付文。無文。
15	I b	V層	底部。
16	II	IV層	"。地文L R縄文。



図III-54 KH-9b出土石器

KH-9b 掲載遺物一覧

番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ (cm)	重量(g)	材質	番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ (cm)	重量(g)	材質
1	石	鏃	IA6	G	3.1×1.3×0.5	1.5	Sh.	8	スクリュー	III C	C	W	4.5×4.5×1.0	18.8	Sh.
2	"	IA5	"	"	(3.4)×1.7×0.5	(2.4)	"	9	"	III C S	"	V	6.9×4.8×1.7	45.0	"
3	"	IA8	D	2	4.5×1.9×0.7	4.0	Obs.	10	ツバ付ナイフ	III A 1 a	D	2	6.8×4.5×0.6	15.0	"
4	石	鏃	II B	G	3.0×2.3×1.0	5.1	Sh.	11	"	III A 2 a	C	W	6.4×3.4×0.8	15.0	"
5	石	鏃	II B 2	"	4.0×2.8×1.0	10.5	"	12	ナリ石	VA 1 a	E	"	14.2×9.4×2.6	477.0	Sa.
6	"	"	"	H	5.7×2.8×1.0	17.0	"	13	"	VA 2	"	"	17.0×7.0×1.5	232.5	And.
7	"	"	"	G	(6.9)×4.3×1.8	(44.0)	"	14	石	III B	"	"	(36.4)×39.0×11.0	17.1	kg



図III-55 KH-10

KH-10

位置 L-29, L-30 調査区中央平坦部 KH-7と重複。

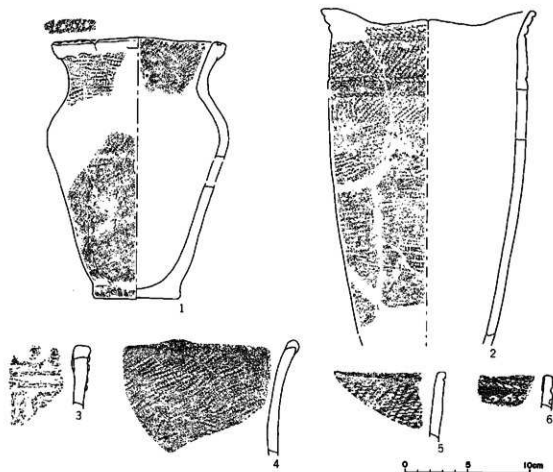
形態 南東側では半円形をなし、北西側は方形に近いプランである。径約5m。南西側はM-30の遺物包含層(IV層・V層)と同様の覆土が堆積しており、壁を確認することができなかった。壁の立ち上りは、南東側は比較的整っているが、このほかでは凹凸が多い。北西隅の壁はKH-7の覆土掘り下げの後に、VII層上でわずかの立ち上りが確認されたものである。

床面は、ほぼ平坦。東側と中央西寄りにピットが検出された。いずれも床面を精査中に確認されたもので、本住居跡の覆土を切って掘られたものではない。従って、これらのピットは、本住居跡内の施設あるいは、これよりも古く、上部を本住居跡構築時に削られたもののいずれかと考えられる。しかし、これを決定する資料を得ることはできなかった。

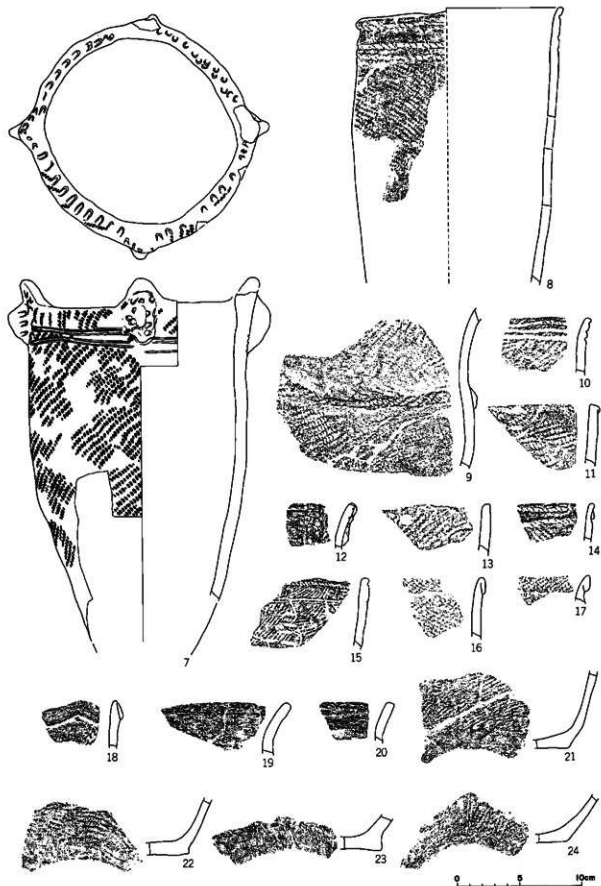
柱穴 柱穴状のピットが南半部に3個検出された。

炉跡 中央北よりに焼土(地床炉)がある。厚さ約8cmで内部に炭化物をわずかに含んでいた。遺物の出土状態 床面及び覆土最下層からは、I群b類の土器が出土。覆土中からも多数の土器片、剥片が出土した。

時期 床面出土の土器がI群b類に相当することから、縄文時代中期中葉に構築された住居跡と考えられる。



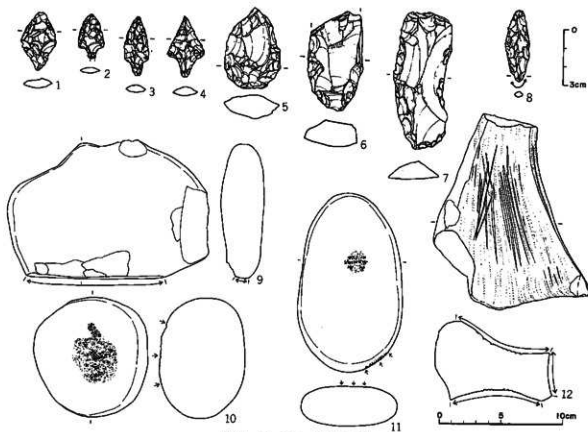
図III-56 KH-10出土土器



图III-57 KH-10出土土器

KH-10 携載土器一覽

標記番号	分類	層位	特 色
III-56-1	Ic	覆土	口13.9×底6.8×高20.9 口唇 円形刺突文。口縁内面縄文。地文L.R縄文。
2	II	#	口17×高(27) 口縁部外反。縄文の周磨消。M30IV層の土器片と接合。地文L.R縄文。
3	Ib	IV層	口縁部。突起の頂部が3分する。
4	#	覆土	#。小突起をもつ。内面横位の調整痕。地文R.L縄文。
5	#	#	#。口唇・内面研磨。地文L.R.L複層縄文。
6	Ic	IV層	#。縄文・刺突文をもつ。
III-57-7	Ib	床	口21×底8.6×高29.4 口の突起。口唇・突起に半葉竹管による刺突文。胴部に2条の沈線。地文L.R.L複層縄文。
8	II	覆土	口16.3×高21.6 口縁部無文。地文L.R斜行縄文。
9	Ic	6層	胴部。貼付帯の上縁無文。地文L.R斜行縄文。
10	#	覆土	口縁部。3条の縄文。口唇研磨。地文L.R斜行縄文。
11	#	P-2 埋土	#。口唇直下に縄文。
12	#	IV層	#。貼付帯上に半葉竹管による刺突文。
13	#	覆土	#。補修孔が1コ。地文はL無筋縄文。
14	II	IV層	#。縄文間無文。口唇・内面研磨。地文R.L斜行縄文。
15	#	#	#。口唇直下縄文。沈線 横走・蛇行。
16	#	4層	#。口唇・内面研磨。地文R.L縄文。
17	#	IV層	#。内面研磨。地文はR.L縄文。
18	#	覆土	#。貼付帯。胴部無文。地文R.L縄文。
19	#	#	#。外反。粘土砂粒多い。無文。
20	#	IV層	#。四角断面四角。内外面研磨。無文。
21	Ib	覆土	底部。
22	#	IV層	#。やや張り出す。地文L.R縄文。
23	#	6層	#。張り出す。やや上げ底。
24	II	6層	#。地文L.R縄文



図III-58 KH-10出土土器

KH-10 掲載石器一覧

番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ (cm)	重さ (g)	材質	番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ (cm)	重さ (g)	材質
1	石 鏃	IA5	B	4	3.1×1.9×0.8	3.2	Sr.	7	スグレイバー	III C1 b	—	—	7.3×2.7×1.1	22.0	Sh.
2	"	IA6	—	6'	(2.4)×1.4×0.3	(0.9)	"	8	石 鏃	II A	C	—	3.8×1.3×0.8	3.4	"
3	"	"	C	—	3.2×1.3×0.5	1.5	"	9	十字石	VA1 b	P-1	—	16.0×11.0×2.3	850.0	Disc.
4	"	"	C	IV	3.2×2.0×0.6	2.5	"	10	たたき石	VB2	A	—	14.3×8.4×2.1	650.0	Anal.
5	スグレイバー	III C4	C	—	4.3×3.0×1.3	14.5	"	11	"	"	B	4	9.4×8.1×5.8	850.0	"
6	"	III C1 b	—	—	(5.3)×2.9×1.4	(26.0)	"	12	砥 石	III	—	6	15.0×10.5×5.4	850.0	Sa.

KH-11

位置 K-31・32, L-31・32 調査区南斜面。

形態 ほぼ円形、西側が床より一段高い張り出し部がある。径約 4.2 m。深さは、北西部斜面上位で約 1 m、下位では約 0.2 m。

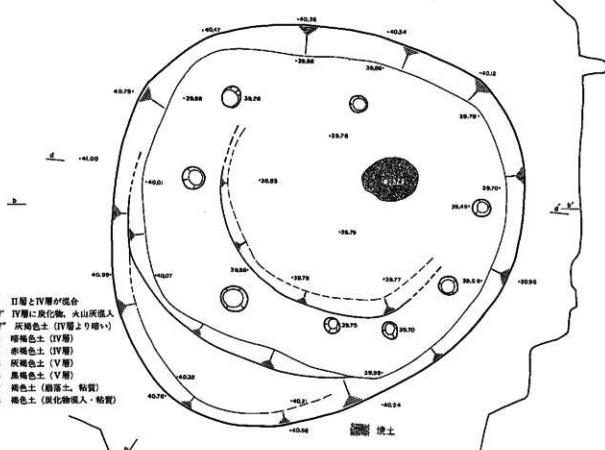
床面は、南西側が中央より 10 cm ほど高く、弧状の段になっている。急斜面につくられていることから、北西半部では礎層 (VIII層) に達している。

柱穴 壁の内側に 8 個の柱穴がめぐっている。径約 10 cm~25 cm。深さは 5 cm~20 cm。このうち西側の 4 個は中央部より一段高い部分にある。

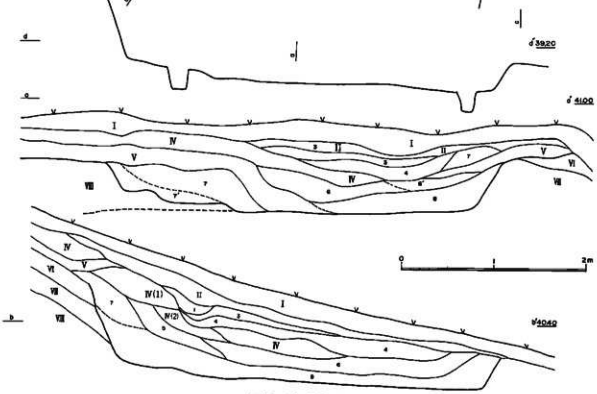
炉跡 中央南東寄りに焼土 (地床炉) がある。焼土の厚さは約 6 cm。

遺物の出土状態 床面の中央部から北西壁付近にかけて、多数の土器片が出土した。このうち 10 個体の器形が復原された。おもに I 群 b 類に相当するものである。また、炉跡の南東壁ぎわにこぶし大の扁平な礫が 6 個並んだ状態で出土した。覆土中にも多数の遺物が含まれていたが、これらは斜面上部から流れこんだものと考えられる。

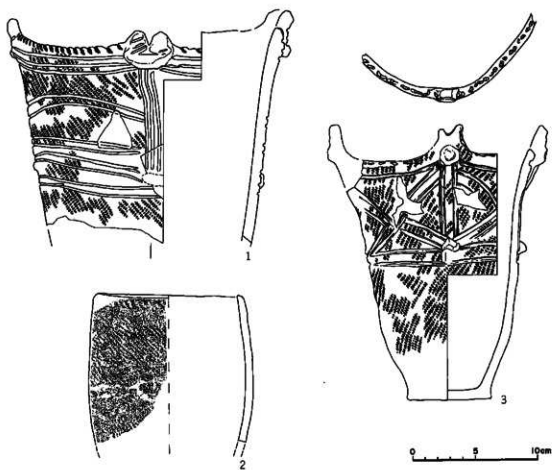
時期 床上出土の土器から判断すると、縄文時代中期前葉から中葉に構築された住居跡と考えられる。



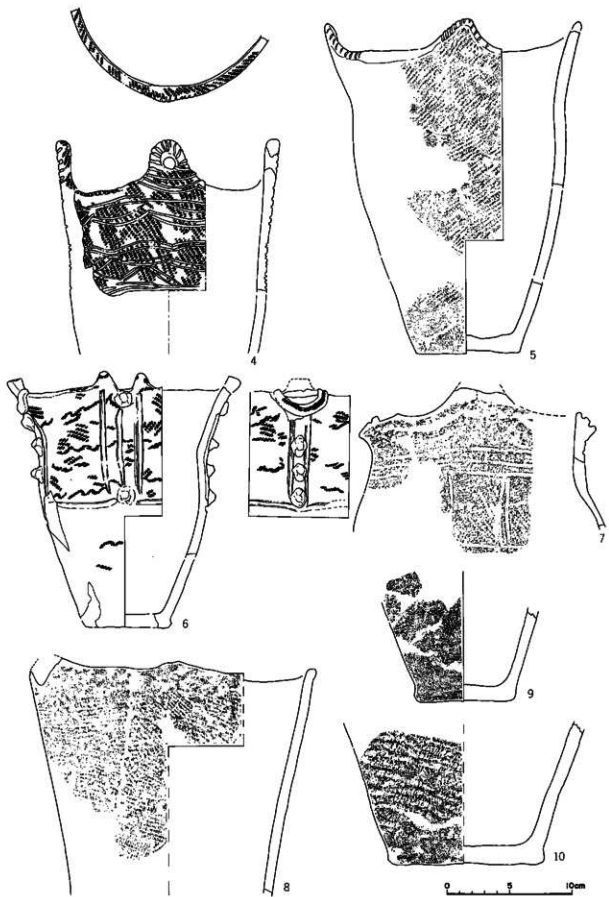
- 1 II層とIV層が混合
- IV IV層に炭化物、火山灰混入
- IV' 灰褐色土 (IV層より暗い)
- 3 暗褐色土 (IV層)
- 4 赤褐色土 (IV層)
- 5 灰褐色土 (V層)
- 6 黒褐色土 (V層)
- 7 褐色土 (崩落土・粘質)
- 8 褐色土 (炭化物混入・粘質)



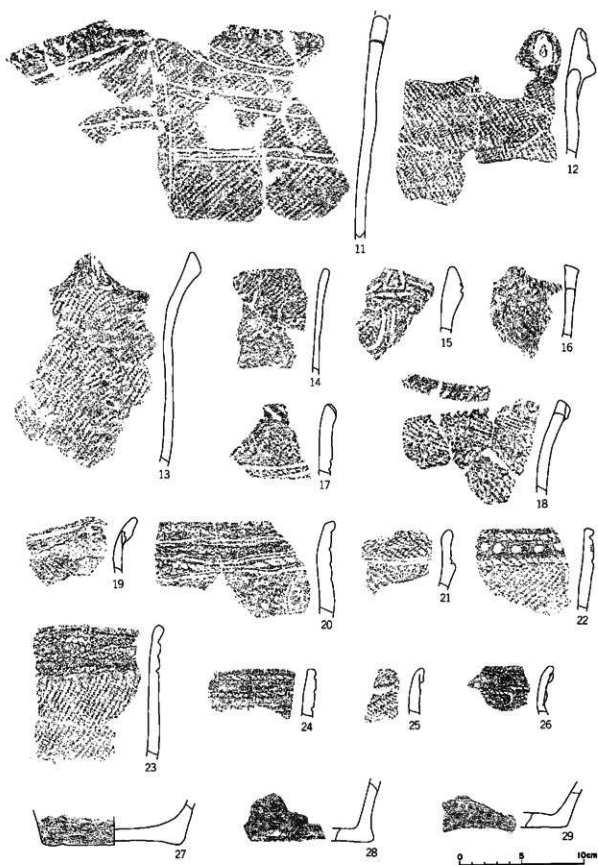
図III-59 KH-11



圖III-60 KH-11出土土器



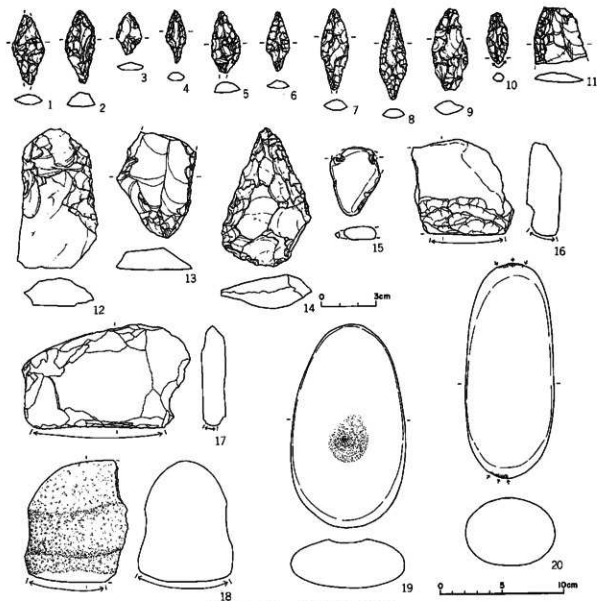
图III-61 KH-11出土土器



图III-62 KH-11出土土器

KH-11 埴輪土器一覧

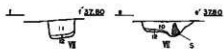
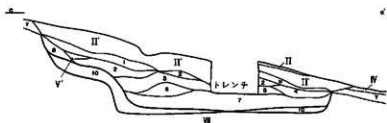
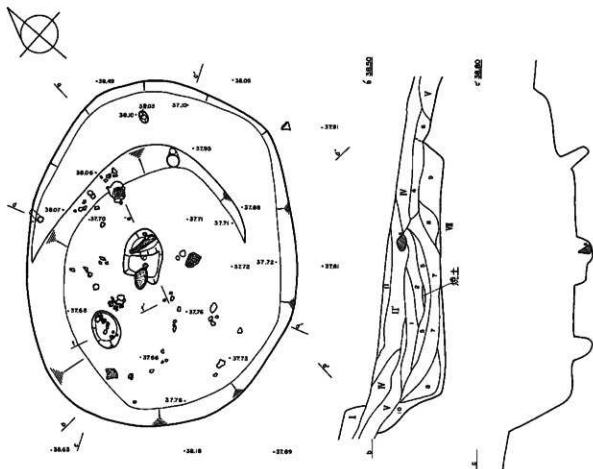
埴輪番号	分類	層位	特 色
Ⅲ-60-1	I a	床	□22.3×高(18.5) 頂部が二分する突起。口唇縄文原体による刻目。地文R L斜行縄文。
2	"	8層	□12×高(12.4) 口唇 縄文原体による刻目。地文R L斜行縄文。
3	"	"	□12.6×底6.7×高21.9 突起下部、胴部に張帯。口唇棒状工具による斜突文。地文L R斜行縄文。
Ⅲ-61-4	I a	8層	□17.4×高(17) 突起に貫通孔。口唇に地文。地文R L斜行縄文。
5	"	"	□19.5×底8.4×高26.7 口唇縄文原体による刻目。地文L R斜行縄文。
6	"	Ⅳ層	□17.3×底6.7×高20.5 突起直下に垂下する沈線。地文結束帯2種斜行縄文。
7	I b	覆土	□19×高(11.5) 口唇深い沈線。突起渦巻文。M30・32・33の土器片と接合。
8	"	Ⅴ層	□22.6×高(18.6) 口縁部無文。
9	"	8層	底部。胎土小石含む。
10	"	"	"。地文L R縄文。
Ⅲ-62-11	I a	"	口縁部。口唇 縄文原体による刻目。地文L R斜行縄文。
12	I b	"	"。突起に円状の沈線。地文R L斜行縄文。
13	"	"	"。口唇へラ状工具による刻目。地文L R斜行縄文。
14	"	"	"。地文L R斜行縄文。
15	"	覆土	"
16	I a	Ⅳ層	"。口唇 縄文原体による刻目。地文R L縄文。
17	I b	覆土	"。口唇 斜位の刻目。
18	"	"	"。口唇 縄文原体による刻目。外面炭化物付着。
19	"	Ⅳ層	"。肥厚帯無文。挿穿孔1コ。
20	"	"	"。口唇調整。口縁に3条の縄線文と沈線。
21	I c	Ⅴ層	"。肥厚帯直上に沈線。
22	"	"	"。縄線文間に円形斜突文。口縁無文。地文L R斜行縄文。
23	Ⅱ	覆土	"。口唇・内面磨擦。地文L R斜行縄文。
24	"	I層	"。3条の縄線文。
25	"	Ⅳ層	"。貼付帯無文。地文R L斜行縄文。
26	"	"	"。2コの張帯。
27	I b	"	底部。
28	I a	"	"。
29	Ⅱ	覆土	"。



図III-63 KH-11出土石器・石製品

KH-11 掲載石器一覽

番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ (cm)	重さ (g)	石質	番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ (cm)	重さ (g)	石質
1	石 鏃	IA 5	A	—	3.7×1.6×0.6	2.2	Sh.	11	ステレノバト	III C 1 a	—	—	3.0×2.8×0.5	6.2	Sh.
2	石 鏃	A	A	—	3.9×1.6×1.0	4.0	石	12	石	III C 5	—	—	7.5×4.2×1.9	58.0	石
3	石 鏃	IA 6	A	IV-V	2.2×1.4×0.4	0.9	石	13	石	III C	—	—	5.7×4.1×1.7	35.6	石
4	石 鏃	石	B	IV-V	2.8×1.0×0.5	1.1	石	14	籠状石器	III B 2	C	V	7.3×4.5×1.7	50.0	石
5	石 鏃	—	—	—	(3.2)×1.5×0.5	(2.5)	石	15	ナリ石	—	—	—	3.6×(2.6)×0.7	(42)	St.
6	石 鏃	石	B	IV-V	3.1×1.2×0.5	1.2	石	16	ナリ石	VA 2	—	—	(7.5)×7.4×3.4	(264.0)	And.
7	石 鏃	石	A	V	(4.3)×1.4×0.5	(3.1)	石	17	北海道式石鏃	石	B	V	8.2×13.0×2.8	380.0	石
8	石 鏃	石	B	V	4.9×1.4×0.6	3.2	石	18	たたり石	VA 4	A	IV	(9.6)×7.9×7.5	(808.0)	石
9	石鏃またはナイフ	IB 2	C	V	4.3×1.9×1.1	4.5	石	19	石	VB 1	C-D	IV	17.6×7.1×4.1	1,094g	石
10	石 鏃	石	A	—	2.7×1.1×0.6	1.0	石	20	石	VB 2	A	V	16.1×9.1×3.6	980.0	石



- II' 暗赤褐色土
- V' 暗褐色土 (V層の乱れ込み)
- 1 黒褐色土
- 2 黒紫色土 (V層の細かい粒を含む)
- 3 赤褐色土 (焼土)
- 4 暗褐色土
- 5 黒褐色土 (1より明るくしまりがある)
- 6 黄褐色土
- 7 暗褐色土 (粘質)
- 8 明褐色土
- 9 暗褐色土
- 10 明褐色土 (暗褐色の細かい粒を含む)
- 11 暗褐色土
- 12 暗黄褐色土

図III-64 KH-12

KH-12

位置 M-32, M-33, N-33 調査区南斜面。

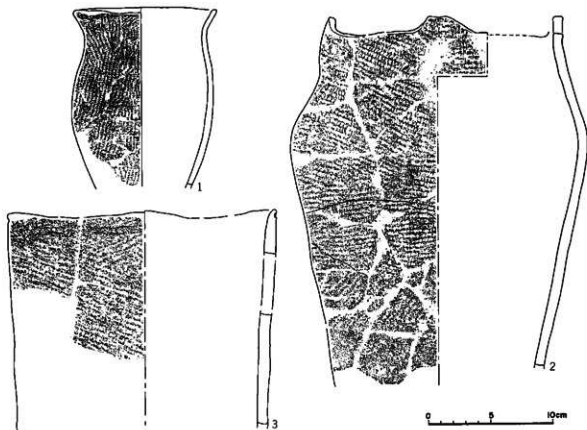
形態 長軸が南-北の楕円形。長径3.6m、短径3m、深さは北側で掘りこみ面から約1.6mである。北半部にベンチ状の段がある。壁は北側では急傾斜で立ち上っているが、南側の斜面下位は不明瞭であった。床面は、ほぼ平坦。中央と西寄りにピットがある。

柱穴 段上の壁ぎわ、段上中央部、床面にそれぞれ1個ずつ柱穴状のピットが検出された。

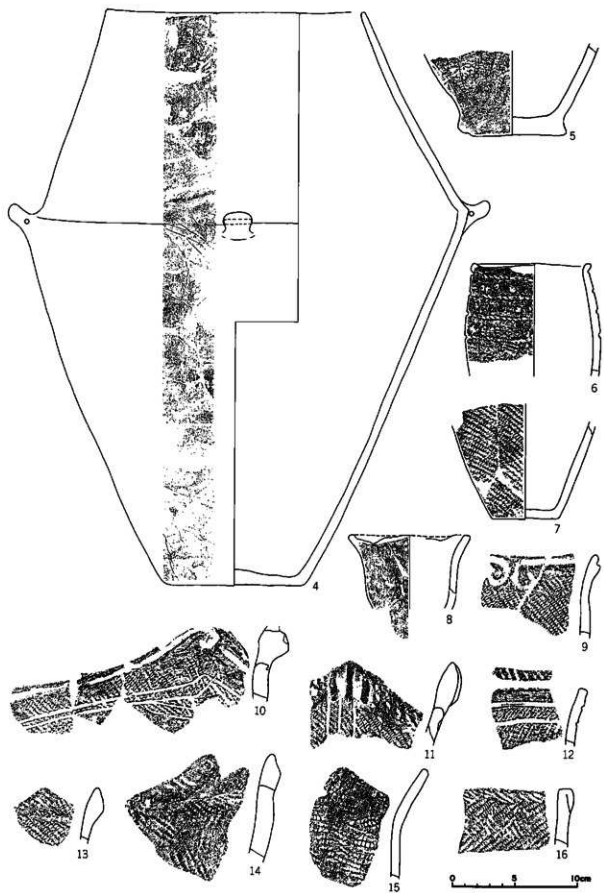
炉跡 床面には炉跡が検出されなかったが、覆土中に炉跡状の焼土が確認された。

遺物 床面からは、剥片が数点出土したのみであるが、覆土中からは、多数の遺物が出土した。中央部に検出された焼土上からは、一箇体の深鉢が破片となって出土した。

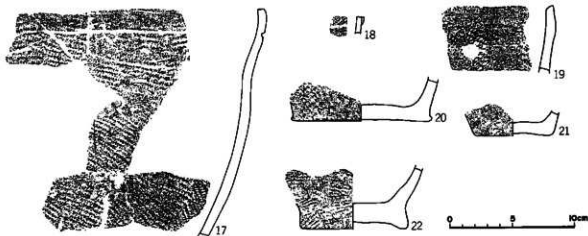
時期 床面の土器がI群C類であることから、縄文時代中期末葉に構築された住居跡とみられる。覆土中の焼土は、この住居が廃棄された後に、くぼみの中で火が使用されたことによるものであろう。



図III-65 KH-12出土土器



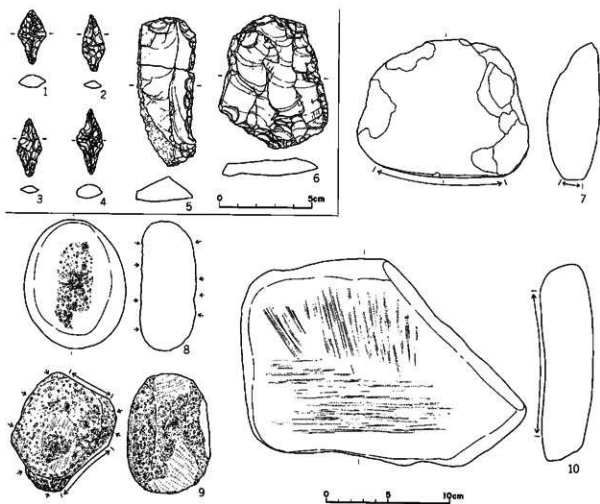
图三-66 KH-12出土土器



図III-67 KH-12出土土器

KH-12 縄紋土器一覽

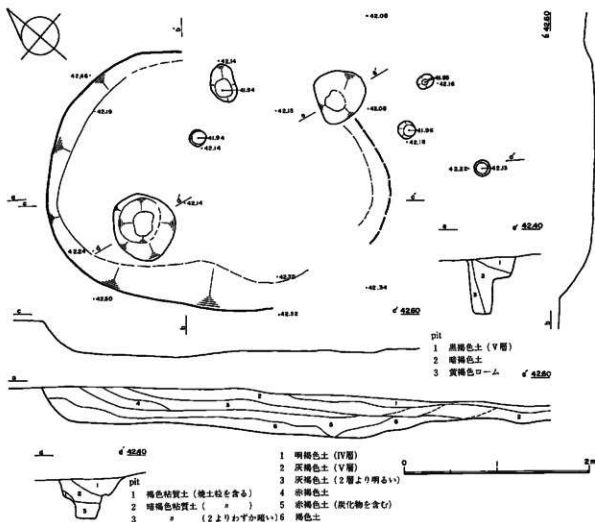
持 込 番 号	分 類	層 位	特 色
III-65-1	I c	3層	□11.5×高(13.8) 口唇内面調整。
	"	1層	□19.5×高(29.7) 口唇断面四角。肩部張出す。口縁磨滑。地文L R縄文。
	"	2層	□21.5×高(18) 1条の縄線文。内面 横位・斜位の調整痕。外面炭化物付着。地文R L斜行縄文。M-32IV層土器片と接合。
III-66-4	I c	2層	□20.6×底11.3×高45.6 広口の壺形土器。肩部に4コの把手。無文。
	I b	3層	底部。地文L R縄文。
	I c	2層	□8.7×高(8.8) 無文帯に縄線文・円形刺突文。
	"	"	底部。地文L R斜行縄文。
	II	覆土	□10×高(6) 内面調整。ゆるやかな波状口縁。無文。L-33IV層の土器片と接合。
	I b	1層	口縁部。口縁加文。地文R L斜行縄文。
	"	2層	"。突起うす巻文。口唇狭い沈線。地文R L斜行縄文。M-33V層・N-33IV層の土器片と接合。
	I b	3層	口縁部。口唇縄文原体による刻目。突起に3本の貼付文。地文R L斜行縄文。
	"	2層	口縁部。口唇に縄文原体による刻目。地文L R斜行縄文。
	"	覆土	"。地文R L斜行縄文。
	"	3層	"。肩部やや張り出す。地文R L縄文。
"	2層	"。外面炭化物付着。	
"	"	"。口唇内面調整。地文L R斜行縄文。	
III-67-17	I c	1層	"。口唇内面調整。口縁無文。
	"	2層	"。口唇断面四角。
	"	IV層	"。口縁無文帯直下 縦位の浅い沈線。補修孔1つ。
	I b	2層	底部。
	I c	1層	"。
	"	1層	"。
	"	3層	"。上げ底。地文L R縄文。



図III-68 KH-12出土石器

KH-12 掲載石器一覧

番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ (cm)	重量(g)	石質	番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ (cm)	重量(g)	石質
1	石 鏃	IA 6	A	3	2.9×1.5×0.7	2.2	Sh.	6	ストレインバー	類C3	A	3	7.0×3.8×1.1	33.0	Sh.
2	#	#	A	2	3.0×1.2×0.4	1.3	Chc.	7	十 字 石	VA 1 b	A	-	11.0×13.8×3.5	903.0	And.
3	#	#	B	1	3.1×1.3×0.6	1.0	Sh.	8	たたき石	VB 2	-	1	10.2×8.2×4.8	480.0	#
4	#	#	A	-	3.5×1.4×0.8	2.2	#	9	#	VB	A	3	9.4×8.0×5.4	501.0	Sa.
5	ストレインバー	類C 1 a	D	1	8.0×3.9×1.8	40.0	#	10	石 皿	類B	A	3	22.3×15.6×4.2	2,350g	And.



図III-69 KH-13

KH-13

位置 M-29, M-30 調査区中央平坦部。

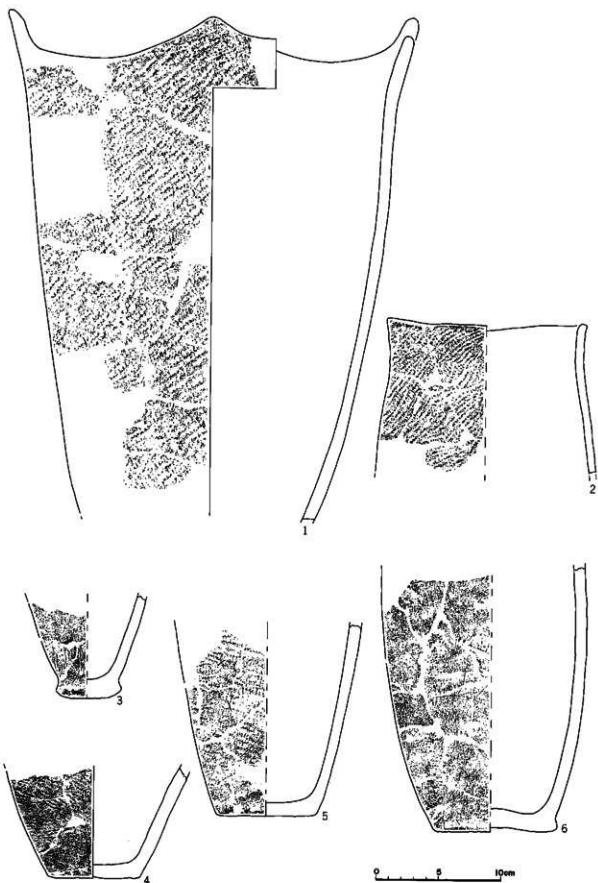
形態 長軸北西-南東方向の楕円形のプランと考えられるが、南東部はグリッドM-31の遺物包含層 (IV層・V層) と類似しており、壁は南東側では立ち上がりがみられなくなる。規模からみて住居跡としたが、不明な点が多い。床面は起伏が多い。西壁ぎわと、東側にピットが1個ずつある。

柱穴 柱穴状のピットが5個検出されたが、規則的な配列を示していない。

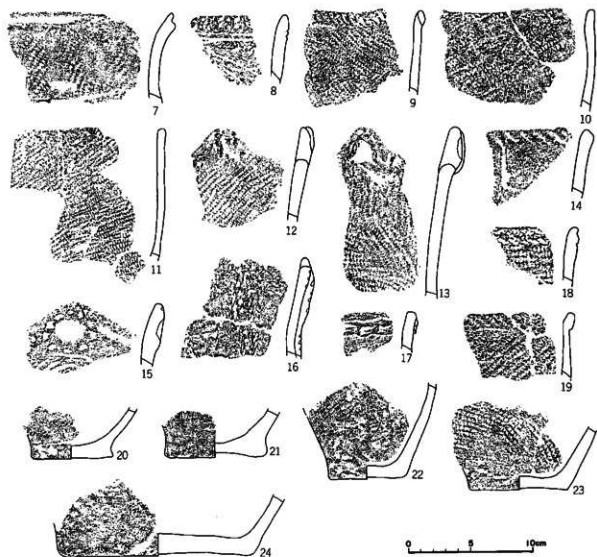
炉跡 検出されなかった。

遺物の出土状態 覆土から床面にかけて多数の遺物が出土した。おもにグリッドM-30に多い。

時期 覆土下層及び床面出土の土器がI群b類に相当することから、縄文時代中期中葉の住居跡状の遺構と考えられる。



圖III-70 KH-13出土土器

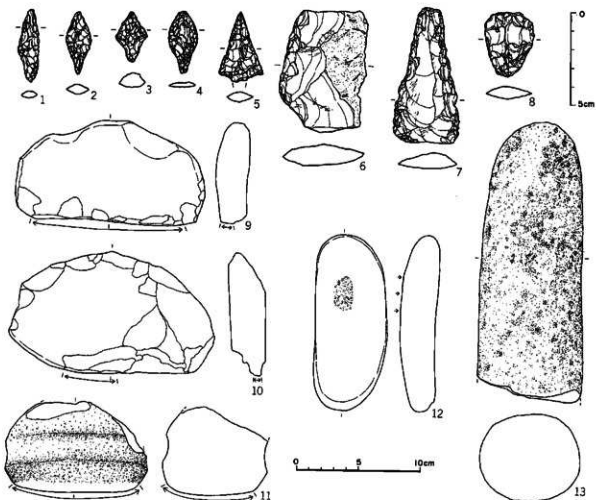


図III-71 KH-13出土土器

KH-13 掲載土器一覧

標 本 番 号	分 類	層 位	特 色
III-65-1	I b	6層	口31×高(40.7) 口唇・内面研磨。地文L.R斜行縄文。
2	"	"	口14.8×高(13.4) 口唇調整。袖縁孔1対。地文L.R斜行縄文。
3	"	"	底5.2×高(8.6) 底部 張り出す。無文。
4	"	"	底7.5×高(8.6) 色黒灰褐色。粘土砂粒多い。
5	"	V層	底8×高(15.3) 地文L.R縄文。
6	II	IV層	底10.2×高(20.5) 底部やや上り底。無文。
III-71-7	I b	6層	口縁部。口唇に深い沈線。地文R.L縄文。
8	"	"	口唇 縄文原体による割目。
9	"	"	口唇 地文R.L斜行縄文。
10	"	"	口唇調整。外面炭化物付着。
11	"	"	口縁 炭化物厚く付着。地文R.L縄文。
12	"	5層	口唇無文。地文L.R斜行縄文。
13	"	"	突起・口唇に粘付文。地文は頸部が多条。胴部がR.Lの縄文。
14	"	V層	口唇に棒状工具による割目がつく。
15	"	"	突起の下に円形の凹みが施され、そのまわりに刺突がめぐる。
16	I a	"	粘付帯上に棒状工具による刺突がつく。地文は磨消縄文。
17	"	"	粘付帯上に半縦竹管による押引がつく。
18	"	覆土	2条の縄線文。外面に炭化物付着。

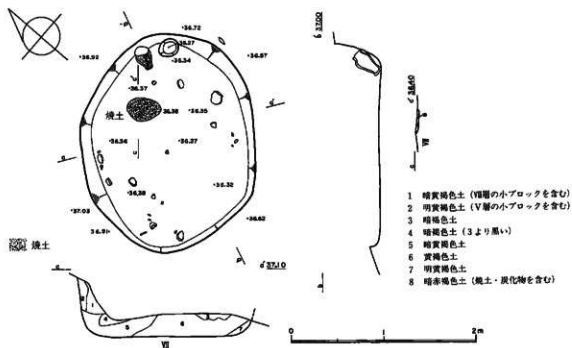
標 本 番 号	分 類	層 位	特 色
19	II	壤土	覆土。内面が擦れて剥落。地文R L斜行縄文。
20	I b	6層	底部。張り出し部無文。地文L R縄文。
21	"	5層	"。上げ底。張り出す。
22	"	V層	"。胎土に小石を含む。
23	"	"	"。
24	"	"	"。胎土に約5mmの小石を含む。



図III-72 KH-13出土石器・石製品

KH-13 掲載石器一覧

標号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ (cm)	重さ(g)	石質	標号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ (cm)	重さ(g)	石質
1	石	II A 5	—	6	3.9×1.1×0.5	9.6	Sh.	8	スクレイパー	III C 4	D	III C 4	3.5×2.6×0.9	6.4	Sh.
2	"	"	B	V	3.4×1.4×0.6	1.8	"	9	すり石	V A 1 a	—	6	15.2×8.1×1.7	500	And.
3	"	II A 6	"	"	2.7×1.7×0.8	2.7	"	10	すり石	V A 1 b	—	6	16.2×9.2×2.1	630	"
4	"	"	"	"	3.3×1.5×0.5	2	"	11	北條道式石砦	V A 4	—	5	7.4×11.4×6.3	950	"
5	"	"	"	"	(3.8)×2.4×0.7	(3.5)	"	12	たたき石	V B 1	M-30	—	14.1×5.7×3.1	400	Dior.
6	スクレイパー	III C 1 a	D	V	6.5×4.5×1.4	50	"	13	石	—	—	6	(22.7)×8.8×6.5	(1.85kg)	And.
7	瓦状石器	III B 1	—	6	7.2×3.6×1.0	24	"								



図III-78 KH-14

KH-14

位置 N-33, 34, O-33, 34 調査区南斜面。

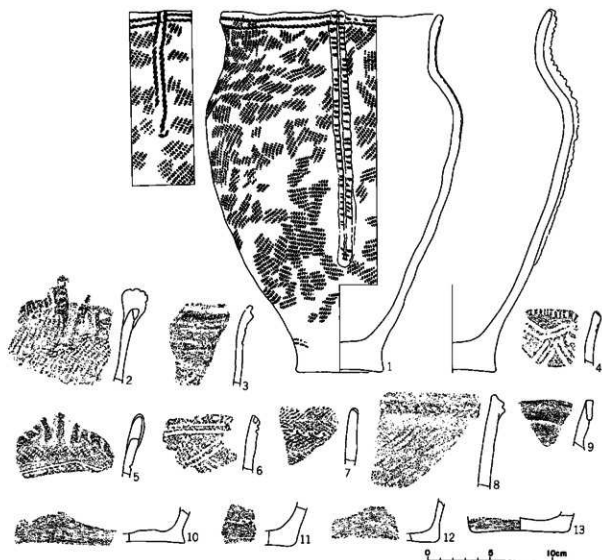
形態 長軸が北東-南西方向の楕円形。長径2.3m, 短径1.3m, 斜面上位では掘りこみ面からの深さが約60cmある。14軒のうち最も小規模である。形態からみて住居跡に分類した。床面はほぼ平坦, 水平である。

柱穴 北東壁ぎわにピットが1個あるが, 柱穴か否かは不明。

炉跡 中央北よりに焼土(地床炉)がある。厚さは約2cm。炭化物が含まれていた。

遺物の出土状態 北西壁に寄りかかった状態で, 完形の深鉢が1個体出土した。また東側の壁から約10cmほど離れて, 石槍が1点出土した。出土層位がKH-14の掘りこみ面と一致すること, 周辺ではこの層に遺物が少なく, また他の遺構とも近接していないことから推定すると, この石槍は, この住居跡の遺物としてとらえられる。

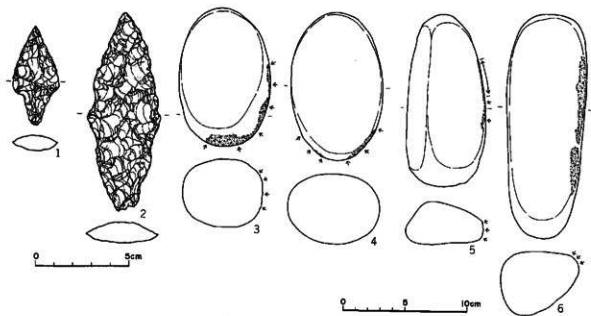
時期 出土した完形土器がI群C類に相当するものであることから, 縄文時代中期末葉の住居跡と推定される。



図III-74 KH-14出土土器

KH-14 掲載土器一覧

挿図番号	分類	層位	特 色
III-74-1	I c	塚	口17.8×底7×高28.7 口唇・内面調整。口縁から胴部にかけて垂下する貼付文と縄線文が交互につく。地文はL R斜行縄文。
2	I	"	口縁部。突起に縄文原体による刻目。口唇 ヘラ状工具による刻目。地文結節斜行縄文。
3	I b	覆土	" 口唇に深い沈線。外面炭化物付着。
4	"	"	" 口唇 ヘラ状工具による刻目。2本単位の沈線。
5	"	"	" 山形突起に3本の貼付文。地文R L斜行縄文。
6	"	"	" 口唇縄文原体による刻目。地文R L斜行縄文。
7	I b	"	" 口唇縄文原体による刻目。地文結束第二種羽状縄文。
8	I c	"	" 貼付帯上縄線文。内面調整。地文R L縄文。
9	II a	"	" 幅広の貼付帯。口唇・内面調整。無文。
10	I a	"	底部。張り出す。
11	I b	"	"
12	"	"	"
13	"	"	"

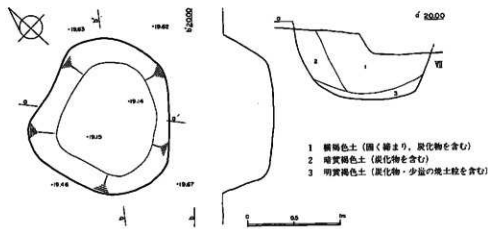


図三-75 KH-14出土石器

KH-14 掲載石器一覧

番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ (cm)	重量(g)	石質	番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ (cm)	重量(g)	石質
1	石槍状の石片	IB 4		礫土	5.2×2.5×1.0	7.9	Sh	4	たたき石	VB 3		礫土	11.8×7.4×5.6	701	And.
2	"	IB 3		"	10.4×3.9×1.4	440	Obs.	5	"	VB 2		"	13.7×6.3×3.4	449	"
3	たたき石	VB 3		"	11.0×7.4×5.5	650	And.	6	"	VB 2		"	17.8×6.4×5.1	850	"

2 土壌

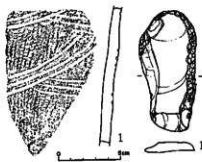


- 1 暗褐色土 (腐く崩まり、炭化物を含む)
- 2 暗黄褐色土 (炭化物を含む)
- 3 明黄褐色土 (炭化物・少量の焼土粒を含む)

図Ⅲ-76 KP-1

KP-1

- 位置 C-7, D-7 調査区北斜面裾部 KH-3と重複。
- 壁の一部が住居跡KH-3に切られている。長軸が北東-南西方向の楕円形。長径1.7m, 短径1.4m。墳底は中央が低く、壁は傾斜している。
 - 墳底からスクレイパー1点, 覆土から土器片1点出土。
 - 重複関係からみてKH-3より古い土壌である。



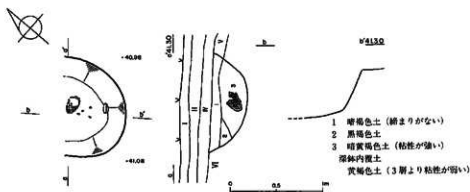
図Ⅲ-77 KP-1出土土器・石器

KP-1 掲載土器一覧

採掘番号	分類	層位	特 色
Ⅲ-77-1	I b	覆土	胴部, 外面炭化物付着, 地文R1編文。

KP-1 掲載石器一覧

番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ (cm)	重量 (g)	材質
1	スクレイパー	ⅢC1b	—	埴	6.4×3.9×0.6	15.0	Sh.

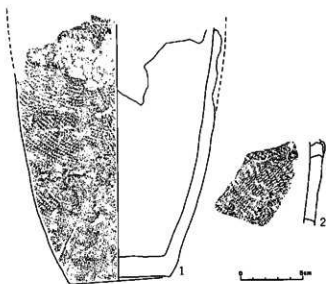


図Ⅲ-78 KP-2

KP-2

位置 N-21, N-22 調査区中央平坦部。

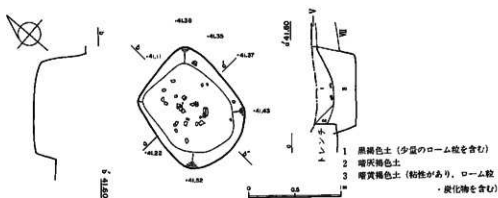
- トレンチ調査の際土層断面で確認された。このため北西半部は検出できなかったが、長軸が北西-南東方向の楕円形と考えられる。径約1m, 断面形は椀状である。
- 覆土下層に口縁部を欠損した深鉢が1個体出土した。覆土下層は埋め戻した層とみられる。
- 深鉢の出土状態, 覆土の状態からみて, 墓塚として掘られた可能性がある。
- 深鉢がI群B類に相当することから, 縄文時代中期中葉の土壌と推定される。



図III-79 KP-2 出土土器

KP-2 掲載土器一覧

神田番号	分類	層位	特 色
III-79-1	I b	覆土	底8.1×高20.7 地文R L斜行縄文。
2	#	#	口縁部、口唇縄文主体による高目。地文R L斜行縄文。

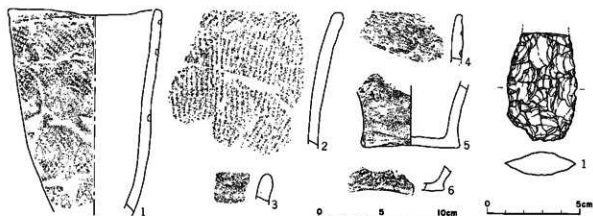


図III-80 KP-5

KP-5

位置 N-22, N-23 調査区中央平坦部。

- トレンチ調査の際に土層断面で検出された。長軸が南-北方向の隅丸方形。長径1.9 m, 短径1.2 m, 深さは掘りこみ面から約0.5 m。墳底は平坦, 壁はやや傾斜している。
- 覆土3層上面に同一個体の土器が破片となって出土した。このほかに覆土3層からは, 土器片数点と石槍1点が出土したが, これらは遺物包含層中にこの土壌が掘りこまれていることから, 古い時期のものが混入したと考えられる。
- 覆土3層は埋め戻した土とみられる。
- 遺物の出土状態, 覆土の状態からみて, 墓墳の可能性がある。
- 覆土2層上面の土器がI群C類に相当することから, 縄文時代中期末葉の土壌と推定される。



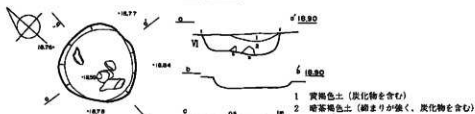
図III-81 KP-5出土土器

KP-5 揚載土器一覽

棟目番号	分類	層位	特 色
Ⅲ-Ⅷ-1	I c	覆土	口12.5×底(6.5)×高16 口縁・胴部に短刺文。外面炭化物付着。胎土に小石含む。地文R.L斜行縄文。
2	I b	#	口縁部。地文L.R縄文。
3	#	#	#
4	I c	#	#。縄文原体による長円状の圧痕。
5	I b	#	底部。張り出す。
6	I c	#	#。

KP-5 揚載石器一覽

番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ(cm)	重量(g)	石質
1	石鏝たばがけ	IB2	---	---	(5.8)×(3.7)×1.2	(30.0)	Obs.

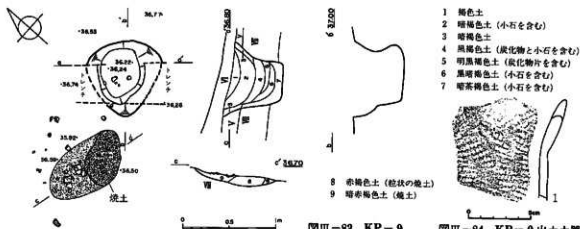


図III-82 KP-8

KP-8

位置 C-6 調査区北斜面裾部。

- 径0.8mのほぼ円形。墳底はほぼ平坦。壁はわずかに傾斜している。
- 上部に焼土KF-1の一部が重複している。
- 墳底より角礫が4個出土した。



図III-83 KP-9

図III-84 KP-9出土土器

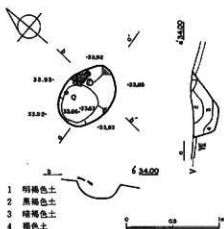
KP-9

位置 L-34, M-34 調査区南斜面。

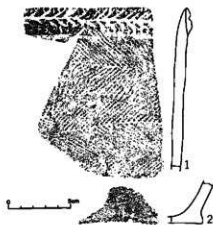
- 長軸が北東-南西方向の楕円形。長径0.8m, 短径0.7m, 深さは掘りこみ面から55cmである。墳底は平坦。壁は下部ではほぼ垂直だが, 上部は広がっている。
- 覆土は自然堆積によって埋没したものとみられるが, 炭化物を多量に含んでいる。これは, 位置関係からみて, 焼土KF-10に関連する炭化物と考えられる。

KP-9 掘削土器一覽

検出番号	分類	層位	特 色
III-84-1	I b	4層	口縁部, 外反。地文LR調文。



図III-85 KP-10



図III-86 KP-10出土土器

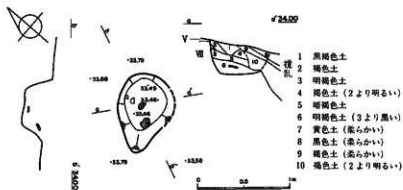
KP-10

位置 N-35, N-36 調査区南斜面。

- 長軸が東-西方向の楕円形。長径0.7m, 短径0.5m, 深さは約0.3mである。墳底のプランはほぼ円形, 壁は西側ではほぼ垂直, 東側は大きく傾斜している。
- 発掘された位置からみて, 北側に検出された小ピット群に関連した遺構の可能性がある。

KP-10 掘削土器一覽

検出番号	分類	層位	特 色
III-86-1	I a	覆土	口縁部, 肥厚部に矢羽根状の刻目。地文結核第一極羽状調文。N-36N層の土器片と接合。
2	#	#	底部, 張り出す。



図III-87 KP-11



図III-88 KP-11出土土器

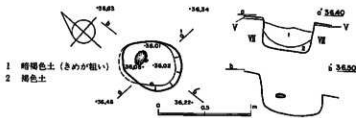
KP-11

位置 N-36 調査区南斜面崖ぎわ。

- 南東側が一部崖面にかけており、崩落したものと考えられる。長軸が北東-南西方向の楕円形。墳底は平坦、壁はわずかに傾斜している。
- 覆土中から土器片が4点出土。覆土断面は自然堆積の状態を示している。
- 検出された位置からみて、KP-10と同様、小ピット群に関連するものの可能性がある。

KP-11 掲載土器一覽

挿図番号	分類	層位	特	色
III-88-1	I b		胴部。地文LR斜行縄文。	
2	H		底部。内面灰化物付着。	



図III-89 KP-11



図III-90 KP-11出土土器

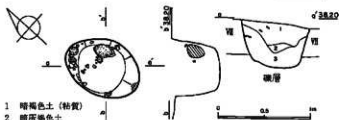
KP-12

位置 M-34 調査区南斜面。

- 長軸が北西-南西方向の楕円形。長径0.7m、短径0.5m、深さは掘りこみ面から約0.5m。墳底は東西方向に傾斜しており、壁はほぼ垂直である。
- 覆土中から土器片と礫が1点ずつ出土。

KP-12 掲載土器一覽

挿図番号	分類	層位	特	色
III-90-1	I b	覆土	口縁部。口唇へうた工具による刻目。	



図III-91 KP-12

- 1 暗褐色土 (粘質)
- 2 暗灰褐色土
- 3 褐色土 (小石を含む)



KP-14

位置 L-33 調査区南斜面。

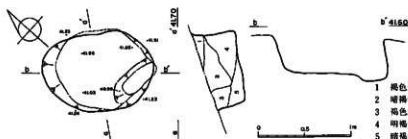
- 長軸が南-北方向の楕円形。長径0.8m、短径0.6m、深さは掘りこみ面から約0.5m。東西の壁はほぼ垂直だが、南北ではやや傾斜している。断面形は椀状。墳底は蓋盤の緑色凝灰岩層まで掘りこまれている。
- 覆土上部から土器片と礫が数点ずつ出土。



図III-92 KP-14出土土器

KP-14 掲載土器一覽

挿図番号	分類	層位	特	色
III-92-1	I a	覆土	胴部。細い粘土線貼付。地文結東第二種羽状縄文。	
2	"	"	"。胎土に約5mmの小石多い。地文結節斜行縄文。	
3	"	"	底部。2と同一個体。	



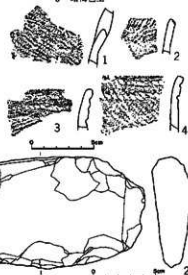
図III-93 KP-15

KP-15

位置 L-31 調査区南斜面 KH-11の西側。

- 長軸が東-西方向の楕円形。長径1.4 m。短径0.8 m。深さは中央部で掘りこみ面から約0.4 m。墳底には凹凸がある。壁は北側と東側の一部でオーバーハングしている。
- 覆土上部から土器片・剝片のほか、半円状打製石器1点と石鏃が1点出土。覆土断面は自然堆積によって埋没した状態を示している。

- 1 褐色土 (IV層下部と同様)
- 2 暗褐色土 (炭化物混入)
- 3 赤色土
- 4 暗褐色土
- 5 暗褐色土



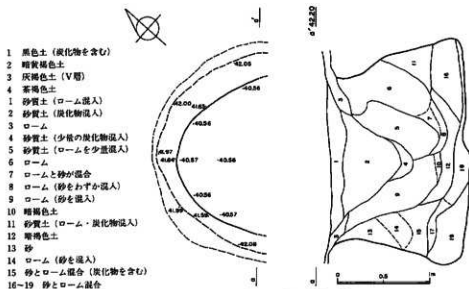
図III-94 KP-15出土土器・石器

KP-15 掩蓋土器一覽

掩蓋番号	分類	層位	特 色
III-94-1	I b	5層	口縁部。地文R L斜行縄文。
2	#	2層	# # #。口唇 縄文原体による圧痕。
3	I c	#	# # #。3条の縄線文。
4	#	#	# # #。口唇・内面調査。

KP-15 掩蓋石器一覽

番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ (cm)	重量 (g)	石質	番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ (cm)	重量 (g)	石質
1	石 鏃	IA5	—	1	2.8×1.4×0.6	2.1	Sh.	2	すり石	VA1b	—	1	16.0×8.7×3.1	550	And.



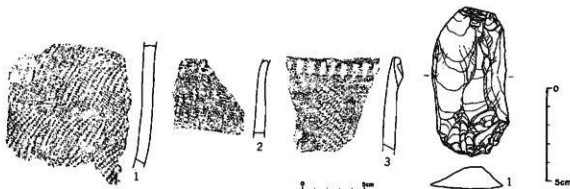
- 1 褐色土 (炭化物を含む)
- 2 暗褐色土
- 3 灰褐色土 (V層)
- 4 茶褐色土
- 1 砂質土 (ローム混入)
- 2 砂質土 (炭化物混入)
- 3 ローム
- 4 砂質土 (少量の炭化物混入)
- 5 砂質土 (ロームを少量混入)
- 6 ローム
- 7 ロームと砂が混合
- 8 ローム (砂をおわず混入)
- 9 ローム (砂を混入)
- 10 暗褐色土
- 11 砂質土 (ローム・炭化物混入)
- 12 暗褐色土
- 13 砂
- 14 ローム (砂を混入)
- 15 砂とローム混合 (炭化物を含む)
- 16-19 砂とローム混合

図III-95 KP-16

KP-16

位置 N-24 調査区中央平坦部 KH-6 の西側。

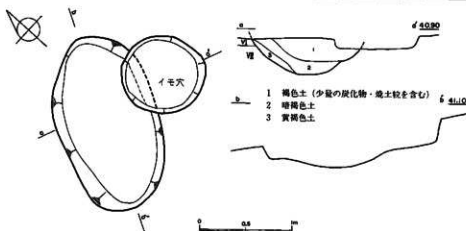
- 径約 2.6 m の円形のプランと考えられる。南東半部は壁・墳底が地山と判別できなかったため、形態を明らかにすることができなかった。断面形は下部が広がるフラスコ状である。
- 覆土上層から土器片数点とスクレイパー 1 点が出土。覆土断面をみると崩落土が壁ぎわ及び墳底に堆積しており、上部には基本層序のIV層・V層が入っている。



図三-96 KP-16出土土器・石器

KP-16 掲載土器一覧

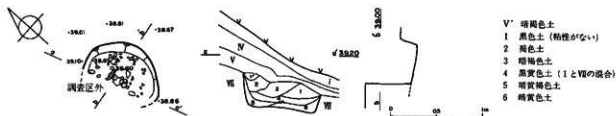
採図番号	分類	層位	特 色
III-96-1	I b	覆土	胴部。外面炭化物付着。地文L R斜行縄文。
2	#	#	口縁部。突起部欠損。外面炭化物付着。
3	I c	#	#。肥厚部短削文。地文を縦位に残し磨消。地文L R斜行縄文。



KP-17

位置 N-22 調査区中央平坦部。

- 壁の一部が畑に掘られた穴で切られている。長軸が南-北方向の楕円形。長径 1.9 m, 短径 1.1 m。墳底は中央部でやや低く、壁の立ち上りはゆるやかである。断面形は皿状である。
- 覆土断面は自然堆積の状態を示している。

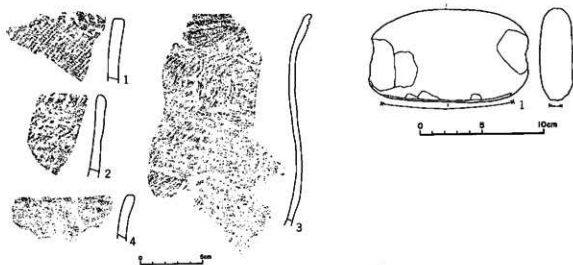


図三-98 KP-18

KP-18

位置 N-33 調査区南斜面 KH-12の西約3m。

- 西半部は調査外へ続いている。径約0.8mの円形と考えられる。深さは約0.3m。墳底は平坦でほぼ水平、壁はほぼ垂直である。
- 覆土中から土器片10数点のほか、擦石1点が出土。覆土断面は斜面上部から流れこんで埋没した状態を示している。



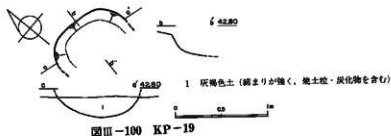
図III-99 KP-18出土土器・石器

KP-18 掲載土器一覽

押 田 番 号	分 類	層 位	特 色
III-99-1	I a	3層	口縁部。口唇 縄文原体による刻目。地文結束第二種斜行縄文。
2	I b	5層	" 口唇 縄文原体による刻目。地文軸節斜行縄文。
3	I c	3層	" 2条の縄線文。胴部膨らむ。地文LR縄文。
4	II a	1層	" 無文。

KP-18 掲載石器一覽

番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ (cm)	重さ(g)	材質
1	すり石	VA1b	—	—	12.7×7.8×2.8	450.0	Dioe.

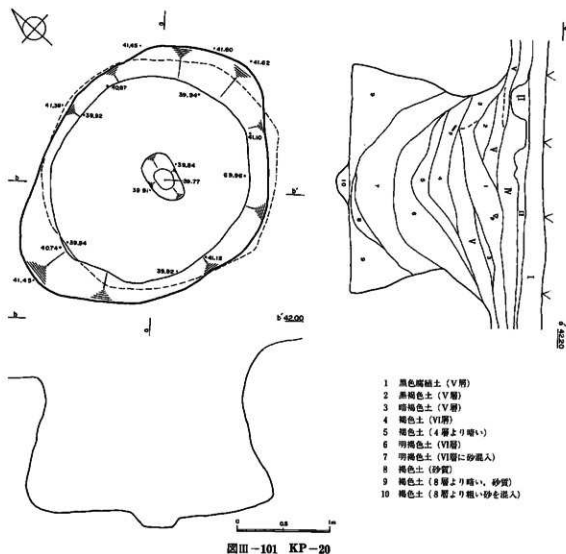


図III-100 KP-19

KP-19

位置 L-27, M-27 調査区中央平坦部。

- 北半部がKH-8aを切ってつくられている。当初土墳と判断されなかったため、重複部分の形態を明らかにすることはできなかった。
- 長軸が北東-南西方向の隅丸方形の土壇と考えられる。長径0.9m、深さ0.2m。断面形は皿状である。
- 重複関係からみて、KH-8aより新しい土壇である。

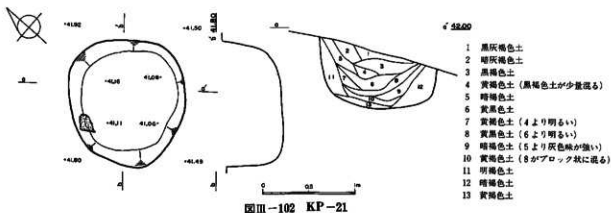


- 1 黒色腐植土 (V層)
- 2 赤褐色土 (V層)
- 3 暗褐色土 (V層)
- 4 褐色土 (VI層)
- 5 褐色土 (4層より暗い)
- 6 明褐色土 (VI層)
- 7 明褐色土 (VI層に砂混入)
- 8 褐色土 (砂質)
- 9 褐色土 (8層より暗い、砂質)
- 10 褐色土 (8層より暗い砂を混入)

KP-20

位置 M-23・24, N-23・24 調査区中央平坦部。

- 長軸が東-西方向の楕円形。長径3.2m, 短径2.4m, 深さは掘りこみ面から約1.8m。壊底のプランは、ほぼ円形。KP-16と同様に断面形がフラスコ状をなしている。壊底中央部に浅いピットがある。
- 覆土断面をみると、壁ぎわから壊底にかけて崩落土が堆積しており、中央上部には基本層序のIV層・V層が外部から流れこんだ状態で入っている。
- 形状・土層断面がKP-16に類似していることから、これと同様の目的で掘りこまれた土壌と考えられる。

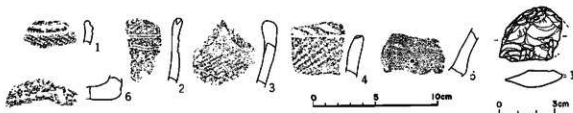


図III-102 KP-21

KP-21

位置 L-31, M-31 調査区南斜面上部。

- 径約1.3mのほぼ円形。深さは掘りこみ面から約0.7m。断面形は椀状をなしている。
- 覆土中から土器片が38点出土。石器ではスクレイパーが1点出土した。
- 覆土断面をみると壁ぎわに崩落土があり、その内側は斜面上位から流れこんだ土によって埋没した状態を示している。



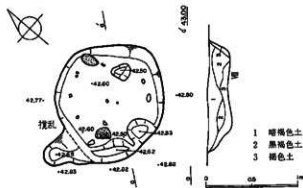
図III-103 KP-21出土土器・石器

KP-21 掲載土器一覧

挿入番号	分類	層位	特 色
III-103-1	1b	覆土	口縁部。地文L.R斜行縄文。
2	#	#	#。口唇に斜突文。地文L.R縄文。
3	#	#	#。突起内溝。口唇縄文原形による刻目。地文殆東第2種羽状縄文。
4	#	#	#。口唇 斜位の刻目。地文L.R斜行縄文。
5	#	#	底部。
6	#	#	#。

KP-21 掲載石器一覧

挿入番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ (cm)	重さ(g)	石質
1	スクレイパー	III C4	—	—	4.9×3.6×2.5	13.6	Sh

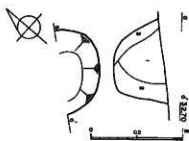


図III-104 KP-22

KP-22

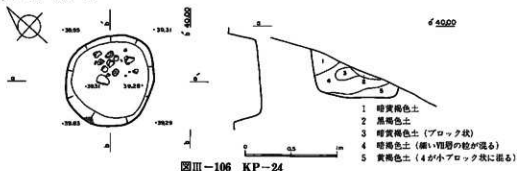
位置 M-28 調査区中央平坦部。

- 径約1.2mの不整形円形。西側に張り出した部分がある。深さは掘りこみ面から約25cm。墳底には凹凸がある。壁は傾斜している。
- 覆土から、礫3点が出土。



- 1 暗褐色土 (炭化物を含む)
- 2 黄褐色土
- 3 暗黄褐色土

図III-105 KP-23

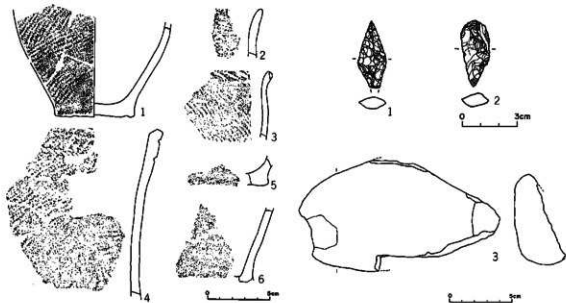


図III-106 KP-24

KP-24

位置 M-32 調査区南斜面 KH-12の北西2m。

- 径約0.9mの円形。深さは北西側で掘りこみ面から0.5m。墳底はほぼ平坦、水平で、壁はわずかに傾斜している。
- 覆土中からは土器片41点のほか、石鏃・ドリル・擦石が出土。覆土断面は斜面上位から流れこんだ土で埋没した状態を示している。



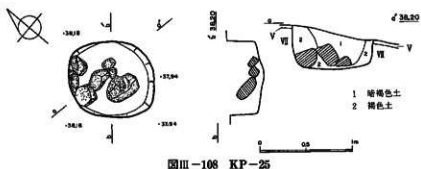
図III-107 KP-24出土土器・石器

KP-24 掲載石器一覧

番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ (cm)	長さ (cm)	重量 (g)	材質	番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ (cm)	長さ (cm)	重量 (g)	材質
1	石	鏃	ⅠA6	—	3.6×1.5×0.7	—	2.9	Sh.	3	すり石	ⅠA1b	—	5	15.6×(8.8)×5.6	—	202.3	And.
2	石	鏃	ⅡB	—	3.5×1.5×0.8	—	4.2	*									

KP-24 掲載土器一覽

調査番号	分類	層位	特 色
III-107-1	I b	覆土	底6.5×高(9) 地文L R斜行縄文。
2	#	#	口縁部。内面炭化物厚く付着。地文結節斜行縄文。
3	#	#	#。口唇へう状工具による刻目。地文R L斜行縄文。
4	I c	#	#。口唇・内面研磨。2条の縄線文。地文L R斜行縄文。
5	I b	#	底部。
6	#	#	#。

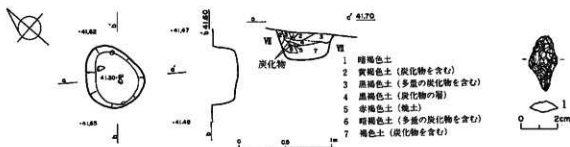


図III-108 KP-25

KP-25

位置 M-33 調査区南斜面 KH-12の東壁より約0.3 m東側。

- 長軸が北西-南東方向の楕円形。長径0.9 m、短径0.8 m、深さは掘りこみ面から約0.4 m。横底中央がわずかにくぼみ、壁はほぼ垂直である。
- 横底から角礫7点が出土。覆土中から土器片80点が出土した。出土状態からみて、角礫は周囲から流れこんだものとは考えられない。



図III-109 KP-26

図III-110 KP-26 出土石器

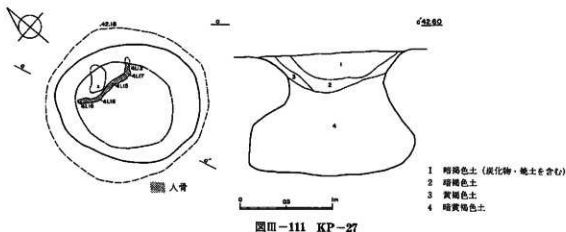
KP-26

位置 M-31 調査区南斜面。

- 炭化物堆積層の直下で確認された。長軸が南-北方向の卵形。長径0.7 m、短径0.6 m、深さは掘りこみ面から約0.3 m。横底はほぼ平坦、壁はわずかに傾斜している。
- 覆土中には多量の焼土・炭化物が含まれており、これに混じて土器片8点と石礫1点が出た。
- 上部の炭化物層が堆積する直前に掘りこまれた土壌と推定される。

KP-26 掲載石器一覽

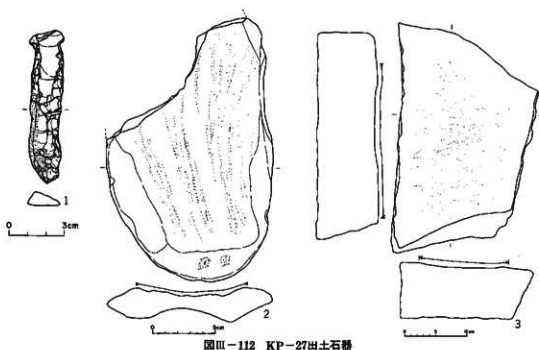
番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ (cm)	重さ (g)	材質
1	石	礫	I A 6	—	3.0×1.5×0.6	2.2	Sh.



KP-27

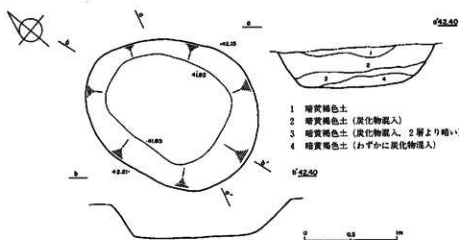
位置 M-24・25, N-24・25 調査区中央平坦部 KH-6と重複。

- 南東部をKH-6によって切られている。円形、径は開口で約1.8m、墳底で約1.9m。深さは約1.2mである。断面形は下部が大きく広がるフラスコ状をなしている。
- 墳底に人骨の一部と考えられる糊状の物質が検出された。これと並んで擦石が1点、つまみ付ナイフが1点出土。
- 覆土断面をみると上部には基本層序のIV層・V層が周囲から流れこんだ状態が入っているが、この下は墳底まで単一の層であった。
- 上記の事実を総合して判断すると、この土壌は住居跡KH-6の構築以前に、墓として掘りこまれたものと考えられる。



KP-27 掲載石器一覧

番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ (cm)	重量 (g)	材質	番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ (cm)	重量 (g)	材質
1	つまみ付ナイフ	削C1a	—	塚	8.2×1.7×0.7	11.0	Sh	3	石	削b	—	塚	37.2×22.1×10.0	12.3kg	And.
2	砥石	研	—	—	(20.9)×13.2×2.4	650	Sh								

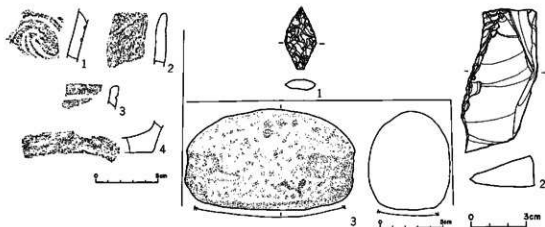


図III-113 KP-28

KP-28

位置 M-24 調査区中央平坦部。

- 長軸が南-北方向の楕円形。長径1.9m、短径1.6m。深さは中央部で約0.4m。皿状の形態をもつ土壌である。
- 覆土には多量の炭化物が含まれており、土器片98点のほか、スクレイパー・石鏝・石冠が出土した。
- 出土土器がI群C類及びII群に相当することから、縄文時代中期末葉から後期初頭の土壌と考えられる。



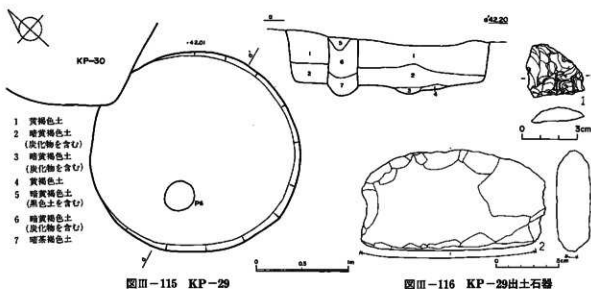
図III-114 KP-28出土土器・石器

KP-28 掲載土器一覧

神田番号	分類	層位	特 色
田-113-1	I b	覆土	胴部。沈澱による渦巻文。
2	I c	"	口縁部。口唇・内面調整。外面炭化物付着。
3	II	"	"
4	"	"	底部。

KP-28 掲載石器一覧

番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ (cm)	重さ (g)	材質	番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ (cm)	重さ (g)	材質
1	石 鏝	IA 5	—	—	3.3×1.7×0.6	2.5	Sh	3	北海道式石冠	VA 5	—	—	13.4×8.0×6.7	1.1kg	And.
2	スクレイパー	田C1 a	—	—	7.8×3.5×1.6	4.5	"								



図III-115 KP-29

図III-116 KP-29出土石器

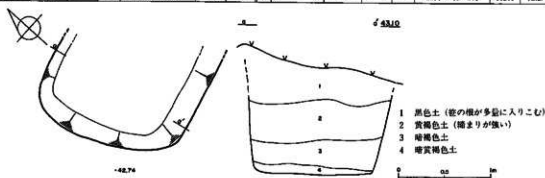
KP-29

位置 K-26・27, L-26・27 調査区中央平坦部 KH-9 a, KP-30と重複。

- KH-9 aの床面北端部で確認された。上部はKH-9 aに削平されており、北壁の一部は、KP-30に切られている。中央西寄りにはKH-9 aの柱穴が覆土を切って墳底より深く掘りこまれている。
- 径約2.2 mの円形。墳底は平坦、壁はほぼ垂直に立ち上っている。
- 覆土から14点の土器片が出土。覆土断面をみると、2枚の層が墳底に平行に堆積している。
- 重複関係からみると、KH-9 a及びKP-30より古い土壌である。

KP-29 掲載石器一覧

番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ (cm)	重さ (g)	石質	番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ (cm)	重さ (g)	石質
1	スクリュー	III C 4	—	—	2.8×2.9×0.7	6.8	Sl.	2	すり石	V A 1 b	—	—	14.6×7.9×2.8	501.0	And.

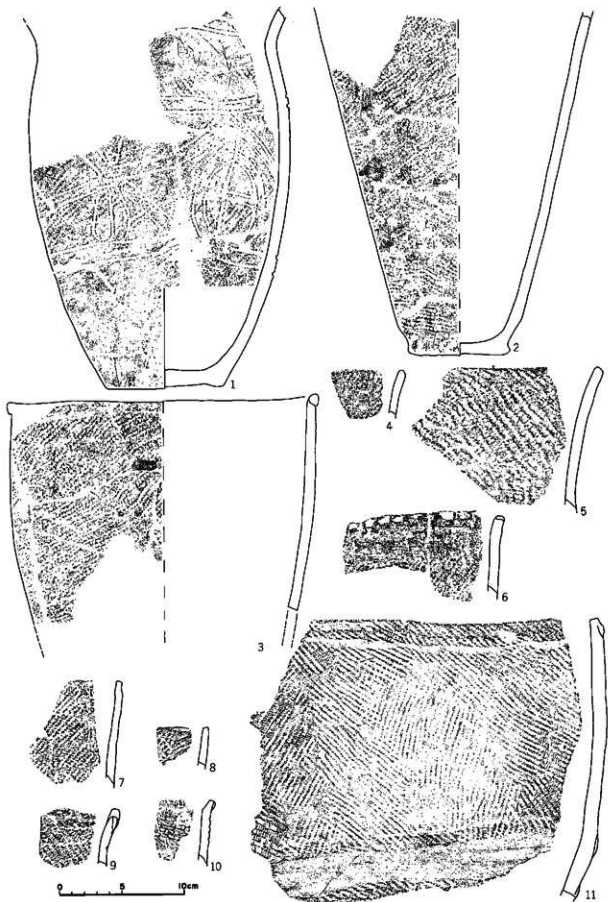


図III-117 KP-30

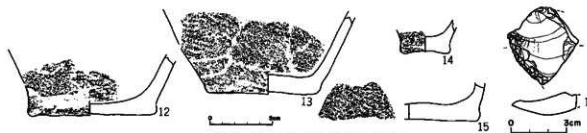
KP-30

位置 K-26 調査区中央平坦部崖ぎわ。

- 崖ぎわにあって東半部の形態を確認することはできなかった。
径約1.6 m。深さは北側で表土から約1.4 mある。墳底はほぼ平坦、壁はわずかに傾斜している。
- 覆土中から200点あまりの土器片がまとめて出土した。覆土断面をみると4枚の層が墳底に平行して堆積している。
- 出土土器がII群に相当することから、縄文時代後期前葉に掘りこまれた土壌と考えられる。



圖III-118 KP-30出土土器



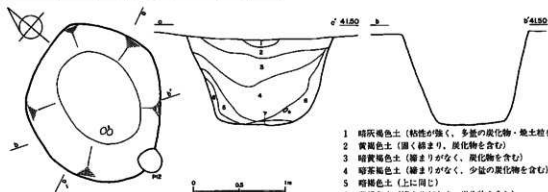
図III-119 KP-30出土土器・石器

KP-30 掲載土器一覧

神田番号	分類	層位	特 色
III-117-1	II	覆土	口(20.2)×底9.5×高(29.6) 胴部・胴下半部無文。地文の上に沈殿。地文R L斜行縄文。
2	"	"	底8.2×高(26) 胎土に小石多く含む。内面炭化物付着。地文L R斜行縄文。
3	"	"	口24.5×高(21.8) 外面炭化物付着。地文L R斜行縄文。
4	I b	"	口縁部。
5	"	"	"。外面炭化物付着。地文R L斜行縄文。
6	II	"	"。波状口縁。頸部無文。地文L R斜行縄文。
7	"	"	"。口唇調整。地文R L縄文。
8	"	"	"。地文L R斜行縄文。
9	"	"	"。口縁無文。2本の縄文。地文R L斜行縄文。
10	"	"	"。口縁内面調整により凹む。
11	"	"	"。口唇断面四角。胴部貼付帯間無文。地文R L斜行縄文。
III-118-12	I b	"	底部。
13	"	"	"。
14	"	"	"。上げ底。
15	"	"	"。

KP-30 掲載石器一覧

番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ (cm)	重量(g)	石質
1	スクレイパー	III C 1 a	—	—	4.2×3.9×1.1	15.2	Sh



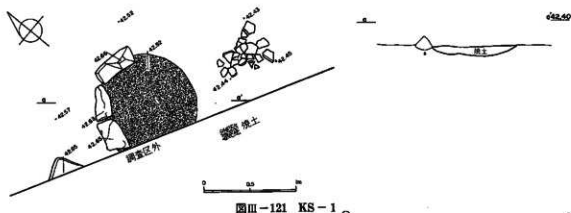
図III-120 KP-31

KP-31

位置 M-25 調査区中央平坦部 KH-6と重複。

- 住居跡KH-6の床面で確認された。覆土上面の一部にKH-6の焼土(地床炉)が重なっており、北壁の一部はKH-6の柱穴によって切られている。墳底は平坦、断面形は碗状である。
- 墳底北西側に円礫が2個並んだ状態で出土した。
- 覆土断面は、自然に埋没した状態を示している。
- 重複関係からみて、住居跡KH-6より古い土壌で、上部を住居構築の際に削平されたものと考えられる。本来の深さは、2mほどあったものと推定される。

3 その他の遺構



図III-121 KS-1

石囲い炉

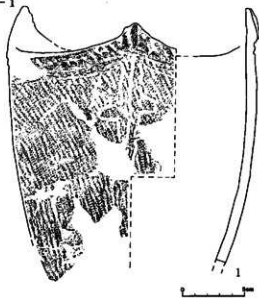
KS-1

位置 M-29, 住居跡KH-13の西側において、基本層VI層上面に検出された。

形態 4個の角礫が使用された石囲い炉。南東側に炉石はみられない。内部の焼土の厚さは約6cm。わずかに炭化物を含んでいる。

性格 住居跡内にみられる石囲い炉と同様の構造である。これの南東約1mの同レベルに、I群b類の土器が一個体つぶれた状態で出土した。位置関係及び層位からみて、石囲い炉とこの土器は関連をもつものと考えられる。この石囲い炉が住居跡内のものであることを想定して周辺の精査を行ったが、壁・柱穴等は検出されなかった。

時期 並んで出土した土器から判断して、縄文時代中期中葉の炉跡と推定される。



図III-122 KS-1出土土器

KS-1 掲載土器一覧

検出番号	分類	層位	特	色
III-121-1	I b	V層	口18.5×高(21) 山形突起に3本の粘付文。口唇 縄文原体による前目。突起直下より垂下する沈線。地文R.L斜行縄文。	

焼土

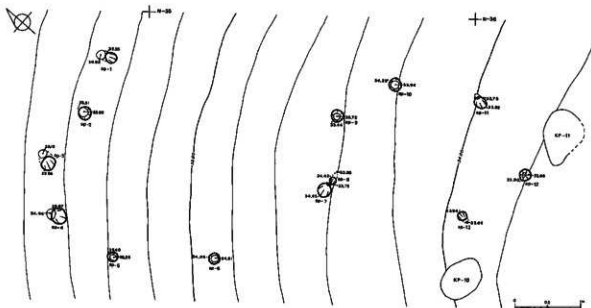
KF-1~

調査区内には計8ヵ所の焼土が検出された。これらは、調査区北端部に4ヵ所、中央平坦部から南斜面に4ヵ所あり、住居跡及び土壙と同様の分布傾向を示している。いずれも住居跡内にみられる地床炉と同様なもので、それぞれの場所で火を使用したものと考えられる。他の遺構と直接関連づけられるものはない。検出された層位はおもにVI層上面である。

小ピット群

位置 N-34, N-35, N-36 調査区南斜面下位。

- 断面観察によると杭状のものを打ちこんだものとみられる。約1mから1.3mの間隔で、S字状に配列されている。掘りこみ面に対する角度をみると、ほぼ垂直あるいは、それぞれ異なる方向に傾いている。埋土中から遺物は出土しなかった。
- 横列あるいは、孤立柱状の構造物の跡とも考えられる。斜面上位と下位では、比高が約2mある。



図III-123 小ピット群

炭化物堆積層

位置 M-31 調査区南斜面上位。

- 東西約 5 m、南北約 4 m の半円形状に広がっている。
- この層の直下には、焼土と K P-26 が検出された。また、この炭化物堆積層中からは、I 群 a 類の深鉢が押しつぶされた状態で出土した。層位の観察によって判断すると、この炭化物堆積層は、北側に隣接する平坦部から、木炭を含む灰が多量に廃棄されたことによって、形成されたものと考えられる。直下に検出された焼土と K P-26 は、この層が堆積する直前のものと推定される。
- 出土遺物からみて、縄文時代中期前葉に形成されたものと考えられる。

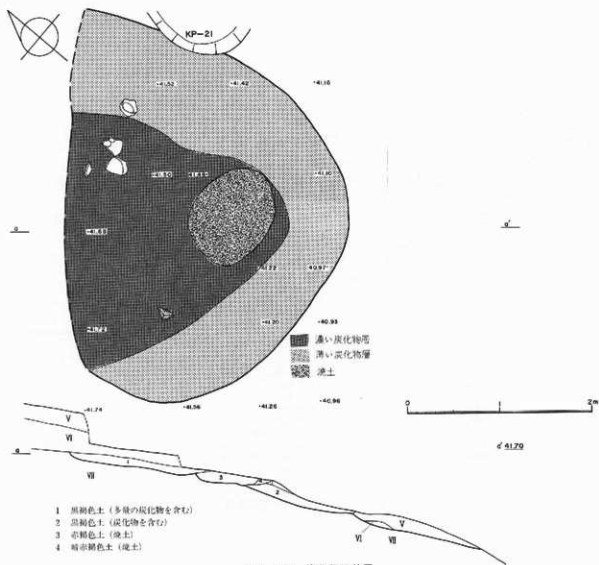
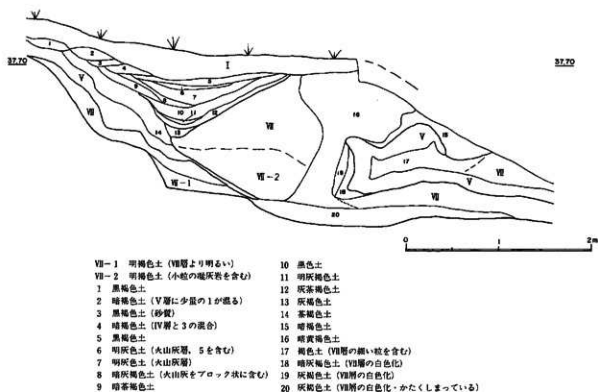


図 III-124 炭化物堆積層

地すべり跡

調査区南斜面のO-34, P-34, S-35の3カ所にみられた。地表からの観察では、斜面の一部がわずかにくぼんでおり、その南側にあたる斜面下位に盛り上った部分がある。土層断面によると、この地形は、斜面の一部の土が下位にわずかずつ移動し、下位の層はこれに押されて、めくられるように反転し、逆転層となったものとみられる。この土層断面図では、基本層序IV層が二ツ折にたたまれるように曲っている様子がわかる。上位のくぼみは、平面形が弧状をなし、内部には黒色腐植土が堆積していた。O-35では、逆転したIV層中からも多数の遺物が出土したことから、この層が堆積した後に、このような地形の変化が起ったことは確かであるが、その時期及びこのような地形が形成されるのに必要な時間を判断する材料はない。しかし、下位の逆転層がみだれていないこと、折れまがった部分が鋭角ではないことなどから、かなりの期間を要したものと考えられる。



図III-125 地すべり跡土層断面

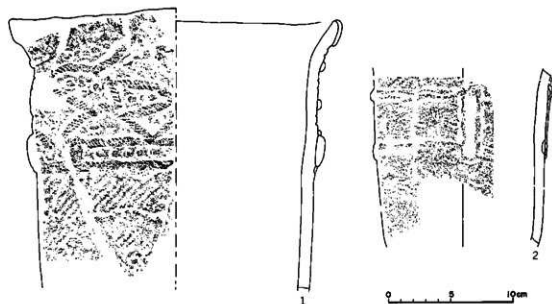
IV 遺構外出土の遺物

今回の調査によって出土した土器片・石器等71000点(剥片を除く)あまりのうち、約70%が遺構外から出土したものである。出土層位はIV層・V層が主体だが、VI層上部にも混入している。これらの遺物包含層は、明瞭に分層されるところもあるが、多くの地点では混じり合っていたり、色調の判別が困難であった。また住居跡・土壌の覆土の上部は、遺構外から連続するIV層・V層である。覆土の下部も、これらの層が様々な割合で混合したものと考えられる。従って、総合的にみると遺構外で出土した遺物は、遺構内のものと同様である。

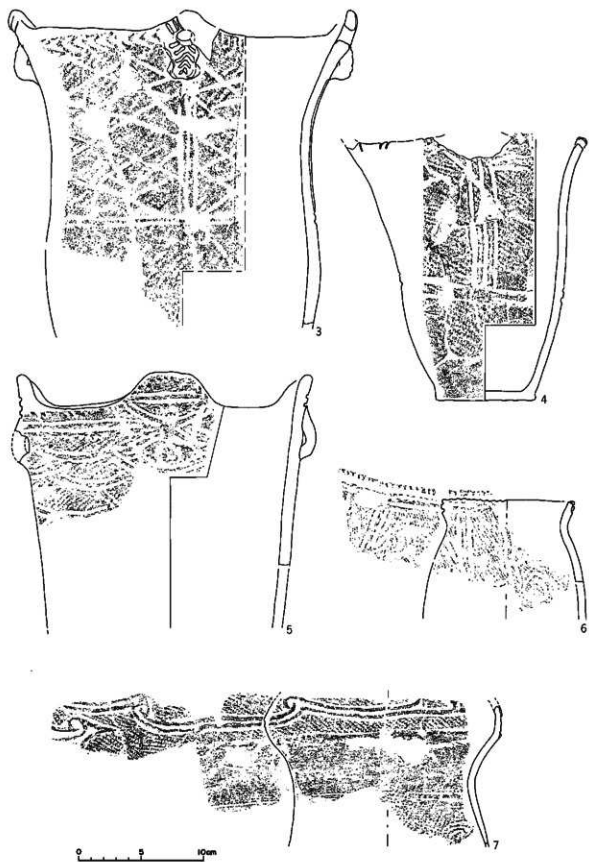
遺物包含層は、調査区北斜面ではその多くが失なわれているが、中央平坦部から南斜面にかけては厚く堆積していた。なかでも中央平坦部南側から、これに続く南斜面中位にかけては、約10cm~20cmの厚さがあり、多量の遺物が出土した。また南斜面の地すべり跡の下位では、IV層が折れ曲って2枚に分かれている部分もあった。南斜面に位置する住居跡KH-11・12の覆土上部からも、多量の遺物が出土したことからみて、これらの遺物の多くは、調査区中央平坦部から、斜面に廃棄されたものと考えられる。

調査区南斜面のうち西側へ屈曲した部分では、遺物包含層が非常にうすい。しかし表土と、VI層にはさまれた状態で、かなりの量の出土遺物があった。

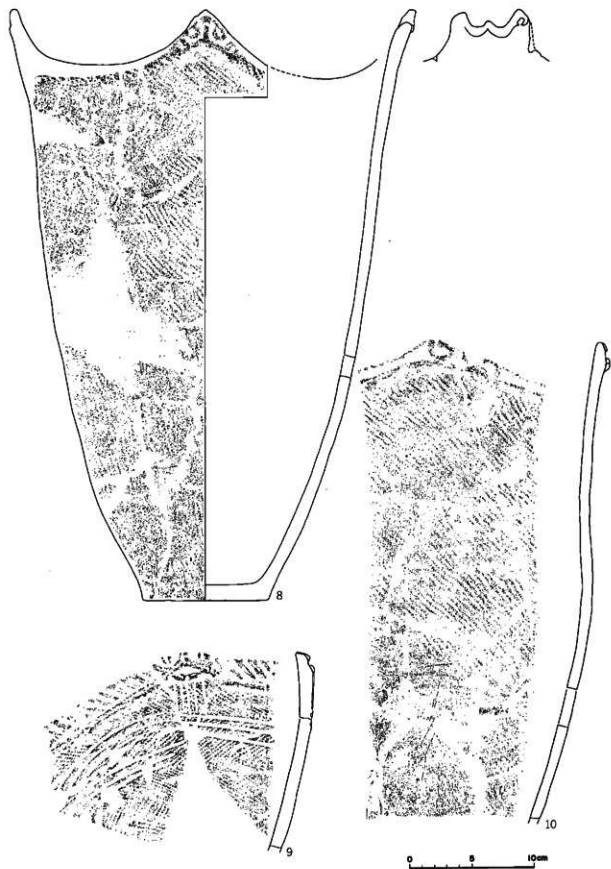
遺構外の出土遺物のうち土器について、出土分布図をIV章-1に示した。これによると土器の各群によって分布傾向に差異がみとめられる。



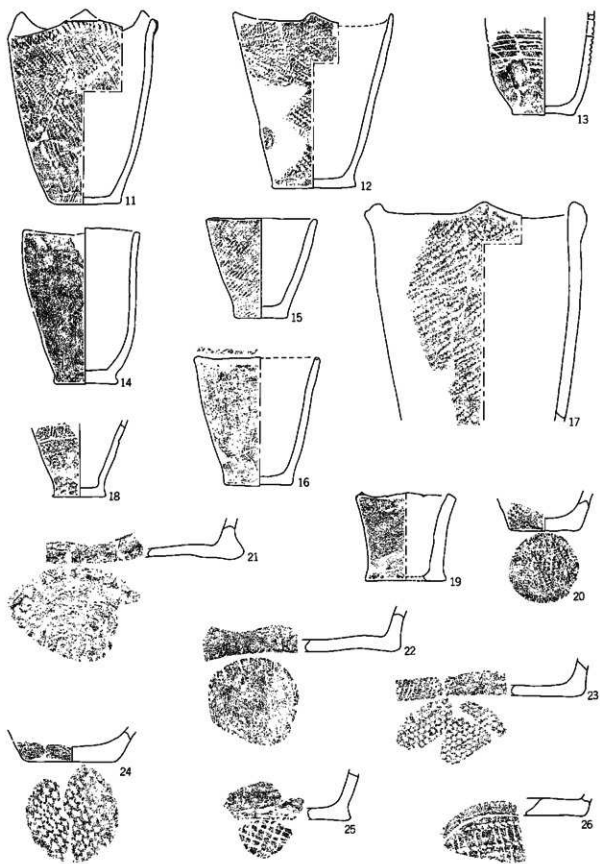
図IV-1 遺構外出土土器 (I群a類)



图IV-2 遼朝外出土器 (I群a類、b類)

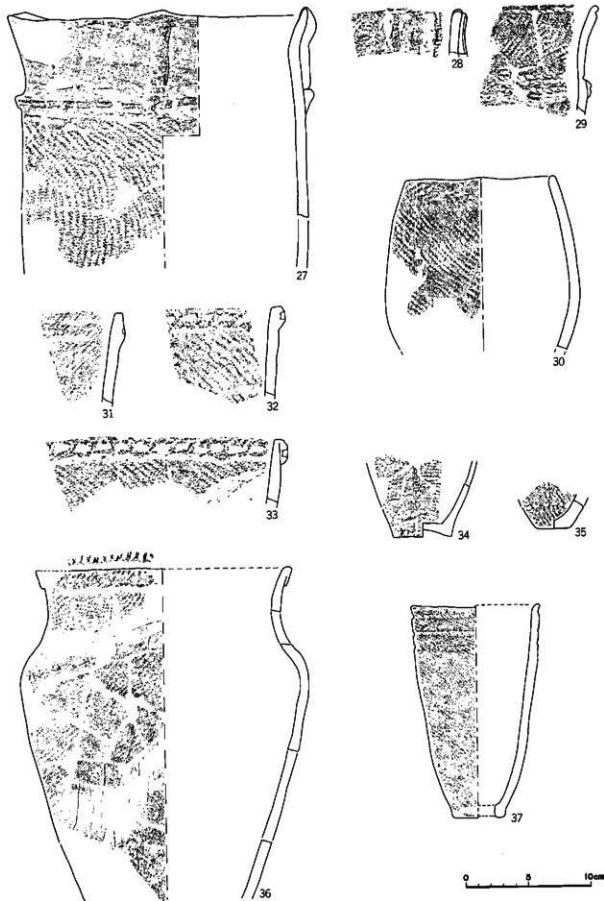


図IV-3 遺構外出土土器 (I群b類)



图IV-4 遼興外出土土器 (I群b類)

0 5 10cm



図IV-5 遺構外出土土器（I群c順）

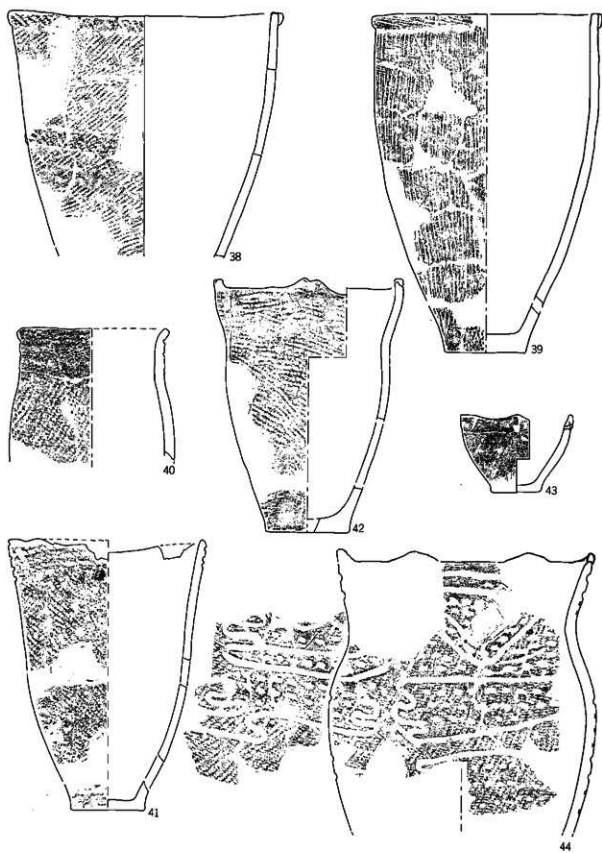
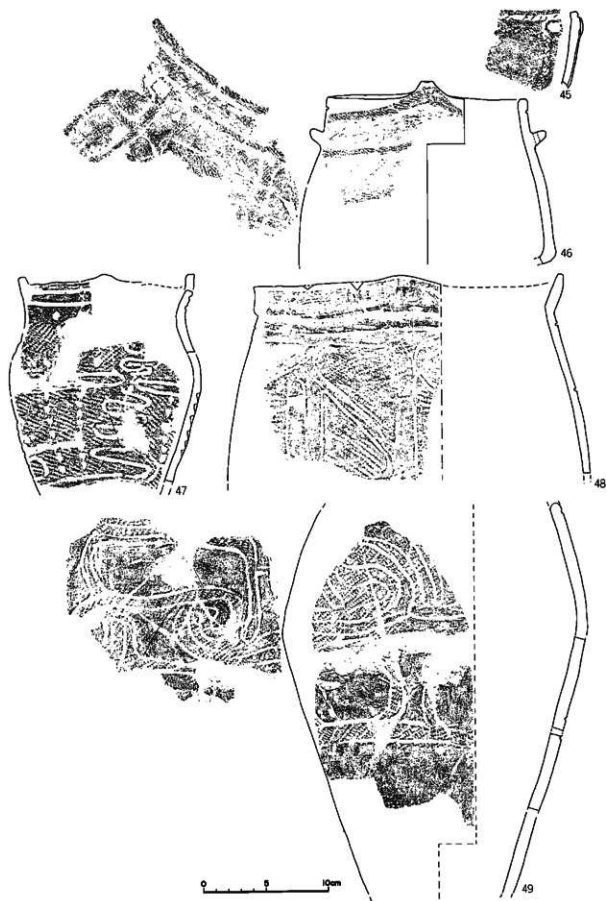


图 IV - 6 遼構外出土土器 (II 群)



図IV-7 遺構外出土土器 (II群)

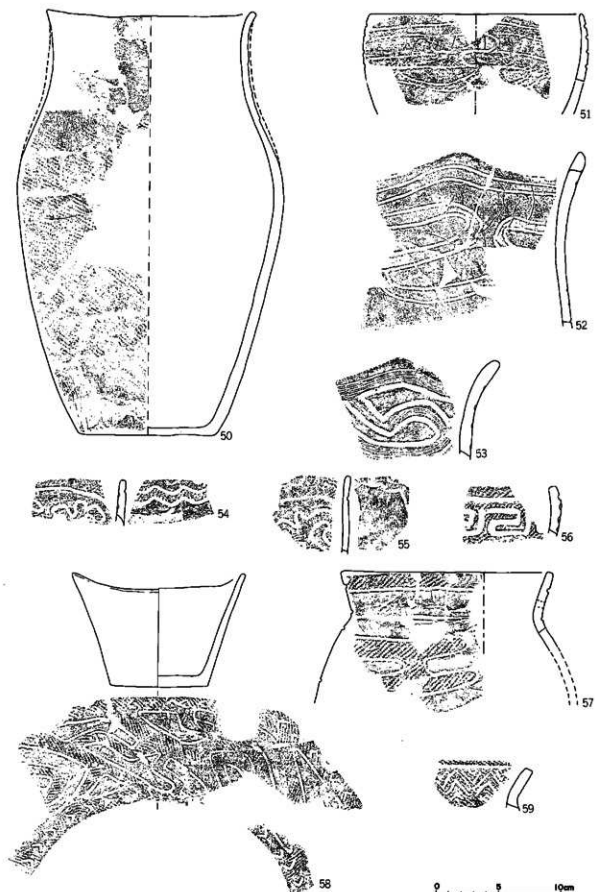


图 IV-8 遼南外出土土器 (II 群)

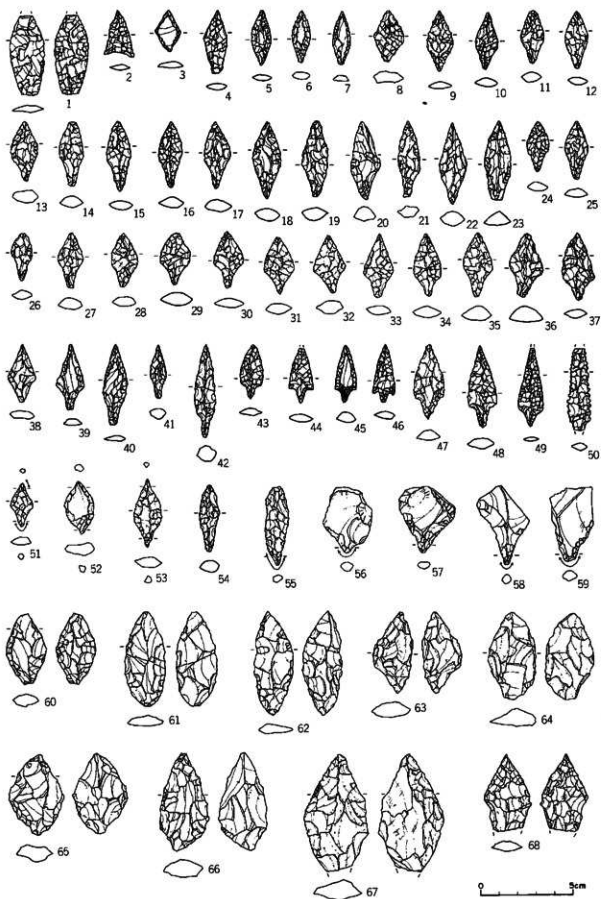


図IV-9 遺構外出土土器（II群・III群）

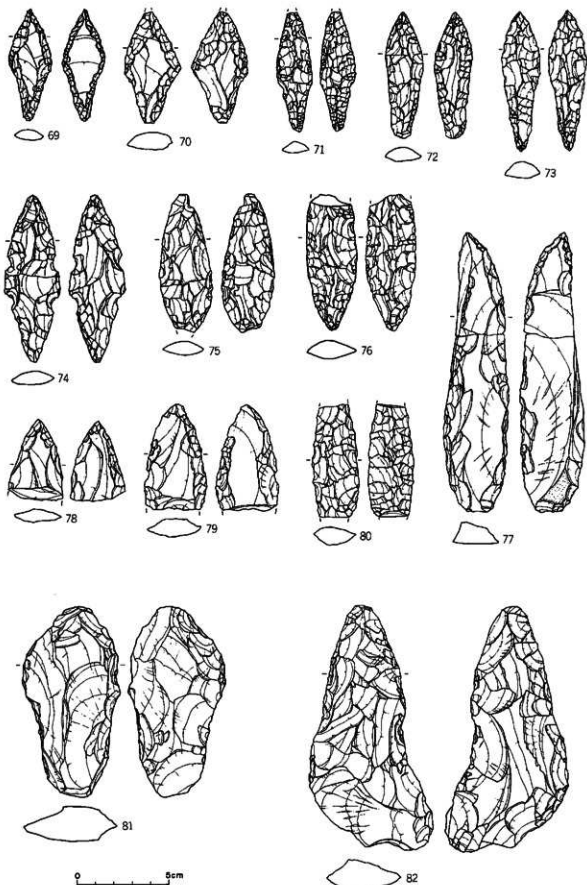
遺構外堀蔵土器一覽

持回番号	発掘区	分類	層位	特 色
V-1-1	S36	I a		口26.5×高(21.5) 口縁に割面状の貼付文。胴部貼付文面に黒線彩を施す。地文結束第一種羽状瓦文。口(14.1)×高(12.2) 地文の上に貼付文。貼付文による縦の区画。地文結束第二種羽状瓦文。
2	K31	"	"	口28×高(26) 口唇の刻目 矢羽根状と縦位のもの。把手の直上に貫通孔。直下には垂下する沈線。地文L R斜行瓦文。
4	K30, 31 L32	I a	V層	口18.7×底8×高20.9 口唇瓦文原形による刻目。地文R L斜行瓦文。
5	K33	"	V層	口23.4×高(20.4) 4つの突起・把手。口唇瓦文原形による刻目。地文結束第二種羽状瓦文。
6	M25 N22	I b	V層	口10.5×高(9.5) 口唇に竹管による刺突文。沈線は墨水文・渦巻文などの組合せ。地文はクシ目状工具による条痕。
7	M33 M34	"	V層	口16.5×高(12.5) キャリバー形。口縁に白線文。胴部無文。地文R L斜行瓦文。
W-3-8	M30	"	"	口31.8×底5.2高47 大型甗鉢。山形突起に円状の貼付文。頂部が三分する突起に流状の貼付文。口唇瓦文原形による刻目。地文R L斜行瓦文。
9	O35	I b	V層	口縁内溝。口唇斜位の刻目。貼付文上縁文の圧痕。地文結束第一種羽状瓦文。
10	L32	"	V層	突起に円状の貼付文。粘土にバミス多く含む。地文R L斜行瓦文。
W-4-11	L-6	"	"	口12×底5.8×高15.5 口縁肥厚帯上に縄文原形による刻目。地文R L斜行瓦文。
12	L33	"	V層	口12.6×底6.7×高14 底部突出す。地文L R斜行瓦文。
13	O36	"	V層	底5×高(8) 数条の横走沈線。胴下半部無文。
14	N34	"	"	口9.4×底5×高12.4 底部突出す。無文。
15	L33	"	"	口8.9×底4.4×高8 平縁。地文L R斜行瓦文。
16	"	"	"	口10.1×底5.6×高10.3 口唇に刻目。無文。
17	M34	"	V層	口17×高(17.3) 突起部 肥厚する。地文L R斜行瓦文。
18	N33	"	"	底4.3×高(6) 突出す。地文L R斜行瓦文。
19	O36	"	V層	底6.5×高7.1 底の中央部に抜けおいている文。無文。
20	L31	"	V層	底部。縄文が付く。地文R L斜行瓦文。
21	M31	"	"	" 。縦痕が渦巻状に付く。
22	N34	"	V層	" 。周囲に縄文が付く。
23	M33	"	V層	" 。網代痕が付く。
24	M32	"	V層	" 。" 。" 。" 。
25	L32	"	"	" 。" 。" 。" 。
26	U34	"	"	" 。" 。" 。" 。
W-5-27	L30 M36	I c	V層	口24.3×高(20.7) 口縁縦の貼付帯で4区画。区画内部無文。肩部縦位の貼付帯。L R 縄文。
28	L32	"	V層	口縁部。貼付帯上に縄文の圧痕。
29	"	"	"	" 。口唇内面研磨。口縁・肩部・貼付帯上に縄文。地文L R斜行瓦文。
30	M33	"	"	口12.1×高(13.6) 口縁内溝。外面炭化物付着。地文L R斜行瓦文。
31	M25	"	V層	口縁部。肥厚部に縄略による短刺文。地文L R斜行瓦文。
32	N25	"	"	" 。貼付帯上に短刺文。外面炭化物付着。
33	M22 N23	"	V層	" 。" 。" 。" 。
34	L29	"	"	底4.8×高(6) 上げ底。胴部に縦位、底部に横位の短刺文。
35	M23	"	V層	底2.7×高(2.5) 横位・縦位の短刺文。地文L R斜行瓦文。
36	M28 M28	"	V層	口20.4×高(26.5) 広口の壺形土器。口唇棒状工具による刻目。地文L R斜行瓦文。
37	L17	"	"	口13.3×底4.2×高17 口縁3条の縄線文。口唇・内面調整。地文L R斜行瓦文。
W-6-58	M34	II	V層	口23×高(19.5) 口縁・胴部に貼付帯。口唇四面削面。貼付帯上にR L斜行瓦文。地文L R斜行瓦文。
39	M33, 34 N33	"	I層	口18.4×底6.5×高27 口唇・内面調整。貼付帯上に斜位の溝。地文縦位の溝。
40	N32	"	V層	口12×高(10.6) 口縁磨擦。3条の縄線文。外面炭化物付着。
41	M33	"	V層	口15.9×底6×高21.5。胎土小砂利多い。地文L R斜行瓦文。
42	"	"	V層	口15.2×底6.8×高20.3 頂部が二分する突起。口唇内面調整。地文L R 縄文。
43	L30	"	V層	口9×底4×高6.1 小突起直下に貫通孔。無文。
44	N-32-33	"	I層	口20.3×高(21.5) 口縁無文。胴部は沈線で区画され内部に円形刺突文。区画内部は磨滑と地文が残るものがある。地文R L斜行瓦文。
W-7-45	L6	II	V層	口縁部。内溝。縄線文と円状の貼付文。無文。
46	M31	"	V層	口16.1×高(14.5) 把手が2つ。沈線で区画。区画内部は無文と地文が残るものがある。地文L R斜行瓦文。
47	M26	II	V層	口13.7×高(17.5) 口縁無文帯に曲線文。胴部。縦位の短刺文・蛇行沈線。地文L R斜行瓦文。
48	L28	"	"	口24.8×高(21.5) 口縁外反・無文。胴部地文の上に沈線地文。地文R L 縄文。
49	"	"	"	口(19.9)×底(11.5)×高(31) 胴部磨む。地文の上に沈線で区画。区画内部無文と地文が残るものがある。胴下半部無文。地文L R斜行瓦文。
W-8-50	L16	II	V層	口16.9×底11×高33.4 口縁・器面の半分割線。口縁・底部無文。地文L R斜行瓦文。
51	M30	"	V層	口17.2×高(8) 平行沈線・曲線文・蛇行沈線をもつ。地文磨滑縄文。
52	R36	"	I層	口縁部。2本単位の沈線。無文。

探 査 号	発掘区	分 類	層 位	特 色
N-8-53	M28	II	I層	口縁部。沈線で文様帯区画、区画内部細文とクシ目状の条痕。
54	R35	"	II層	"。内面に縄文と波状沈線。地文L R縄文。
55	T34	"	"	"。"。地文L R縄文。
56	V34	"	IV層	"。内湾。太い沈線がつく。地文L R斜行縄文。
57	N31	"	"	口17×高(10.5) 沈線による区画。区画内部地文の残るものと磨痕のものがある。地文L R斜行縄文。
58	U34	"	"	口13.9×底7.8×高9.1 口縁「く」状の連続沈線。胴部沈線で文様帯区画。区画内部地文の残るものと、磨痕のもの。地文L R縄文。
59	M30	II	V層	口縁部。口唇に地文。磨痕状の沈線。
N-9-60	M27	"	"	底部。補修孔1コ。
61	L35	"	IV層	"。上げ底。
62	L33	"	V層	"。胴部内湾。
63	M31	"	I層	"。
64	T34	"	II層	"。半級竹管による刺突文。
65	V34	"	I層	"。
66	U34	"	"	"。
67	H-11	III	II層	口縁内湾。口唇割目。口縁に斜位の沈線、2条の平行沈線。地文L R斜行縄文。



图四—10 遼東外出土石器



図IV-11 遺構外出土石器

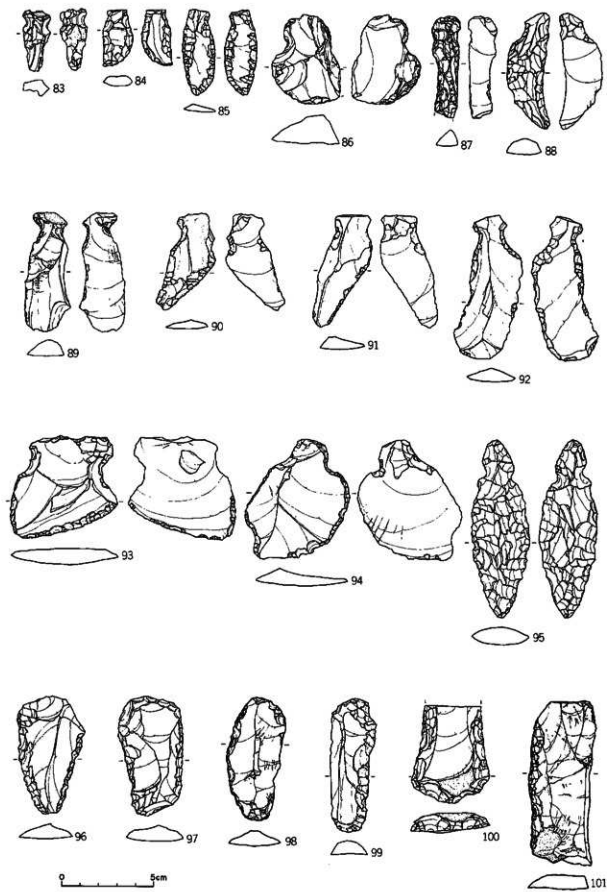
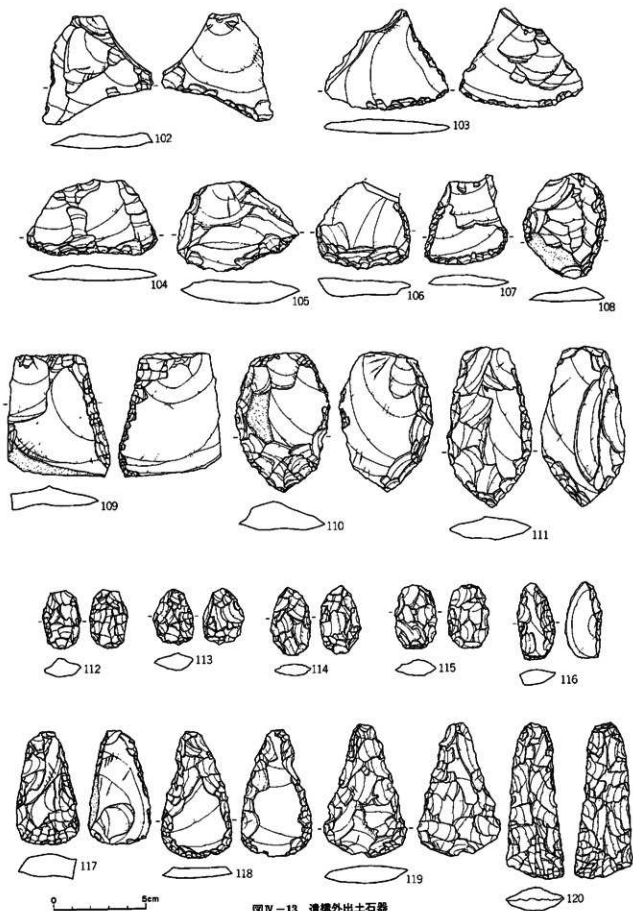
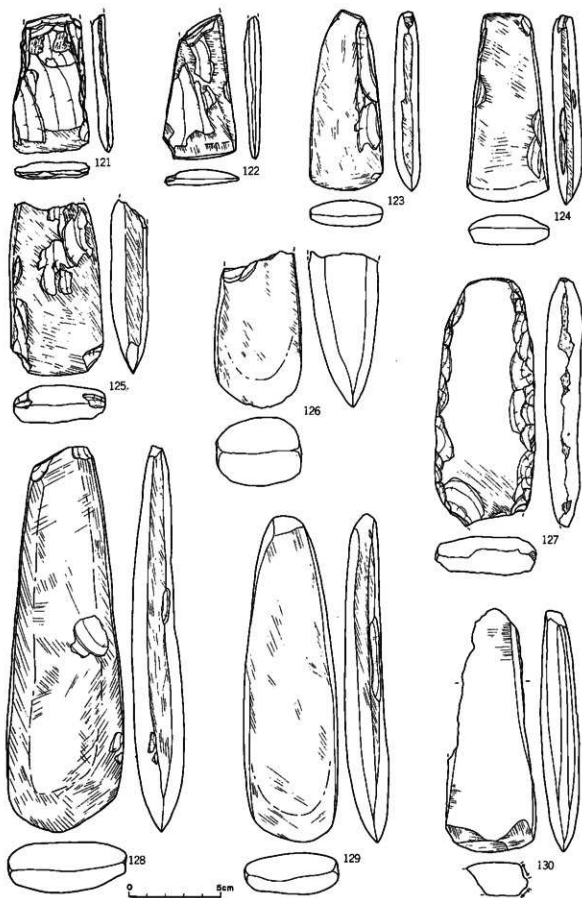


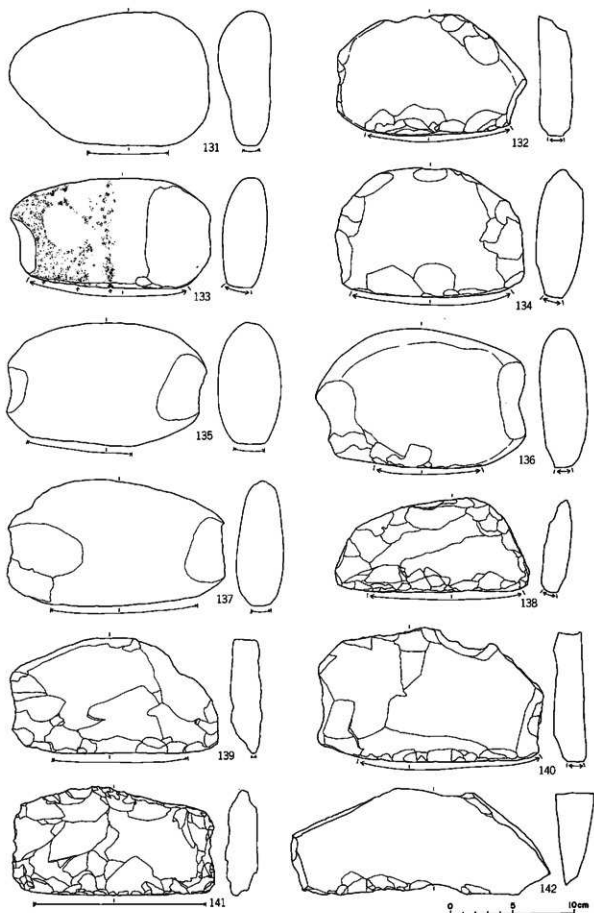
圖 IV-12 遼寧外出土石器



図IV-13 遺構外出土石器



图IV-14 遼寧外出土石器



図IV-15 遺構外出土石器

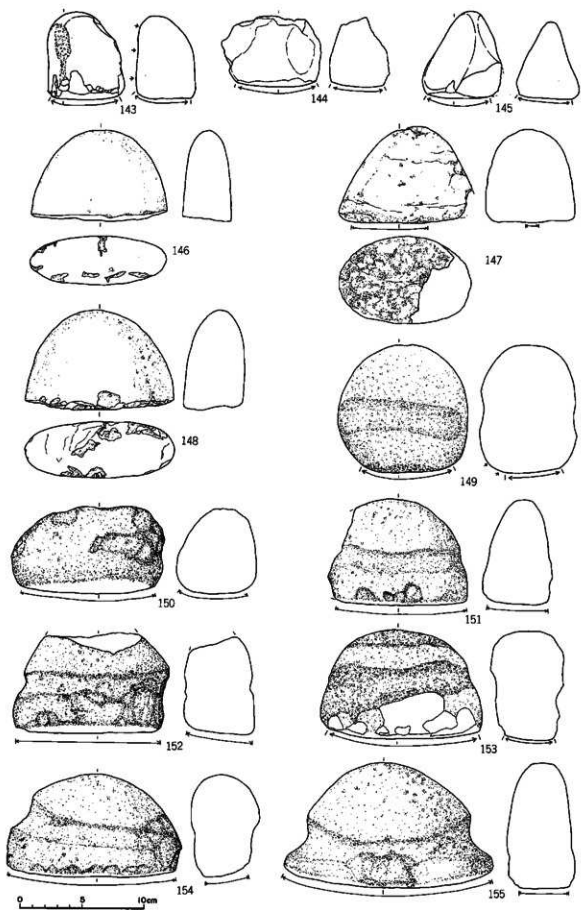
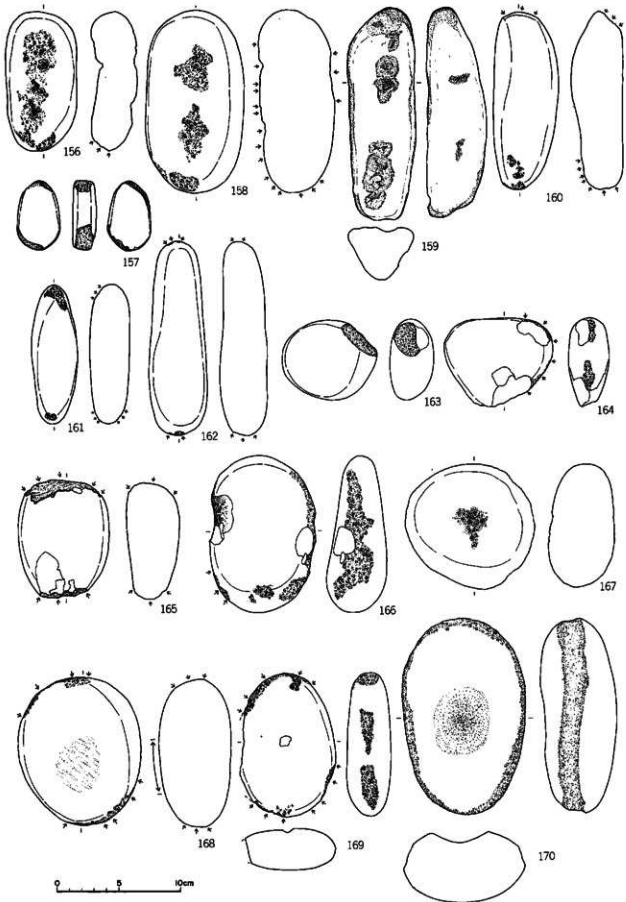
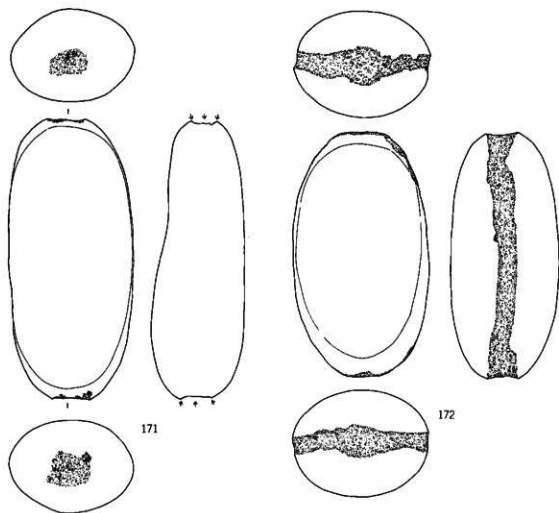


图 IV-16 遼東外出土石器

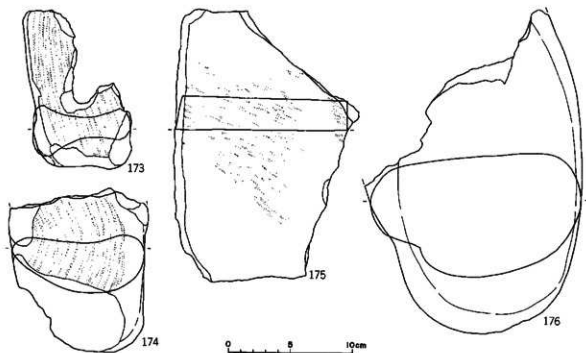


図IV-17 遺構外出土石器



171

172



173

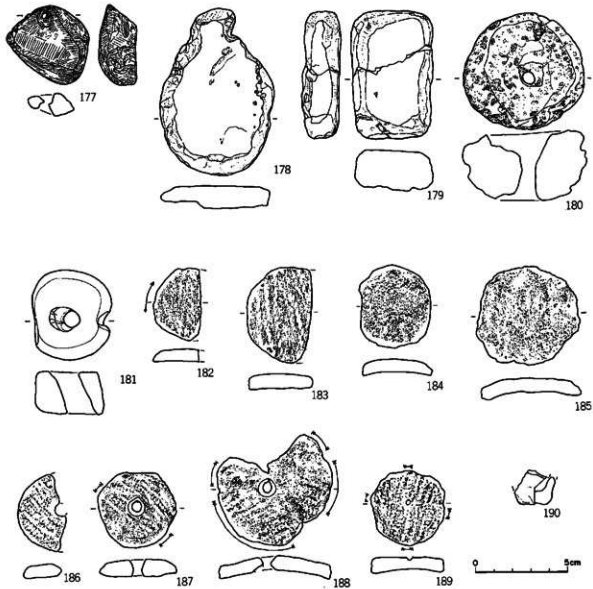
174

175

176

0 5 10cm

图N-18 遺構外出土石器



図IV-19 遺構外出土石製品・土製品

遺構外掲載石器一覧

番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ (cm)	重量 (g)	材質	番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ (cm)	重量 (g)	材質
1	石 鏃	IA 1	M-33	IV	(4.3)×1.9×0.5	(3.2)	Obs.	15	石 鏃	IA 5	U-34	IV	3.8×1.2×0.5	1.9	Sh.
2	"	IA 4 a	N-33	V	2.5×1.1×0.3	0.8	Sh.	16	"	"	M-32	IV	3.5×1.2×0.6	2.1	"
3	"	IA 2	L-30	I	2.2×1.3×0.3	0.85	"	17	"	"	L-95	IV	3.8×1.4×0.7	2.5	"
4	"	IA 4 b	L-34	IV	3.9×1.1×0.4	1.95	"	18	"	"	L-31	IV	4.1×1.5×0.6	2.75	"
5	"	IA 3	M-31	IV	2.9×1.0×0.4	1.0	"	19	"	"	K-29	IV	4.0×1.4×0.7	2.9	"
6	"	"	M-32	IV	2.7×1.0×0.4	1.0	"	20	"	"	S-34	-	4.1×1.6×1.0	3.9	"
7	"	"	M-31	I	2.3×1.0×0.4	1.1	"	21	"	"	L-32	IV	4.0×1.2×0.8	2.4	"
8	"	IA 5	M-29	IV	2.8×1.6×0.6	2.0	Obs.	22	"	"	M-30	IV	4.1×1.5×0.9	4.0	"
9	"	"	L-33	V	3.2×1.5×0.5	1.6	Sh.	23	"	"	L-25	IV	4.2×1.4×0.8	4.0	"
10	"	"	P-36	V	3.1×1.2×0.4	1.35	"	24	"	IA 6	L-28	V	2.7×1.2×0.5	1.3	"
11	"	"	M-30	-	2.8×1.3×0.6	1.6	"	25	"	"	L-32	IV	3.1×1.2×0.5	1.4	Obs.
12	"	"	K-30	IV	3.0×1.2×0.5	1.4	"	26	"	"	L-31	IV	2.8×1.1×0.5	1.1	"
13	"	"	L-28	V	3.3×1.5×0.7	2.5	"	27	"	"	M-32	IV	3.0×1.4×0.6	1.8	"
14	"	"	N-23	IV	3.4×1.3×0.7	2.5	"	28	"	"	L-28	V	2.9×1.4×0.6	2.0	Sh.

番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ (cm)	重さ(g)	石質	番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ (cm)	重さ(g)	石質	
29	石	ⅠA 6	K-25	I	2.8x1.6x0.4	2.5	Sh.	91	つばね付ナツ	ⅠA 1 a	K-32	Ⅱ	6.3x2.4x0.7	12.0	Ba.	
30	"	"	P-35	Ⅱ	3.0x1.6x0.5	1.7	Obs.	92	"	"	D-7	Ⅱ	7.8x2.6x0.8	20.0	Sh.	
31	"	"	N-32	I	3.0x1.6x0.7	2.2	Sh.	93	"	"	ⅡA 2	M-34	Ⅱ	5.3x5.7x1.3	36.6	"
32	"	"	L-28	V	3.1x1.7x0.8	1.7	"	94	"	"	ⅡA 1 a	M-30	V	6.4x5.3x0.9	29.0	"
33	"	"	M-29	Ⅱ	3.4x1.6x0.5	2.1	"	95	"	"	ⅡA 1 c	K-28	Ⅱ	9.5x3.1x1.1	30.0	"
34	"	"	M-32	V	3.4x1.5x0.6	2.2	"	96	ステレバール	"	C 1 a	L-28	V	6.2x3.6x1.2	24.0	"
35	"	"	M-29	V	3.4x1.6x0.8	2.5	"	97	"	"	ⅡC 1 b	K-32	Ⅱ	6.4x3.5x1.2	28.0	"
36	"	"	"	Ⅱ	3.4x1.7x0.8	3.5	"	98	"	"	"	M-30	Ⅱ	6.6x2.9x0.9	18.0	"
37	"	"	M-34	"	3.6x1.2x0.5	2.3	Obs.	99	"	"	S-35	I	7.2x2.4x1.2	29.0	"	
38	"	"	M-31	V	3.1x1.5x0.4	1.5	And.	100	"	"	M-27	V	(5.2)x4.1x0.9	(29.0)	"	
39	"	"	K-31	Ⅱ	2.5x3.9x0.4	1.9	Sh.	101	"	"	ⅡC 1 a	M-31	Ⅱ	8.8x3.2x0.9	42.0	"
40	"	"	M-25	V	4.3x1.3x0.4	2.0	"	102	"	"	C 2 a	D-7	Ⅱ	5.9x5.5x0.5	32.0	"
41	"	"	M-32	Ⅱ	2.8x0.9x0.6	3.2	"	103	"	"	ⅡC 2 b	L-28	V	5.5x6.7x0.6	36.0	"
42	"	"	N-25	V	5.8x1.8x0.9	3.6	"	104	"	"	ⅡC 2 a	K-32	Ⅱ	4.0x6.9x0.5	28.0	"
43	"	"	K-28	Ⅱ	2.9x1.2x0.4	1.2	Chc.	106	"	"	L-25	Ⅱ	4.3x6.9x1.1	40.0	"	
44	"	"	N-32	V	(3.9)x1.2x0.4	(1.2)	Sh.	106	"	"	ⅡC 2 b	L-28	V	(4.6)x5.0x0.8	(26.0)	"
45	"	"	L-30	Ⅱ	3.1x1.1x0.6	1.7	"	107	"	"	M-31	Ⅱ	4.4x4.3x0.7	16.0	"	
46	"	"	M-30	V	3.1x1.2x0.4	1.9	"	108	"	"	ⅡC 3	T-34	I	5.6x4.4x0.8	22.0	"
47	"	"	M-35	Ⅱ	4.6x1.7x0.6	3.9	"	109	"	"	ⅡC	U-34	Ⅱ	6.5x5.5x1.5	55.0	"
48	"	"	S-34	"	4.4x1.5x0.6	2.9	"	110	"	"	ⅡC 5	N-26	Ⅱ	7.5x4.5x1.9	66.0	"
49	"	"	N-22	Ⅱ	(4.2)x0.8x0.25	(1.8)	"	111	"	"	M-31	Ⅱ	8.5x4.4x1.4	60.0	Ba.	
50	"	"	N-24	Ⅱ	(4.4)x0.9x0.4	(1.5)	"	112	"	"	ⅡC 4	L-29	I	3.1x2.6x0.9	5.9	Sh.
51	石	ⅡC	M-32	V	2.3x1.2x0.5	1.0	"	113	"	"	M-32	Ⅱ	3.0x2.1x0.9	6.0	"	
52	"	"	M-29	V	2.3x1.6x0.6	2.6	"	114	"	"	L-32	Ⅱ	3.7x2.8x0.6	4.3	"	
53	"	"	M-31	Ⅱ	3.7x1.8x0.6	2.5	"	115	"	"	M-34	"	3.9x2.2x0.9	10.9	"	
54	"	ⅡA	Ⅱ-V	"	3.5x1.1x0.7	2.2	"	116	腕状石部	ⅡB 1	M-30	V	4.1x2.8x0.8	7.9	"	
55	"	"	M-33	I	4.2x1.8x0.6	3.1	"	117	"	"	L-30	V	6.1x3.3x1.4	28.0	"	
56	"	ⅡB	L-28	V-Ⅱ	3.5x2.6x0.8	7.0	"	118	"	"	M-29	V	6.9x3.7x1.1	34.0	And.	
57	"	"	N-34	"	3.5x3.8x1.2	9.7	"	119	"	"	ⅡB 2	N-25	Ⅱ	7.2x4.9x1.1	23.0	Sh.
58	"	"	N-24	Ⅱ	4.2x2.3x1.0	6.7	"	120	"	"	M-32	Ⅱ	8.3x3.1x1.3	31.0	"	
59	"	"	L-32	Ⅱ	4.6x2.3x0.8	8.1	Chc.	121	石	ⅡA	K-31	Ⅱ	(7.2)x4.1x0.8	(41.0)	Bl.-Sch.	
60	石部	ⅠB 1	L-28	V	3.7x1.3x0.6	5.8	Sh.	122	"	"	M-29-C	Ⅱ	(7.8)x4.8x0.9	(35.0)	"	
61	"	ⅠB 2	T-34	V	5.1x2.0x0.6	7.5	And.	123	"	"	N-22-I	"	9.6x4.8x1.4	92.0	"	
62	"	"	L-28	Ⅱ	5.7x2.1x0.7	6.6	Sh.	124	"	"	M-30	V	10.1x4.9x1.5	11.5	"	
63	"	"	U-34	Ⅱ	4.3x2.1x0.8	6.6	Chc.	125	"	"	C-6 Ⅱ	"	(9.2)x5.0x2.0	(168.0)	"	
64	"	"	L-28	V	4.6x2.8x0.9	8.6	Ba.	126	"	"	C-31	V	(8.4)x4.7x3.7	(225.0)	Cr-Mal.	
65	"	ⅠB 1	M-31	V	4.4x0.9x0.8	14.0	Sh.	127	"	"	N-19	Ⅱ-V	(12.8)x5.4x2.0	(229.0)	"	
66	"	ⅠB 2	O-34	V	5.3x1.8x1.1	12.0	Ba.	128	"	"	M-30	V	28.3x6.3x2.7	500.0	"	
67	"	"	C-6	Ⅱ	(6.3)x3.5x1.2	(26.1)	"	129	"	"	M-30	V	17.5x5.1x2.1	330.0	"	
68	"	ⅠB 4	M-28	Ⅱ	(4.1)x1.7x0.5	(6.2)	Obs.	130	"	"	ⅡB	M-32	Ⅱ	13.1x4.8x2.0	(150.0)	Ser.
69	"	"	D-8	I	6.8x2.3x0.7	8.3	Sh.	131	ナリ石	ⅡA 1 a	M-30	Ⅱ	15.9x10.8x2.9	800.0	Sa.	
70	"	"	L-31	Ⅱ	(5.9)x2.4x0.8	(20.6)	"	132	"	"	ⅡA 1 b	M-29	V	15.9x9.5x1.7	550.0	"
71	"	"	M-32	I	(6.9)x1.9x1.6	(6.9)	Obs.	133	"	"	M-30	V	15.9x8.7x3.5	750.0	Dior.	
72	"	ⅠB 3	M-30	Ⅱ	6.8x2.8x0.8	11.0	Sh.	134	"	"	L-28	V	15.8x10.1x3.6	850.0	"	
73	"	"	D-6	I	8.5x2.1x1.0	12.0	"	135	"	"	N-24	Ⅱ	15.8x9.7x3.6	1.2x	"	
74	"	ⅠB 4	L-33	Ⅱ	9.6x3.8x1.0	21.9	"	136	"	"	L-27	Ⅱ	16.4x11.0x3.6	1.1x	And.	
75	"	ⅠB 2	M-29	Ⅱ	(7.4)x2.3x0.7	(20.9)	"	137	"	"	C-6	I	10.8x17.4x3.7	1.01x	Dior.	
76	"	"	M-26	I	(8.3)x2.7x1.5	(22.0)	Obs.	138	"	"	ⅡA 2	L-33	Ⅱ	15.5x7.3x1.3	369.0	And.
77	"	ⅠB	M-26	I	14.9x3.4x1.3	84.0	Ba.	139	"	"	K-28	V	16.5x9.1x2.1	600.0	"	
78	"	"	L-33	Ⅱ	(4.4)x2.5x1.0	(10.8)	"	140	"	"	M-31	Ⅱ	17.6x10.7x1.8	760.0	"	
79	"	"	N-35	Ⅱ	(5.7)x3.4x1.3	(39.0)	Sh.	141	"	"	O-36	V	8.7x16.8x2.6	322.0	"	
80	"	"	L-34	V	(5.1)x2.5x1.0	(22.0)	"	142	"	"	M-26	Ⅱ	8.3x20.5x3.2	630.0	"	
81	"	ⅠB 3	C-6	Ⅱ	10.2x5.1x2.3	110.0	Ba.	143	"	"	O-35	Ⅱ	6.9x6.33x4.56	309.0	Tu.	
82	"	ⅠB	L-31	V	13.1x1.8x0.2	138.0	Sh.	144	"	"	M-25	Ⅱ	5.7x8.0x4.7	295.0	And.	
83	つばね付ナツ	ⅡA 1 a	L-31	Ⅱ	3.4x1.5x0.8	3.2	Obs.	145	"	"	N-28	V	6.98x6.3x3.2	223.0	Sa.	
84	"	"	L-28	V	3.0x1.4x0.7	3.3	Sh.	146	"	"	M-30	Ⅱ	10.9x6.7x2.7	433.0	Dior.	
85	"	"	K-30	I	4.6x1.7x0.3	3.2	"	147	"	"	O-36	V	7.7x9.8x6.9	716.0	Dior.	
86	"	"	M-26	V	(4.8)x3.8x1.4	(23.5)	"	148	"	"	O-33	Ⅱ	11.9x7.8x6.5	638.0	Dior.	
87	"	ⅡA 1 b	L-31	Ⅱ	(5.5)x1.6x0.9	(7.8)	"	149	北海道式石花	ⅡA 4	O-36	V	10.3x10.4x7.4	1.21x	And.	
88	"	"	M-31	I	6.7x2.8x1.0	15.0	"	150	"	"	L-26	Ⅱ	6.6x12.1x7.0	840.0	"	
89	"	ⅡA 1 a	M-26	V	6.4x2.5x0.8	10.8	"	151	"	"	M-34	V	(8.4)x10.8x5.1	(750.0)	"	
90	"	"	M-32	V	5.6x2.2x0.5	10.0	Obs.	152	"	"	M-31	Ⅱ	(7.8)x11.6x5.8	(650.0)	"	

IV 遺構外出土の遺物

番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ (cm)	重量(g)	材質	番号	名称	分類	発掘区	層位	大きさ (cm)	重量(g)	材質	
153	北海道式石冠	V A 5	O-35	Ⅱ	8.1×12.8×5.1	829.0	And.	172	たたき石	V B 2	M-31	Ⅱ	19.4×10.8×8.3	2.74kg	And.	
154	＊	＊	O-35	Ⅱ	8.6×13.9×4.6	925.0	＊	173	砥石	Ⅱ	K-30	Ⅱ	12.8×10.8×4.0	750.0	Sa.	
155	＊	＊	M-31	Ⅱ	17.3×16.7×5.9	1.25kg	Disc.	174	＊	＊	表層		(12.1)×7.3×3.0	250.0	And.	
156	たたき石	V B 2	N O-7	表層	11.0×5.7×3.3	327.0	And.	175	＊	＊	M-27	I	14.6×21.7×2.8	1.45kg	＊	
157	＊	＊	M-27	Ⅱ	5.5×3.4×1.8	63.0	Gr-Mud	176	石	Ⅱ	Ⅱ	K-31	I	(24.4)×17.3×9.6	4.83kg	Sa.
158	＊	＊	M-25	Ⅱ	7.6×14.5×5.9	1kg	And.	177	石製品		N-35	Ⅱ	4.0×4.4×2.2	467.0	Gr-Mud	
159	＊	＊	C-6	I	16.7×5.5×4.8	543.0	Sa.	178	＊		M-33	I	8.9×6.6×1.2	47.4	Sa.	
160	＊	V B 1	P-35	Ⅱ	14.1×5.1×3.5	439.3	And.	179	＊		L-16	I	8.8×4.3×2.9	107.7	Pum.	
161	＊	＊	N-22	I	11.0×3.7×3.1	195.0	＊	180	＊		M-34	Ⅱ	6.9×6.2×3.9	23.5	Mud.	
162	＊	V B 2	N-22	Ⅱ	15.9×4.7×3.8	490.0	＊	181	自然骨孔石		L-32	Ⅱ	4.8×4.2×2.5	55.2		
163	＊	＊	L-30	Ⅱ	6.4×7.5×3.5	224.0	Chn.	182	土製円盤		M-31	Ⅱ	3.9×(2.6)×0.6	(7.1)		
164	＊	＊	N-36	Ⅱ	7.2×8.7×3.2	274.0	＊	183	＊		M-25	Ⅱ	5.1×(3.4)×0.8	(16.2)		
165	＊	＊	M-31	Ⅱ	9.3×7.2×4.4	430.0	＊	184	＊		M-31	Ⅱ	4.4×3.7×0.6	12.5		
166	＊	＊	M-32	Ⅱ	12.5×8.5×4.6	665.0	And.	185	＊		N-32		5.4×5.3×0.8	26.8		
167	＊	＊	N-34	Ⅱ	10.3×10.9×5.5	749.0	Disc.	186	＊		L-27	Ⅱ	4.2×(2.5)×0.7	(6.8)		
168	＊	＊	O-35	Ⅱ	11.8×9.8×5.1	536.0	＊	187	＊		K-28	I	3.8×4.2×0.9	5.1		
169	＊	＊	E-7	Ⅱ	11.4×(7.4)×3.6	(480.6)	＊	188	＊		L-32	Ⅱ	(4.9)×8.2×0.7	(27.4)		
170	＊	＊	M-30	Ⅱ	15.6×9.7×5.9	1.35kg	And.	189	＊		N-20	Ⅱ	4.0×3.9×0.8	14.3		
171	＊	＊	O-35	Ⅱ	22.1×9.9×7.2	2.37kg	＊	190	ニフェア土器		N-25	Ⅱ	(2.2)×1.4×(1.8)	(2.65)		

V ま と め

1 土器について

a 土器の型式分類

遺構及び遺構外から出土した土器のうち、掲載したものについては所見を表に示したが、ここではこれをまとめ、型式ごとの特徴について記述する。I章の土器分類はこの結果に基づいたものである。

I群a類

中期前葉に属する土器群。分布状態をみると南斜面に散在している。地文は結束の羽状縄文・単節の斜行縄文が多用される。胎土には小砂利が多く含まれる。内面は研磨されているものが多い。このうち口縁部に地文がなく、貼付文によって区画された内側に馬蹄形捻糸丘状文・爪形刺突文・円形刺突文などが施されたものは、サイベ沢V式に相当する(図IV-1-1)。地文を施文した後に貼付文を施したものは、サイベ沢VI式に相当する(図IV-1-2)。地文に結節・結束の縄文が施され、山形あるいは棒状の突起をもつものは、サイベ沢VII式に相当する土器である。(図III-60-1~4・6, 図IV-2-3~5)

I群b類

中期中葉に属する土器群。もっとも出土量が多い。住居跡KH-9aではとくに多量に出土しており、30個体が復元された。この土器は遺跡全体に分布しているが、とくに28ライン~35ラインの間に集中している。

表V-1 包含層出土土器一覧

分類	口縁部	底部	別部	総計
I群				
a類	55			
b類	2,325	1,592		
c類	159	19		
II群				
	984	189		
III群				
	1			
計	3,524	1,800	42,221	47,545

表V-2 住居跡出土土器分類別一覧

住居跡No.	総点数	住居土器の分類				時 期
		I群a類	I群b類	I群c類	II群	
1	193	5	3	1	I群c類	中期末葉
2	285	3	2	5		中期中葉~後期初頭
3	774		12	22	10	中期中葉
4	45			1	4	中期末葉~後期初頭
5上	80		2	6	2	中期中葉~中期初頭
5下	16			1		中期中葉
6	3,023		14	54	120	I群c類 中期末葉
7	1,493		44	23	56	I群b類 中期中葉
8	816		6	36	12	中期末葉
8	3					中期中葉~中期末葉
9	674		24	13	25	中期中葉~後期初頭
9	7,353		297	46	45	I群b類 中期中葉
10	2,079		20	43	22	" "
11	2,886	14	83	13	24	" 中期中葉~中期中葉
12	1,659		61	42	18	中期中葉~中期末葉
13	2,037		25	10	22	I群b類 " ~ "
P-23	94	1	5	2	1	I群c類 中期末葉
計	21,851		616	317	367	

見晴町式土器に相当するもの：口縁に4個の突起をもち、胴部がやや脹らむ円筒形の土器。文様は、沈線が施されるものと、地文のみのものがある。口唇部には縦位・斜位の刻目が施されている。刻目は縄文原体によるものと、へら状工具によるものがあるが、前者が約80%を占める。地文は単節の斜行縄文が多い。文様がないものでは、結束の羽状縄文を地文としているものがみられる。底部は周囲が調整され、無文になっているものが多い。胎土には石粒が多く含まれている。

森越式土器に相当するもの：サイベ沢Ⅶ式・見晴町式土器に大木系土器の特徴が色濃くでているもの、口唇に溝状の深い沈線が施されたもの(図Ⅲ-45-28)、胴部に大木系土器のモチーフが施されたもの(図Ⅲ-43-12)などがある。

大木8b式土器に相当するもの：2個体の復原土器がある。胴部がわずかに脹らむ小型浅鉢と、キャリパー形の深鉢である(図Ⅳ-2-6・7)。内面は調整されている。胎土には砂が多い。

大木9式土器に相当するもの(図Ⅲ-28-1、図Ⅲ-61-7)：山形突起に渦巻文を配し、口唇には深い沈線がある。頸部・胴上半部には弧線文・平行沈線・懸垂文が施されている。地文はRL斜行縄文が多く、複節の縄文もわずかみられる。胎土には砂粒が多い。内面は研磨されている。焼成が良く、色調が橙褐色のものと、焼成が悪く、色調が灰褐色のものがある。大木8b・9式土器は、見晴町式土器と伴出しており、単独に出土したものはない。

I群C類

中期末葉に属する土器群。住居跡KH-14で完形土器が出土した。このほかは遺構外及び住居跡覆土中から出土した破片である。

1ダップⅡ式土器に相当するもの(図Ⅳ-5-29・図Ⅲ-74-1)：頸部にくびれのある深鉢形土器。隆起帯上に縄線文がめぐっている。地文は原体を縦・横・斜に自由奔放に回転させたものが多い。

レング台式土器に相当するもの(図Ⅳ-5-31~35・図Ⅲ-81-1・図Ⅲ-22-2)：貼付帯上に短刻文を施している。口唇・内面は良好に調整されている。地文は単節斜行縄文が多い。

ノダップⅡ式・レング台式土器の形態がくずれたもの(図Ⅳ-5-27・28・36、図Ⅲ-56-1・図Ⅲ-65-1・2)：図Ⅳ-5-28は、口縁部が大安在B式土器に近いものである。図Ⅳ-5-36・図Ⅲ-56-1は、口縁部貼付帯が全市式土器に類似するが、口唇には刻目・円形刺突文がある。広口の壺形土器である。図Ⅲ-65-1は、器形及び地文がノダップⅡ式土器に類似するが、貼付帯・短刻文・縄線文がないものである。

上記のものと伴出した縄線文土器(図Ⅳ-5-37・図Ⅲ-65-3)：口縁部は地文の上から横位の縄線文を施している。地文は単節の斜行縄文。外面に炭化物が付着している。

大木10式土器に相当するもの(図Ⅲ-65-4)：上記の土器と伴出した。大型で広口の壺形土器。類例には秋田県天戸森遺跡出土のものがある²¹。

II群

後期前葉に属する土器群。調査区全域に散在していた。このうち余市式土器はおもに平坦部、大津式土器は南斜面から出土した。

表Ⅴ-3 土壇・石組伊出土土器一覽

遺構No.	総点数	時 期	遺構No.	総点数	時 期
1	11		18	62	
2	15	中期中葉	21	38	
4	8		24	41	
5	13	中期末葉	25	80	
8	1		26	8	
9	9		27	1	
10	8		28	48	
11	6		29	14	
12	3		30	209	後期初葉
14	25		S-1	11	中期中葉
15	18				
16	17		計	646	

糸市式土器に相当するもの(図IV-6-38・図III-23-12・III-24-23・図III-117-3・11):口縁部及び胴部に貼付帯がある。地文は単節の斜行縄文。器面と貼付帯上では、原体を異なる方向に回転して地文を施している。胎土には砂粒が多い。

涌元式土器に相当するもの及びこれに類似するもの(図IV-6-39~44・図IV-7-45~47・図III-23-6・7・図III-117-1・2):平行沈線・曲線文・蛇行沈線・刺突文・縄線文などで文様が構成されている。地文のみのもの・無文のものもある。このうち蛇行沈線があるものは1段階古い可能性がある²⁾。縄線文の土器は、口縁部が磨消によって無文になっている。器形には、深鉢・浅鉢・壺形土器・甕形土器などがある。

鳥崎式に相当するもの(図IV-7-28~29・図IV-8-50~52):平行沈線・懸垂文・渦巻文・連弧文などの文様がある。地文があるものと、無文のものがあり、前者では磨消縄文が多用されている。地文は単節の斜行縄文。器形は、深鉢・浅鉢・甕形土器などがある。

大津式土器に相当するもの(図IV-8-53~59):波形・曲線文・「己」形・「く」形などの沈線で文様帯を区画し、区画内はクシ目の条痕があるもの。あるいは地文を磨消したものなどがある。沈線は比較的太いものが多い。地文は、単節の縄文。器形には、深鉢・浅鉢・壺形土器がある。このうち図59は、口縁部に鋸歯状の沈線があることから、ウサクマイC式に近いものと考えられる。

III群(図IV-9-67)

北斜面の中腹から単独で出土したものである。口縁部の斜位の沈線は、大洞B・C式の羊歯状文が退化したものと考えられることから、大洞C₁式の古手に相当するものであろう。

b 土器の出土状況

口縁部及び底部破片数から個体数を求め、時期別の分布状態を示した。

遺構外出土土器

分類別に個体数を示した。表V-1は分類別個体数一覧表である。グリッド別の分類別個体数は、図V-1・2の分布図に示した。

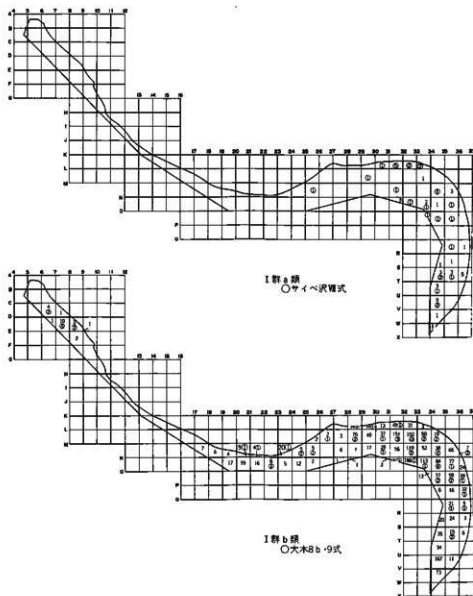
I群a類土器のうちサイベ沢V・VI式は、南斜面のみに散布しているが、サイベ沢VII式は平坦部にも分布する。I群b類土器は、9ライン~17ラインを除く全地区から出土したが、とくに29ライン~35ラインに集中している。平坦部での遺物の集中地点は住居跡の分布と一致する。南斜面での遺物の集中地点は、当初平和台パターン¹⁾の廃棄行為として扱えようと試みたが、完形に近い土器が少ないことから、これとは異っている。I群c類土器は、9ライン~18ライン・Qライン以西を除いて全域に分布している。II群土器は9ライン~17ラインを除いて全体に分布している。とくに22ライン~33ラインの平坦部に多い。III群土器は、H-11発掘区から一箇体分出土したのみである。周囲からはこのほかに一片の土器も出土しない。

口縁部破片の数から個体数を推定して、分類別の土器の割合を求めるとI群b類土器が約67%が一番多く、続いて、II群土器28%、I群c類土器4%、I群a類土器1%となる。このほかにIII群土器が1個体ある。時期別にみると、始めに縄文時代中期前葉の土器がわずかながら出現する。次いで縄文時代中期中葉の土器が急激に増える。縄文時代中期末葉になると土器が減少し、縄文時代後期初頭になってやや増加する。その後空白が続き、縄文時代後期初頭に1個体のみであるが再び土器が出現する。これは中期中葉の住居跡の数とほぼ符合するが、中期末葉から後期前葉については一致しない。中期末の住居跡は3軒確認されたが土器が少ない。これに対して後期前葉の土器は多いが住居跡が確認されていない。この理由としては、中期末葉の人々が住居廃絶後、土器をもって移動したか、土器の廃棄場所が別にあったものと考えられる。後期前葉の住居跡が確認されないのは、住居跡が台地の

奥にあって、今回の調査では発掘されなかったものと考えられる。

遺構内出土土器

表V-2は各住居跡の出土土器総点数・口縁部による分類別個体数・床面・床上の土器の分類・住居跡の時期を示したものである。総個体数の27%が住居跡から出土している。この中には従来から提唱されている廃絶住居跡の覆土中に、完形及び完形に近い土器を廃棄する行為として理解される例が認められた。KH-6・9b・11・12・KP-23がそれである。以下小林達夫氏(1974)による廃棄パターンに照合して記載する。KH-6は覆土上面から多数の土器片が出土したが、床面からは少量が出土したのみである。第一次埋没土からは完形に近い土器が4個体出土した。これは吹上パターンとして扱えられるもので、出土した土器が凹みの最も深い所にあることから、廃棄されたものと考えられる。覆土上部の多数の土器片は、図23の土器がKP-28の覆土・包含層出土の土器と接合したことから、本住居跡が埋没していく過程で流入したものと考えられる。KH-12からも第一次埋没土の上面から完形に近い土器が3個体出土した。KH-9a・KH-11は床直上から多数の完形に近い土



図V-1 遺構外出土土器分布図

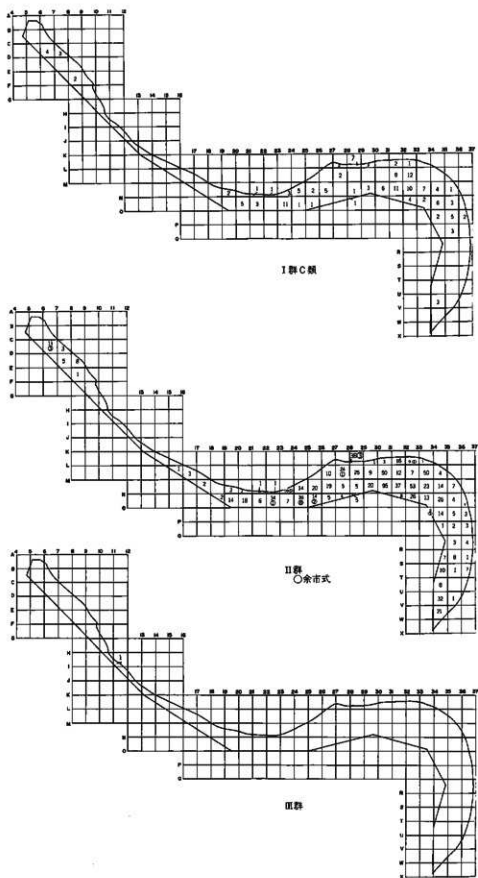


图 V-2 猿头出土土器分布图

器が出土した。このうちKH-9 aではとくに多量の遺物が出土した。また覆土中に焼土粒・炭化物に混入して多数の骨片も出土した。KH-14の北壁ぎわの床面からは完形の深鉢形土器が斜めに立った状態で出土した。これは置き去りにされたものと考えられることから、井戸尻パターンに相当しよう。この他には、KH-8 bのように床面からごくわずかの土器片しか出土しない例がある。これは置き去り、落ちこぼれのケースと考えられることからパターンC₂に相当する。以上の住居跡内出土土器の分類をみると次のようになる。KH-6床：I群c類、廃業：II群、流入：I群b類～II群。KH-9 a床及廃業：I群b類、流入：I群b類～II群。KH-11床及廃業：I群a類・b類、流入：I群a類～II群。KH-12・14廃業：I群c類、流入：I群b類～II群。これらのことから本遺跡での廃業行為は、縄文時代中期前葉の終わりごろから、中期末葉にかけて行なわれていたと考えられる。

注1 鹿角市教育委員会 1984 「天戸森遺跡」 P 428-第400図の10 S 143 炉内出土から出土したもの。副都の地文以外は、小岱遺跡の例と非常に似ている。

注2 東北地方の宮戸I b式土器にみられる連続S字文、ジグザグ文に類似している。

2 石器等について

今回の調査では、剥片石器886点、礫石器574点、このほかに石製品・土製品21点が出土した。包含層における石器の分布状態は、Pライン以北の24と26ラインに挟まれた地区に集中する傾向がうかがえる。本遺跡からは時期の異なるいくつかの土器群が検出されているが、それらとの詳細な共存関係については明確にとらえることはできなかった。しかし、主体を占める第I群b, c類土器に関連するものが多いと考えられる。

石鏃(図IV-10の1~50)：316点出土。包含層出土の石鏃のうち縄文時代中期中葉～後葉以外の所産と考えられるものは次の4例である。①IA1類・黒曜石の大形鏃(1) ②IA4a類・基部の内湾する三角鏃(2)、③IA6類・入念な加工が施され、薄身に作られた有茎鏃(49)、④IA4b類・基部に小さな袢りのある五角形鏃(4)。②～④は時期が不明だが、①は縄文時代早期前半の貝殻条痕文土器に伴う長身鏃であろう。形態的に主体をなすものは、多い順に、IA6類・有茎のもの(24~50)、IA5類・基部の不明瞭なもの(8~23)、IA3類・木葉形のもの、である。IA5類は基部の側縁のみに緩い袢りをもつのが特徴である。またIA6類には、かえし部が明瞭で整った形のもの(43~50)と、かえし部が弧状をなし、いびつな形のもの(24~42)がある。石質は頁岩が大部分を占めているが、黒曜石・安山岩・珪岩もわずかにある。

石槍またはナイフ(図IV-10の60~68、図IV-11の69~82)：164点出土。IB1類・菱形のもの(60, 65)、IB2類・木葉形のもの(61~64, 66, 67)、IB3類・基部が不明瞭なもの(72・73)、IB4類・有茎のもの(68~71, 74)がある。IB2類には二次加工の粗いものが多い。IB3類は狭長で最大巾が刃部寄りに位置するのが特徴である。IB6類には周縁加工と両面全面加工のものがある。また後者には身部にも袢りをもつもの(74)もある。石質は石鏃と同様、頁岩が多い。

石錐(図IV-10の51~59)：21点出土。II A類・棒状のもの(54, 55)、II B類・剥片の一端に刺突部を作り出したもの(56~59)、II C類・形態的にIA6に類似するもの(51~53)がある。II C類は上ノ国町小砂子遺跡、知内町湯の里2遺跡などで検出されている。すべて頁岩製である。

つまみ付きナイフ(図IV-12の83~95)：38点出土。形態から横形と縦形のグループに分けられる。前者には周縁加工と両面全面加工のもの(93、図III-48の18)があり、後者にはこれに片面全面加工のもの(87・88)が加わる。石質は縦形のものに安山岩、黒曜石がわずかにあるほかは、すべて頁岩

である。

筈状石器〔図IV-13の116~120〕：15点出土。ⅢB 1類・周縁加工のもの(116, 118), ⅢB 2類・片面全面加工のもの(117), ⅢB 3類・両面全面加工のものがある。基本的にⅢB 1・2類は片刃, ⅢB 3類は両刃であるが, パルプを刃部側に位置させているためにⅢB 2類の中には両刃状をなすもの(117, 図III-63, 14)もある。すべて頁岩製。

スクレイパー〔図IV-12の96~101, 図IV 13の102~115〕：332点出土。ⅢC 1類・縦長剥片を素材にしたもの(96~101) ⅢC 2類・横長剥片を素材としたもの(102~107), ⅢC 3類・円形, 楕円形をなすもの(108), ⅢC 4類・二次加工が両面全面に施され, 拵指状をなすもの(112~115), ⅢC 5類・先端部が尖るもの(110)がある。ⅢC 1類には先端部にも加工が及び, エンドスクレイパー的な形態のものがある(99)。

石斧〔図IV-14〕：44点出土。ⅣB類・石のみがKH-8で1点出土した(図III-36の9)ほかは, すべて広義の定角式石斧に属するものである。後者には擦り切り技法によって製作されたもの(130)が1点ある。石質は擦り切り石斧が蛇紋岩のほかは, 緑色泥岩と黒色片岩がほぼ同量である。

すり石〔図IV-15・16〕：297点出土。VA 1 a類・扁平礫を素材として一側縁を擦ったもの(131) VA 1 b類・扁平礫を素材として, 周縁部とくに長軸両端に石錘様の剝離調整を行なった後, 一側面を擦ったもの(132~137), VA 2・板状礫を素材として, 周縁部を剝離調整後一側縁を擦ったもの, VA 3・礫の平坦面や半割面を擦ったもの(143~148)がある。これらは半円状打製石器と呼ばれているものである。このほかに, VA 4・北海道式石冠(149~155)がある。VA 1 b, VA 2類には, 周縁部以外にたつき痕や, 砥面をもつもの(133, 図III-26の17)があり, ほかの器種からの転用が考えられる。VA 1 a, b類は主に閃緑岩が利用されているほか, 安山岩, 砂岩が少量ある。VA 2類はすべて節理面によって板状に割れた安山岩である。

たつき石〔図IV-17, IV-18の171~172〕：138点出土。VB 1類・棒状礫, VB 2類・扁平礫, VB 3類・円礫を素材にしたものがある。VB 2類には周縁部に北海道式石冠様の敲打調整をめぐらせるものがある。(170, 172) 石質は砂岩・珩岩・緑色泥岩がわずかにあるほかは, 安山岩と閃緑岩が利用されている。

砥石〔図IV-18の173~174〕：12点出土。板状の安山岩の平坦面を利用したもの(175)と, 粒子の細かい砂岩を素材とし, 全面を利用したもの(173)がある。後者はよく使い込まれ, 砥面は大きく凹んでいる。

台石・石皿〔図IV-18の176〕：62点出土。安山岩, 砂岩の自然礫を利用したもので, すり面・敲打痕・凹みをもつ。重さが68 kgをはかる大形の台石がKH-8床面から出土している。(図III-37の17)

石製品など〔図IV-19の117~181〕：11点出土。垂飾類では, 緑色泥岩(177), 蛇紋岩(図III-49の41), 軽石(180), 砂岩製のもの(178・179)がある。砂岩製のものは, 丸味をもった方形あるいは三角形をなし, 短辺のコーナーに貫通孔をもつ。包含層からは, 敲打によって方形に作られた石製品(179)のほかに, 柄杓状のもの(178)がある。これは周縁部を調整し, 断面が台状をなす。石棒は先端が丸いものと, 擋鉢状に凹ませたものが, KH-4, 6, 13から出土している。KH-9 aの床面からは, 緑色の安山岩を素材とした棍棒状の石製品が出土している(図III-49の42)。調整は肉厚の部分に敲打, それ以外の部分はわずかに研磨が施されている。また先端とわずかに反り気味の側縁部には挟りが作られており, 形態的に青龍刀形石器を連想させる。

土製品〔図IV-19の182~190〕：10点出土。包含層や住居跡覆土から, 土器片を利用した土製円盤やミニチュア土器が出土している。

遺構別出土石器一覧

	KH	#																														遺構外	計					
		1	2a	3	4	5a	5b	6	7	8a	8b	9a	9b	10	11	12	13	14	KP	1	5	15	16	18	21	24	26	27	28	29	30							
石	IA1																																1	1				
	# 2																																	1	1			
	# 3							2	1		5	3		2		1																		12	26			
	# 4a																																		1	1		
	# 4b																																			1	1	
	# 5			1				2	6	1	18	2	4	9	1	5						1									1				69	120		
隕	# 6	1		1			6	6	2	33	6	6	7	4	5											1								82	160			
	分類不能な破片																																		6	6		
石 俵またはナイフ	IB1									2	1																	1						6	10			
	# 2			3			3	2	1	4	3	3	3		1					1		1													30	54		
	# 3														1						1	1													5	8		
	# 4			1																		1	1													5	8	
分類不能な破片									3																										81	84		
石	IIA			1						1				1	1																				3	7		
	# B			1							1	1	1	1												1									4	10		
	# C					1																														3	4	
つまみ付きナイフ	III A1a											3	2																					1	18	24		
	# 1b											1																								2	3	
	# 1c			1				1			3	2																								1	8	
	# 2a											1	1																							1	2	
	# 2b											1																									1	
簀状石器	III B1	1						1								1																				3	6	
	# 2							2	1							1																				1	5	
	# 3									2																										2	4	
スクレーパー類	IV C1a		1	1		1	3	7	4	3	30	1	7	9	3	6									1					1	1			70	161			
	# 1b		1	1			1				3	2	2								1			1														
	# 2a			2							3	2		3																						34	51	
	# 2b			2						1	2	1		1																								
	# 3			2			1	1	1	8				3	1																					26	44	
	# 4						1			1	1	2			2										1						1					19	25	
分類不能な破片	# 5										1																									2	3	
	分類不能な破片																																			48	48	
石	IV A1		1	2				3		1	4																									31	42	
	# 2																																			1	1	
斧	IV B										1																										1	1
	V A1a			1				1	1		1	2					2																			2	10	
すり	# 1b	1		2	1			2	1	3	23		3	2	2	1					1		1	1							1				68	113		
	# 2		2		1			2			14	4	5	3																						114	145	
	# 3									1	2																									9	12	
たたき石	# 4	2		1			1		2	1				1	1															1					7	17		
	VB1			1		1		1		1	2	2	2	1	1	1																				19	32	
	# 2			2	3			2		2	6		2	1	1		2																			40	61	
砥石	# 3			1					2	5					3	1	2																			31	45	
	VI										1				2																					7	12	
石製品	VII A		3		5	4		6	1	6	16	1			1	1																				6	50	
	VII B		1	1								1			1	1	2																			4	12	
石製品 土製品	石製品					1		1	1	2			1	1																						4	11	
	土製品							1																												9	10	
計		10	10	30	8	2	4	46	34	28	191	36	36	54	18	36	6	1	1	2	1	1	2	1	1	2	3	1	3	3	2	1	890	1460				

3 遺構の構築時期及び遺跡の広がり

今回の調査によって、本遺跡から竪穴住居跡 14 軒と土壇 26 基が発掘された。これらの遺構は、調査区北端の斜面裾部と調査区中央部以南の台地上平坦地及びこれに続く南斜面に分布している。住居跡は径 3 m 未満から、長径約 14 m に及ぶものまであり、形状も楕円形・卵形・隅丸形状など様々である。このうち重複関係にあるものをみると、次のような新旧関係がとらえられる。

1 KH-5 b は KH-5 a の南半部を切って構築されている。2 KH-6 は KP-27 の一部と KP-31 の上半部を切って構築されている。3 KH-8 b は KH-8 a の覆土中に構築されている。4 KH-9 b は KH-9 a の覆土中に構築され、KP-30 は KH-9 a の北壁・床の一部を、KH-7 は KH-9 a の南壁・床をそれぞれ切ってつくられている。5 土層断面では不明瞭であったが、KH-10 は KH-7 の南端を切って構築されているものとみられる。

各遺構については、Ⅲ章でそれぞれの推定構築時期についてふれたが、出土遺物及び遺物の出土状態から構築時期をほぼ確定できるものは次のとおりである。

1. 調査区北斜面裾部の KH-3・5、中央平坦部以南の KH-7・9 a・10・11・13・KP-2・27 は、床面上から、I 群 b 類の土器が出土していることから、縄文時代中期中葉に構築された遺構と考えられる。2. 北斜面裾部の KH-1 と中央以南の KH-6・8 b・9 b・12・14・KP-5 は I 群 c 類の土器を床面上から出土しており、縄文時代中期後葉の遺構と考えられる。3. KP-30 は II 群の土器が多数出土しており、縄文時代後期前葉に掘りこまれたものと考えられる。

以上の構築時期の推定は、前述の重複関係と矛盾しない。このほかにも、3 軒の住居跡と 20 数基の土壇があるが、掘りこまれた層位及び覆土中の遺物からみて、すべて縄文時代中期中葉から末葉にかけてつくられた遺構と考えられる。KH-8 a は出土遺物から構築時期を判断できないが、形状等から、KH-8 b よりあまり古くない住居跡の可能性が高い。

土壇のうち KP-27 は、築底から痕跡程度であるが人骨の一部が確認されていることから、墓として掘りこまれたものと考えられる。このほかの土壇 25 基は、掘りこまれた目的を推定することはできない。しかし、調査区中央部の平坦地にある KP-16・20 及び KH-6 によって上半部を削平されている KP-31 は、径・深さともに他の土壇より大きく、とくに KP-16・20 は断面形がフラスコ状をなしていることから、他のものとは異なる目的をもって掘りこまれたものと推定される。

発掘された竪穴住居跡のうち、KH-6・8 a・8 b・9 a は、他の住居跡より規模が大きく、床・壁が非常に整然とつくられている。これに対して、他の 10 軒は比較的浅く、壁・床に凹凸が多い。前者の規模の大きい 4 軒の住居跡はいずれも調査区の中でもっとも高い位置にあり、天ノ川、日本海を眺望できる場所にあることから、それぞれの構築時期において、集落の中心的位置にあったことも考えられよう。

KH-9 a のような大型住居跡は、秋田県鹿角市の天戸森遺跡、青森県二戸町の荒谷 A 遺跡を始め、函館市の見晴町遺跡、今年度当センターが調査を行った函館市石川 1 遺跡など東北北部、北海道南部に発掘例がある。いずれも縄文時代中期前葉から中葉に位置づけられる住居跡で、規模・形状・柱穴の大きさと配列・地床炉が長軸に平行して等間隔に並んでいることなど、本遺跡の KH-9 a と共通する要素が多い。

KH-6・8 a・8 b のような卵形の住居跡は、南茅部町白尻 B 遺跡、八雲町柴浜遺跡などで多数発掘されており、縄文時代中期後葉に位置づけられている。

KH-6 と KH-7 から KH-10 にかけては、住居跡が埋まりきっており、地表に大きくはみが見られなかった。これに対して KH-8 a・b と KH-9 a は、KH-6 とほぼ同様の深さがあるにもか

かわらず、くぼみがほとんどみとめられなかった。遺物の出土状態からみて、これらの住居跡は、廃棄された後に人為的に埋められた可能性が大きい。

調査区南部のグリッドPライン以南では、遺構は発見されなかったが、I群a・b類とII群を主とする土器が多数出土した。ここは最大約30度の急斜面で、これらの遺物は上部から流れ落ちたものであろう。斜面北側は調査区中央平坦部の続きで、標高42mないし45m、本遺跡が立地する丘陵でもっとも高い部分である。

KH-9aは崖ぎわにあって東側の壁と床の一部は、崩れ落ちたものと考えられる。KP-30もこれと同様である。従って、縄文時代後期前葉までは、崖縁が現在よりさらに東側にあったことはまちがいない。しかし、崖下を流れる沢の位置、崖の高さなどから判断しても、崩落する以前の崖縁は現況よりも数mを超えない程度と考えられる。

これらのことと、遺物の出土分布を総合して考えると本遺跡の変遷は次のようにとらえられる。

本遺跡が立地する丘陵上では、縄文時代中期前葉から集落が形成され始めた。初めは、調査区南西側の斜面北側の平地が占地されていたが、中期中葉になると、調査区を含む丘陵上部の全域が利用されるようになった。前述した秋田県鹿野市の天戸森遺跡は、ほぼこの時期にあたる。報告者によるとこの遺跡は米代川右岸段丘上から北西方向に突き出した平地と比高が約40mの台地上に位置しており、地形図をみても本遺跡と同様の立地条件にあることがわかる。函館市見晴町遺跡についても同じことが指摘できるが、同時期に、同様の竪穴住居をつくった人々が、このように類似した土地に集落を形成したことは興味深い。

中期中葉になると本遺跡では、丘陵上の調査区に近い部分が占地されたようである。後期前葉の遺物は調査区南半の全域に出土しているが、遺構は崖縁のKP-28のみであることから、この時期には丘陵上の中央部と、KP-28付近の丘陵縁辺が利用されたものと考えられる。

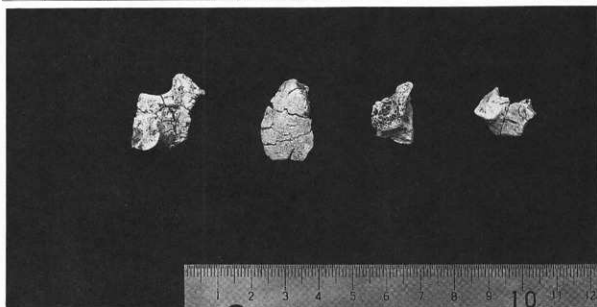
一方、調査区北側の斜面裾部は、縄文時代中期中葉から後葉にかけて利用されている。ここで発掘された6軒の住居跡と、調査区中央の平坦地以南の住居跡群が、どのような関連をもつものか、明らかではない。この両地域間の斜面ではほとんど遺物が出土していない。前述したように調査区は、この付近では、2～3mほどの幅しかなく、遺物包含層の多くが失われていることもあるが、少なくとも北側斜面中位のうち調査区に近い部分は、縄文時代中期から後期にかけて、利用されなかった可能性が大きい。しかし、グリッドH-11では、縄文時代晩期の土器が一個体出土していることから、この時期の遺構が北斜面中位にある可能性があろう。

動物遺存体について

表に動物遺存体一覧を掲載してある。住居跡 KH-9・KH-11 覆土より検出されたものである。とりわけ KH-9 住居跡の北側 (A・D 地区) に集中していた。調査中に肉眼で確認できたものはすべて土ごと取り上げた。骨片は大部分が細片で、白色化している。また骨片が混在する土には焼土粒・炭化物を多量に含んでいることから焼成を受けたものと考えられる。早稲田大学金子浩昌氏の鑑定の結果によると全て「シカ」の骨である。判別できた部位は、角・手足骨が大部分で、背見・肋骨は、ほとんどない。骨片が細いために部位の判別が難しいものは、重量のみを表わした。

動物遺存体一覧(fr: 破片, 近: 近以端, 遠: 遠以端)

遺構名	地区名・層位	種・部位など	重さ	破片	重さ	遺構名	地区名・層位	種・部位など	重さ	破片	重さ
KH-9	A・2層	シカ 中足骨1, 肋骨1	7.9g	fr.	8g	KH-9	D・2層	シカ		fr.	3.6g
※	A・2層	シカ		fr.	2.4g	※	D・2層	シカ 中乳, 中足1	1g	fr.	34g
※	A・2層	シカ		fr.	0.1g	※	D・2層	シカ 中手骨3	1.2g	fr.	27.6g
※	A・2層	シカ		fr.	0.9g	※		シカ 足趾骨?1	1.0g		
※	A・2層	シカ		fr.	0.1g	※	D・2層	シカ 足趾骨1, 中手骨片	3.5g	fr.	9.5g
※	A・D・S-ベルト	シカ		fr.	1.8g	※	D・1層	シカ		fr.	0.2g
※	2層	シカ		fr.	0.8g	※	F・6層	シカ		fr.	1.4g
※	B・2層	シカ 種子骨2, 末節骨1	4.1g	fr.	1.2g	※	F・3層	シカ 髌骨1, 上腕骨近1	4.2g		
※	C・2層	シカ 角片1, 基節骨遠1	3g	fr.	24g	※		中足骨5			
※	C・2層	シカ		fr.	7.6g	※	覆土	シカ 中手骨片	0.5g		
※	C・2層	シカ 角片1, 上腕骨遠1	2g	fr.	15g	※	S-N(ベルト) B, C地区	シカ 腕手趾骨1, 上腕右1	2.1g		
※	C・2層	シカ 骨片4	1g		9g	KH-11	A・W層	シカ 中手骨片	0.7g	fr.	0.3g
※	C・D・3層 E-W(ベルト)	シカ		fr.	0.7g	KH-9	D	シカ 顔毛根上歯石	4.0g		
※	D・2層	シカ? 末節骨片1, 基節骨近1	2g	fr.	17g	※	D・4層	シカ		fr.	1.2g



住居跡 KH-9 a 出土シカの骨片

小岱遺跡の古植生について

山田 悟郎

1 試料及び処理方法

ここで取扱った土壌試料は、昭和60年度に発掘された上ノ国町小岱遺跡の調査に際して、縄文時代中期の竪穴住居址KH-9aの床面近くの覆土である4層と(茶褐色腐植土)、KP-2の覆土中から発掘された土器(見晴町式土器)を充填していた茶褐色腐植土の2点である。

試料の処理は、土壌500gをピーカーにとりアルカリ処理-水洗-混酸処理-水洗-アルカリ処理-水洗-比重分離-水洗-アセトリシス処理-水洗-KF処理-水洗の順に行ない、各試料ごとのプレパラートを作成した。

プレパラートの検鏡にあたっては通常400倍で、必要に応じて1000倍で行なった。樹木花粉を200個以上計数するまでに出現した花粉・胞子を無作為に同定し計数することに努めたが全般に花粉・胞子の出現数は少なく、樹木花粉が200個以上に達した試料は無かった。したがって、表示にあたっては各プレパラートから検出された花粉・胞子の出現数を表にして示した。

2 分析結果

2点の試料から検出されたのは樹木花粉14属1科、草本花粉1属9科、胞子2科、形態分類胞子2種で、その他に未同定の花粉・胞子や、腐食され形態が変化して同定不能な花粉・胞子があった。

ここで出現した花粉・胞子の内訳と、想定される主な母植物は次の通りである。

樹木：*Picea* (トウヒ属；エゾマツ)、*Abies* (モミ属；トドマツ)、*Alnus* (ハンノキ属；ハンノキ・ケヤマハンノキ)、*Betula* (カバノキ属；シラカンバ他)、*Fagus* (ブナ属；ブナ)、*Carpinus* (クマシデ属；サワシバ他)、*Juglans-Pterocarya* (オニグルミ-サワグルミ属；オニグルミ・サワグルミ)、*Aesculus* (トチノキ属；トチノキ)、*Quercus* (コナラ亜属；コナラ・ミズナラ・カシワ)、*Ulmus* (ニレ属；ハルニレ・オヒョウニレ)、*Tilia* (シナノキ属；シナノキ・オオバボダイジュ)、*Acer* (カエデ属；イタヤカエデ・ハウチワカエデ・ヤマモミジ他)、*Magnolia* (モクレン属；オウノキ・コブシ)、*Phellodendron* (キハダ属；キハダ)、*Araliaceae* (ウコギ科；ハリギリ・タラノキ他)、*Hydrangea* (アジサイ属；ノリウツギ・ツルアジサイ)

草本：*Artemisia* (ヨモギ属；エゾヨモギ他)、*Carduoideae* (キク亜科；アキタブキ・コブスマソウ・エゾノコンギク・チシマアザミ他)、*Cichorioideae* (タンポポ科；ハチジョウナ・コウゾリナ)、*Ranunculaceae* (キンポウゲ科；カラマツソウ・アキカラマツ他)、*Polygonaceae* (タデ科；オオイタドリ・ウラジロタデ・エゾノギシギシ)、*Umbelliferae* (セリ科；ヤブジラミ・エゾニユウ・オオカサモチ他)、*Rosaceae* (バラ科；オニシモツケ・ナガボノシロワレモコウ他)、*Liliaceae* (ユリ科；バイケイソウ・オオウバユリ・ユキザサ他)、*Gramineae* (イネ科；ススキ・クマイザサ・エノコログサ他)、*Cyperaceae* (カヤツリグサ科；エゾアブラガヤ他)

胞子：*Osmundaceae* (ゼンマイ科；ゼンマイ・ヤマドリゼンマイ他)、*Lycopodiaceae* (ヒカゲノカズラ科；ヒカゲノカズラ他)

形態分類胞子：*Monolate type spore* (単条孔型胞子；オシダ・メシダ・シシガシラ・クサソテツ他)、*Trilite type spore* (三条孔型胞子)である。

KH-9 a の 4 層；樹木では、針葉樹の *Abies* と落葉広葉樹の *Alnus*・*Fagus*・*Juglans*・*Pterocarya*・*Quercus*・*Ulmus*・*Tilia*・*Acer*，草本では *Artemisia*・*Carduoideae*・*Ranunculaceae*・*Polygonaceae*・*Umbelliferae*・*Gramineae*，胞子では *Monolate type spore* が多い花粉化石群集が確認された。

樹木では *Alnus*・*Quercus*・*Ulmus* が，草本・胞子では *Artemisia*・*Gramineae* がそれぞれ優勢を示している。

KP-2 土器内；樹木では針葉樹の *Abies* と落葉広葉樹の *Alnus*・*Betula*・*Quercus*・*Ulmus*・*Tilia*，草本・胞子では *Artemisia*・*Carduoideae*・*Ranunculaceae*・*Polygonaceae*・*Umbelliferae*・*Gramineae*・*Monolate type spore* が多い花粉化石群集が確認された。

樹木では *Alnus*・*Quercus* が，草本・胞子では *Artemisia*・*Gramineae*・*Monolate type spore* が優勢を示している。

2 点の試料で確認された花粉化石群集はほぼ同様な構成を示すもので，落葉広葉樹の *Alnus*・*Quercus*・*Ulmus* と陽地性の草本を主としたものであった。

3 古植生について

2 点の土壌試料で確認された花粉化石群集から，縄文時代中期の小岱遺跡周辺の古植生は次のように推定される。

遺跡周辺にはハンノキ・シラカンバ・ブナ・オニグルミ・サワグルミ・ミズナラ・コナラ・ハルニレ・ホウノキ・コブシ・シナノキ・イタヤカエデ・ハウチワカエデ・キハダ等を主とした落葉広葉樹林が分布していた。遺構近くには日当りのよい場所を好む灌木のタラノキ・ノリウツギも生育していたようである。また，溼って肥沃な沢沿いにはトチノキが生育していた。

針葉樹のトドマツがこれらの広葉樹と混交していたか否かが問題となるが，混交していたのではなく背後の山地から飛来したものと考えられる。

生活の場となっていた，林が切り開かれた空間にはオオヨモギ・アキタブキ・ハンゴンソウ・チシマアザミ・カラマツソウ・アキカラマツ・オオイタドリ・エゾニュウ・オニシモツケ・ススキ・エノコログサ・チシマザサ・ゼンマイ・シダ類からなる陽地性の草本群落が繁っていたと推定できる。

これらの森林植生はブナ・ミズナラ林が分布する上ノ国町周辺で普通に見られる植生であるが，古代人による構造材や薪炭材確保のための伐採により遺跡周囲の森林植生が破壊され，一部に二次林が形成されていたことが想定される。

日当りのよい二次林は，古代人に植物性食料となった堅果類を提供していたと推定することができる。小岱遺跡からは澱粉に富んだドングリが実るミズナラ・コナラとトチノキ，脂肪に富んだ堅果が実るオニグルミの花粉が出現している。沢沿いに多く生育するトチノキは別として，オニグルミ・ミズナラ・コナラは日当りがよい二次林に多く生育する樹木である。

渡辺 (1985) によるとドングリのアク抜き技術は縄文時代前期に，トチノキのアク抜き技術は中期末に東北地方北半で開発されたと推定されている。東北地方北半と文化圏を共有していた北海道西南部にアク抜きの技術が伝播していたことは当然のことと考えられ，これらの堅果が食用されていたことは確かであろう。

古代人による原植生の破壊は植物性食料という副産物を生み出したのである。

4 参 考 文 献

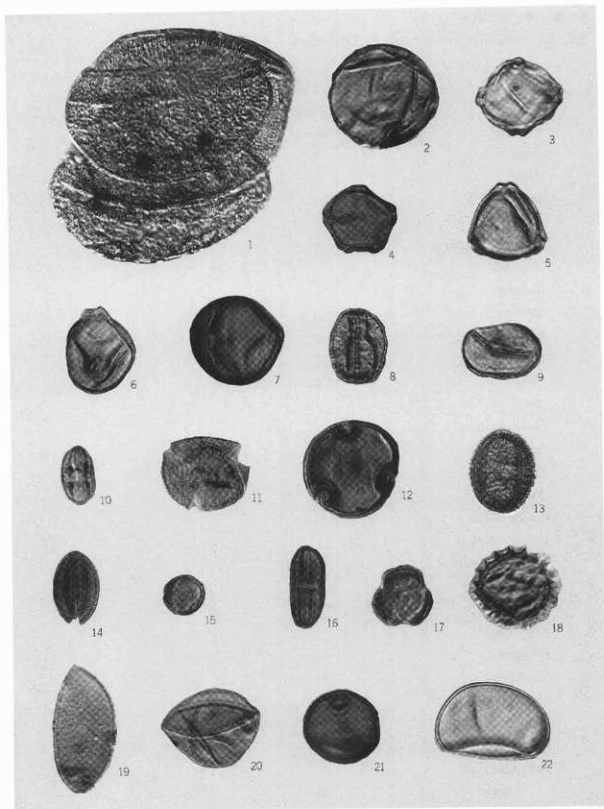
渡辺 誠 (1985)「縄文時代の食生活」『考古学ジャーナル』No.256

小袋遺跡から出土した花粉化石・胞子化石数

KP-2 土器内

KH-9 a 4層

<i>Abies</i>	3	5	
<i>Alnus</i>	11	16	
<i>Betula</i>	3	2	
<i>Fagus</i>	2	6	
<i>Juglans-Pterocarya</i>	1	8	
<i>Aesculus</i>	—	1	
<i>Carpinus</i>	—	1	
<i>Quercus</i>	18	25	
<i>Ulmus</i>	6	13	
<i>Magnolia</i>	1	3	
<i>Tilia</i>	6	9	
<i>Acer</i>	2	5	
<i>Phellodendron</i>	—	2	
Araliaceae	1	1	
<i>Hydrangea</i>	—	2	
<i>Artemisia</i>	51	95	
Carduoideae	14	19	
Cichorioideae	1	1	
Ranunculaceae	11	21	
Polygonaceae	16	35	
Umbelliferae	8	15	
Rosaceae	1	5	
Liliacea	—	2	
Gramineae	81	153	
Cyperaceae	—	1	
Osmundaceae	3	5	
Lycopodiaceae	1	1	
Monolate type			
spore	45	56	
Trilite type			
spore	1	3	
合 計	287	511	(箇)
Undetermined	7	9	



小袋遺跡から産出した花粉・孢子

1. *Abies*, 2. *Juglans-Pterocarya*, 3-4. *Alnus*, 5-6. *Betula*, 7. *Fagus*, 8. *Quercus*, 9. *Ulmus*, 10. *Aesculus*, 11. *Acer*, 12. *Tilia*, 13. *Phellodendron*, 14. Polygonaceae, 15. Ranunculaceae, 16. Umbelliferae, 17. *Artemisia*, 18. Carduoideae, 19. Liliaceae, 20-21. Gramineae, 22. Monolate type spore, (1~22は約700倍) (13, 5, 7, 13, 17, 20はKH-9a, 4層産出, 4, 6, 14, 16, 21, 22KP-2土器内産出)

引用・参考文献

- 秋元信夫ほか(1984)『天戸森遺跡』鹿角市教育委員会
大場利夫・松崎岩徳(1956)『松山南部の遺跡』上ノ国町教育委員会・江差町教育委員会
大場利夫・松崎岩徳・渡辺兼庸(1961)『上ノ国遺跡』上ノ国町教育委員会
大場利夫・純子千代志(1965)『函館市郊外煉瓦台遺跡』『北方文化研究報告』第20輯 北海道大学
大場利夫・野村崇・加藤邦雄・上野秀一・羽賀憲二(1979)『小砂子遺跡』上ノ国町教育委員会
大沼忠春編(1976)『元和』乙部町教育委員会
大沼忠春編(1977)『続元和』乙部町教育委員会
久保 泰ほか(1983)『白坂』松前町教育委員会
児玉作左衛門・大場利夫・武内取太(1968)『サイベ沢遺跡』市立函館博物館
齊藤 傑・兵江敏文(1974)『松前町大津遺跡発掘調査報告書』松前町教育委員会
須藤 隆(1985)『東北地方における縄文集落の研究』『東北大学研究報告』1 東北大学文学部考古学研究会
高橋正勝・森田知忠(1967)『サイベ沢B遺跡調査報告書』亀田町教育委員会・市立函館博物館
高橋正勝・(1974)『知内町涌元遺跡出土の土器と北海道西南部の縄文時代後期前半について』『北海道の文化財』
29号 北海道文化財保護協会
高橋正勝(1981)『北海道南部の土器』『縄文文化の研究』第4巻 雄山閣
武内取太ほか(1972)『大安在B遺跡』上ノ国町教育委員会
田原良信・鈴木正語(1985)『サイベ沢遺跡』函館市教育委員会
千代 肇(1972)『涌元遺跡』知内町教育委員会
名取武光・峰山 巖(1958)『入江貝塚』『北方文化研究報告』第13輯 北海道大学
松崎岩徳(1956)『上ノ国村史』上ノ国町
松崎岩徳(1962)『続上ノ国村史』上ノ国町
松下 直編(1974)『西股』北海道第四紀研究会
三浦孝一・柴田信一(1983)『八雲町栄浜1遺跡発掘調査報告書』八雲町教育委員会
峰山 巖・大島直行ほか(1975)『森越』知内町教育委員会
峰山 巖・大島直行・佐藤隆広・内田祐治ほか(1977)『栄浜遺跡』乙部町教育委員会
峰山 巖・大島直行ほか(1979)『知内川中流域の縄文時代遺跡』知内町教育委員会
村越 深(1974)『円筒土器文化』雄山閣
森 広樹(1980)『オカシ内・元和15遺跡』乙部町教育委員会
——(1985)『湯の里遺跡群』財団法人北海道埋蔵文化財センター

この報告書は、北海道松山支庁のご了解を得て増刷したものです。

財団法人 北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第30集

上ノ国町 小岱遺跡

—— 八幡野第一地区道営農免農道整備事業用地内
埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

昭和 61 年 3 月 29 日発行

編集・発行 財団法人北海道埋蔵文化財センター

札幌市中央区南26条西11丁目

TEL (011)561-3131

印刷 刷 高 速 印 刷 セ ン タ ー

札幌市西区曙 2 条 5 丁目 2-48

TEL (011)683-2231

